岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　202

仏生田遺跡２
中撫川遺跡２

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査Ⅱ

２００６

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　中撫川遺跡４区　溝25出土銅鋺　左：底部外面　右：底部内面

2　仏生田遺跡１区　井戸２出土土器

序

一般県道吉備津松島線道路改築事業は、岡山県南部における有数の遺跡密集地帯である足守川中流域で計画されました。これに伴って実施した発掘調査の成果につきましては、既に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182』として刊行したところですが、路線内にはまだ一部未調印の地区が残されました。この報告書は、その地区の調印後に実施した発掘調査の記録です。

今回は、小面積の発掘調査ではありましたが、それぞれにあらたな知見をもたらし、古代吉備の歴史を解明するための史料をいささかなりとも厚くすることができました。仏生田遺跡では弥生時代の井戸が検出され、集落の存在をより確実なものとしましたし、中撫川遺跡では、奈良時代以前のものとしては県下４例目となる銅鋺が出土し、この遺跡の重要性をさらに高めることとなりました。

中撫川遺跡は、これまでの川入遺跡の一部にあたります。山陽新幹線や県道川入厳井線の建設に伴う発掘調査で、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落と考えられていました。最近になって、岡山市教育委員会によって実施された新幹線南側の発掘調査において、古代の掘立柱建物群や井戸が検出され、岡山県最古の軒丸瓦が出土するなど、官衙的な色彩が濃厚となってきました。先の吉備津松島線の調査でも、掘立柱建物群や多量の京都産緑釉陶器、それに土馬・円面硯・銅印の鋳型などがみつかり、公的な国の港、国府津である可能性が議論されるようになってきました。この津には寺院が伴っていたようで、今回出土した銅鋺はそこで使用されていたものかもしれません。ともかくも、銅鋺の出土は遺跡の官衙的性格を補強するものにちがいありません。

また、弥生時代から古墳時代にかけての溝から多量に出土した土器は、この地域における土器の内容や変遷をさらに具体的に示してくれるとともに、山陰・四国・近畿地方などとの交流を明らかにする資料として欠くことができません。

ささやかな報告書ではありますが、本書が文化財の保護・保存に活用されますとともに、地域の歴史を解明するための資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、旧地権者の方をはじめ、作業に御尽力いただきました地元の方々に厚くお礼を申し上げます。また、円滑な調査の実施について御協力を賜りました、岡山県備前県民局の関係各位にも深謝いたします。

平成18年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　松　本　和　男

例　　言

1　本書は、一般県道吉備津松島線道路改築事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県岡山地方振興局（現岡山県備前県民局）建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した仏生田（ぶしょうでん）遺跡１区の一部、同遺跡４区、中撫川（なかなつかわ）遺跡４区の発掘調査報告書である。

同事業に伴う発掘調査については、その大部分が平成16年３月に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182』として刊行されたところであり、その残余部分をなす。

2　仏生田遺跡１区は岡山市納所字仏生田224番地、仏生田遺跡４区は岡山市納所字仏生田165番地の１、中撫川遺跡４区は岡山市中撫川字法万寺437番地の１、438番地の１に所在する。

3　発掘調査は、平成16年度に岡本寛久・稲谷知子が担当して実施した。調査面積は仏生田遺跡１区が86㎡、仏生田遺跡４区が680㎡、中撫川遺跡は230㎡で、合計996㎡となる。

4　本書の作成は平成16・17年度に実施し、岡本・稲谷が担当した。

5　本書の執筆は岡本・稲谷が担当し、全体の編集は岡本が行った。

6　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

7　本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高である。方位は真北を示し、平面直角座標第Ｖ系の座標北である。抄録に記載した経緯度は日本測地系に準拠している。

2　各調査区の位置表示を統一するため、第５図に掲載するように、Ｘ＝－148600（日本測地系）線をＡ線、Ｙ＝－45400（日本測地系）線をａ線とし、これを基準に南と東側へ100ｍの方眼を組み、Ｘ軸は北からアルファベット大文字、Ｙ軸は西からアルファベット小文字を順にふり、さらにその間を北から、あるいは西からの距離（単位ｍ）で示した。ｅ50線ならばＹ＝－44950線を表す。

日本測地系と世界測地系の誤差はＸ座標値で＋343.51ｍ、Ｙ座標値で－246.571ｍである。

3　遺構・遺物の縮尺は図下に明示するが、種別で統一している。　**遺構**　遺構配置図：１／200　調査区土層断面・大規模溝断面・掘立柱建物：１／60　井戸・土壙・小規模溝断面：１／30

遺物　土器・木製品：１／４　　金属製品・土製品：１／３　　石製品：１／２，１／３

4　遺構の名称は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182 』での調査区ごとの通し番号を継承し、隣接調査区で同一遺構と判断できる場合は同一名称、新規のものは続きの番号を種別に付した。

5　遺物番号については新たに１から始め、土器以外については、番号の前に素材を示す意味で、次の略号を付した。　木製品：Ｗ　　金属製品：Ｍ　　土製品：Ｃ　　石製品：Ｓ

6　掲載した土器のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

7　土層断面図に記載した土色は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

8　第２図は国土地理院発行の１/25,000地形図「倉敷」「総社東部」を複製・加筆したものである。

9　本書に用いた時代区分は一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用する。古墳時代後期は須恵器の出現しはじめる５世紀中頃から７世紀前半頃までとし、以後を古代とする。

本　文　目　次

序
例言
凡例
目次
第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 5
　第１節　発掘調査の契機と経過 …… 5
　第２節　報告書作成の経過 …… 8
　第３節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 9
第３章　調査の概要 …… 11
　第１節　仏生田遺跡１区 …… 11
　　１　調査区の概要 …… 11
　　２　弥生時代の遺構・遺物 …… 12
　　３　古墳時代～古代の遺構・遺物 …… 17
　　４　中世以降の遺構・遺物 …… 17
　第２節　仏生田遺跡４区 …… 18
　　１　調査区の概要 …… 18
　　２　弥生時代の遺構・遺物 …… 20
　　３　古墳時代～古代の遺構・遺物 …… 22
　　４　中世以降の遺構・遺物 …… 25
　第３節　中撫川遺跡４区 …… 28
　　１　調査区の概要 …… 28
　　２　弥生時代の遺構・遺物 …… 29
　　３　古墳時代～古代の遺構・遺物 …… 37
　　４　中世以降の遺構・遺物 …… 51
　第４節　小結 …… 52
　　１　発掘調査の成果 …… 52
　　２　溝25出土の銅鋺について …… 53
報告書抄録

図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　調査遺跡周辺の主要遺跡分布図 …… 2
第３図　調査地区位置図 …… 5
第４図　仏生田遺跡４区中央トレンチ位置図　6
第５図　発掘調査区区割図 …… 10
第６図　仏生田遺跡１区東壁土層断面図 …… 11

第７図　仏生田遺跡１区弥生時代遺構配置図　11
第８図　井戸２・出土遺物（１）……12
第９図　井戸２出土遺物（２）……13
第10図　井戸２出土遺物（３）……14
第11図　溝３・出土遺物　……16
第12図　仏生田遺跡１区包含層出土弥生時代遺物　……16
第13図　仏生田遺跡１区古墳時代遺構配置図　17
第14図　溝12　……17
第15図　仏生田遺跡１区中世遺構配置図　……17
第16図　仏生田遺跡１区包含層出土古墳時代～近世遺物　……18
第17図　仏生田遺跡４区中央トレンチ東壁土層断面図　……19
第18図　仏生田遺跡４区弥生時代遺構配置図　20
第19図　溝23　……20
第20図　仏生田遺跡４区包含層出土弥生時代遺物　……21
第21図　仏生田遺跡４区古代遺構配置図　……22
第22図　土壙10（左）・11（中）・12（右）……23
第23図　土手状遺構周辺土層断面図　……23
第24図　仏生田遺跡４区包含層出土古墳時代～古代遺物　……24
第25図　仏生田遺跡４区中世遺構配置図　……25
第26図　柵状遺構　……26
第27図　溝24　……26
第28図　仏生田遺跡４区包含層出土中世～近世遺物　……27
第29図　中撫川遺跡４区中央トレンチ位置図　28
第30図　中撫川遺跡４区中央トレンチ南壁土層断面図　……29
第31図　中撫川遺跡４区弥生時代遺構配置図　30
第32図　溝49　……30
第33図　溝50　……30
第34図　溝51　……30
第35図　溝52　……30
第36図　溝５・12・24・25・49　……31
第37図　溝５下層出土遺物（１）……33
第38図　溝５下層出土遺物（２）……34
第39図　溝５上層ほか出土遺物　……35
第40図　溝５出土古墳時代遺物　……36
第41図　調査区東端出土遺物　……36
第42図　中撫川遺跡４区出土弥生時代遺物　…37
第43図　中撫川遺跡４区古墳時代遺構配置図　37
第44図　土壙33・出土遺物　……38
第45図　溝12下層出土遺物（１）……38
第46図　溝12下層出土遺物（２）……39
第47図　溝12下層出土遺物（３）……40
第48図　溝12下層出土遺物（４）……41
第49図　溝12上層ほか出土遺物　……42
第50図　大溝出土遺物　……43
第51図　中撫川遺跡４区古代遺構配置図　……44
第52図　掘立柱建物20　……44
第53図　溝25出土銅鋺　……45
第54図　溝25出土遺物（１）……46
第55図　溝25出土遺物（２）……47
第56図　溝25出土遺物（３）……48
第57図　溝25出土遺物（４）……49
第58図　柱穴群出土遺物　……51
第59図　中撫川遺跡４区出土古代遺物　……51
第60図　中撫川遺跡４区出土古代～中世遺物　51
第61図　岡山県内銅鋺出土地分布図　……53

図　版　目　次

巻頭図版
1　中撫川遺跡４区　溝25出土銅鋺　左：底部外面　右：底部内面
2　仏生田遺跡１区　井戸２出土土器

図版１　仏生田遺跡１区
1　現耕作土除去後調査区全景（南から）
2　溝12（東から）
3　弥生時代遺構全景（南から）

図版２　　仏生田遺跡１区
　１　溝３（北から）
　２　井戸２遺物出土状況（東から）
　３　井戸２完掘状況（東から）
図版３　　仏生田遺跡１区
　１　井戸２出土遺物
図版４　　仏生田遺跡１区
　１　井戸２(３～27)ほか出土遺物
図版５　　仏生田遺跡４区
　１　調査前全景（南東から）
　２　地上げ前土取り状況（北西から）
　３　溝24・柵状遺構東半（西から）
図版６　　仏生田遺跡４区
　１　柵状遺構西半（西から）
　２　古代遺構全景（北西から）
　３　土壙10（南東から）
図版７　　仏生田遺跡４区
　１　土壙11（南東から）
　２　土壙12（南西から）
　３　溝23南半（南西から）
図版８　　仏生田遺跡４区
　１　仏生田遺跡４区出土遺物
図版９　　中撫川遺跡４区
　１　北西区古代柱穴群・大溝（南から）
　２　同上（東から）
　３　北西区大溝遺物(285･295)出土状況（東から）
　４　南西区古代柱穴群・大溝（南から）
図版10　　中撫川遺跡４区
　１　大溝（西から）
　２　土壙33（東から）（左）
　３　南西区焼土塊包含柱穴（南西から）（右）
　４　南西区大溝遺物(289)出土状況（西から）
　５　南西区大溝遺物(294･297)出土状況（北から）
図版11　　中撫川遺跡４区
　１　北東区溝25（南から）
　２　北東区溝５・12と南東区溝25（南から）
　３　南東区溝25（南から）
図版12　　中撫川遺跡４区
　１　南東区溝24（南から）
　２　北東区溝12（南から）
　３　北東区溝５（南から）
図版13　　中撫川遺跡４区
　１　南東区溝５・12遺物出土状況（南西から）
　２　南東区溝12遺物出土状況（南から）
　３　南東区溝５遺物出土状況（南から）
図版14　　中撫川遺跡４区
　１　北東区北壁溝12土層断面（南から）
　２　中央トレンチ溝12土層断面（北から）
　３　北東区北壁溝５・25土層断面（南から）
図版15　　中撫川遺跡４区
　１　中央トレンチ溝５土層断面（北から）
　２　溝５（右）・溝12（左）（南から）
　３　北東区（上半）溝50（南から）
図版16　　中撫川遺跡４区
　１　溝51・溝52（西から）
　２　北東区溝50（南西から）
　３　南東区溝49（南から）
図版17　　中撫川遺跡４区
　１　溝５出土遺物
図版18　　中撫川遺跡４区
　１　溝５・微高地東端・土壙33・溝12出土遺物
図版19　　中撫川遺跡４区
　１　溝12出土遺物
図版20　　中撫川遺跡４区
　１　溝12・大溝出土遺物
図版21　　中撫川遺跡４区
　１　溝25出土遺物
図版22　　中撫川遺跡４区
　１　溝25・包含層出土遺物
図版23　　中撫川遺跡４区
　１　溝24・25出土獣骨　ニホンジカ
図版24　　中撫川遺跡４区
　１　溝25出土獣骨　ニホンジカ　イヌ　ウシ

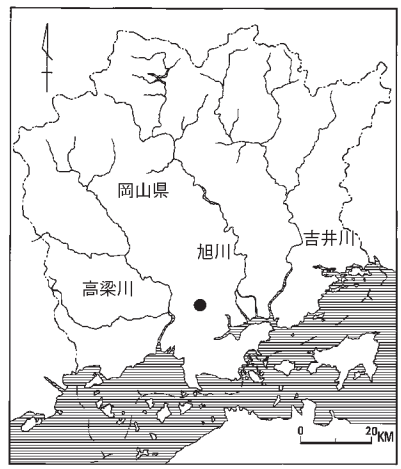
第１章　遺跡の位置と環境

本書で報告する仏生田遺跡（３）・中撫川遺跡（６）は、岡山県の南部中央、足守川中流域の東岸に位置する。行政区画上は岡山市の西端にあたるが、地形的には総社平野の東端を占め、原始・古代には高梁川の分流が総社平野を西から東に貫流し、さらに現在の足守川に沿って南流していたと考えられている。足守川は吉備高原の高陣山に発し、岡山市足守で平野部に至り、岡山市三手で血吸川と前川を合わせて砂川に合流して南進する。現在では、岡山市古新田で笹ケ瀬川に合流し、児島湾に注ぐが、中世頃までは海が入り込み、倉敷市下庄から岡山市庭瀬あたりに河口があったとみられている。

足守川中流域にあたる岡山市三手から加茂、吉備津、川入、そして倉敷市矢部から上東一帯の平野部には多くの微高地が形成されている。遺跡の所在するこれらの微高地は大きく二群に分けることができる。一つはかつての河口に形成された倉敷市上東から岡山市川入地域の微高地群で、上東遺跡(16)、新邸遺跡（１）、川入遺跡（12）などが所在する。本書で報告する２遺跡もこの群に含まれる。もう一つは河口から少し上流にあたる岡山市三手から高塚、加茂、倉敷市矢部地域の微高地群で、津寺遺跡（40)、矢部南向遺跡（44)、加茂政所遺跡（39）などが所在する。この南北に広がる平野部の東西には低丘陵が連なっているが、この丘陵上には大形の墳丘墓をはじめ、多くの古墳の存在が認められている。とくに、東側の丘陵は独立丘陵で、古代から「吉備の中山」と呼ばれ、北西裾には吉備一宮とされる吉備津神社（49）が鎮座している。

この地域における最も古い生活の痕跡は旧石器時代に遡る。足守川西岸の丘陵上に所在する甫崎天神山遺跡（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』　岡山県教育委員会　1994年、以下『県報』と略す。）や雲山遺跡（『県報89』　1994年）からはナイフ形石器が出土している。寒冷な旧石器時代から温暖な気候となった縄文時代には海水面の上昇が始まり、この平野部一帯に海が入り込んでくる。足守川西岸の丘陵裾に立地する矢部貝塚（『県報82』　1993年）では、中期後半に形成された貝層の大半がヤマトシジミで、これにカキ、ハイガイなどが混じることから、近接して砂泥質の海が広がっていたと考えられる。こうした自然環境は、河川による沖積化の進行はあるものの、新邸遺跡（近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』８　1963年）や加茂政所遺跡（『県報138』　1999年）における弥生時代中期・後期の貝塚の検出からみて、古墳時代頃までは大きな変化はなかったものとみられる。

縄文時代には、早期の矢部奥田遺跡（『県報82』　1993年)、中期から後期にかけての矢部貝塚・黒住遺跡（『県報89』　1994年)、後期の西尾貝塚（26）（藤田憲司「周辺の遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年)、後期から晩期にかけての甫崎天神山遺跡など、丘陵上から裾部に立地する遺跡がほとんどであるが、後期になると津寺遺跡（『県報98』　1994年）のような微高地上の遺跡も現れるようになる。



第１図　遺跡の位置（黒丸印）

弥生時代になると、微高地上に多くの遺跡が形成されるよ

1　新郎遺跡　2　郷ノ溝遺跡　**3　仏生田遺跡**　4　掛無堂遺跡　5　川入遺跡　**6　中撫川遺跡**　7　新郎貝塚　8　日畑橋遺跡
9　カキナシ堂遺跡　10　散布地　11　散布地　12　川入遺跡　13　才楽遺跡　14　岩倉遺跡　15　荒神古墳　16　上東遺跡
17　庄城跡　18　平松城跡　19　散布地・古墓群？　20　庭瀬川崎遺跡　21　撫川城・庭瀬城跡　22　楯築遺跡　23　王墓山古墳群
24　日畑廃寺　25　日畑城跡　26　西尾貝塚　27　散布地　28　館跡　29　散布地・古墳　30　真城寺裏山古墳　31　散布地
32　杉尾古墳群　33　吉備津杉尾西遺跡　34　吉備津奥田遺跡　35　鼓山古墳群・鼓山城跡　36　勝負谷古墳群ほか
37　観音山古墳群　38　高松原古才・立田遺跡　39　津寺三本木・津寺一軒屋・加茂政所遺跡　40　津寺遺跡　41　幸利神社遺跡
42　加茂城跡　43　散布地　44　加茂矢部南向遺跡　45　惣爪寺・塔跡　46　高田遺跡　47　散布地　48　吉野口遺跡ほか
49　吉備津神社・吉備津神社境内古墳　50　伝賀陽氏館跡　51　東山遺跡ほか　52　如真堂遺跡　53　北浦古墳群
54　高麗廃寺ほか　55　中山茶臼山古墳　56　三坑古墳群　57　散布地　58　矢藤治山弥生墳丘墓　59　散布地　60　山神下古墳群
61　奥谷古墳群　62　向山古墳群　63　八幡神社貝塚　64　祭祀遺跡

第２図　調査遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）

うになる。前期の集落の実態はなお明確ではないが、津寺遺跡（『県報116』 1997年）、岩倉遺跡（14）、高田遺跡（46）（鎌木義昌「高田遺跡」『岡山県史』第18巻　岡山県　1986年、以下『県史』と略す。）、川入遺跡（『県報２』 1974年）などで遺物が認められることから、小規模な集落が点在していたものと思われる。中期になると先の遺跡に加え、加茂政所遺跡、津寺三本木遺跡（39）（『県報142』 1999年）、加茂Ｂ遺跡（『県報94』 1995年）、矢部南向遺跡（『県報94』 1995年）、新邸遺跡、吉野口遺跡（48）（草原孝典ほか『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997年）、上東遺跡（『県報２・16・157・158』 1974・1977・2001・2001年）など、遺跡数の増加が著しい。多くの遺跡は後期で拡大し、さらに古墳時代にまで続く。

中期の後半には、微高地の遺跡に対し、矢部奥田遺跡、矢部堀越遺跡（『県報82』 1993年）、前池内遺跡（『県報89』 1994年）、後池内遺跡（『県報89』 1994年）、雲山遺跡（『県報89』 1994年）、女男岩遺跡（間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年）など、丘陵上あるいはその裾部に小規模な、しかも短期間の集落を形成する遺跡が急増する。軍事的緊張関係の高まりを示す高地性集落の出現時期と重なるようにも思われ、その社会的背景が注目される。

後期になると55軒の住居からなる津寺遺跡（『県報90・98・104・116・127・143』 1994・1995・1996・1997・1998・1999年）を始め、加茂政所遺跡、高塚遺跡（『県報150』 2000年）、矢部南向遺跡、やや離れるが上東遺跡など、拠点的な集落が形成される。これらの拠点集落は高塚遺跡で銅鐸や貨泉、加茂政所遺跡で銅釧、矢部南向遺跡で小銅鐸や銅鏡などの青銅器を持ち、加茂Ａ遺跡（『県報94』 1995年）や加茂Ｂ遺跡では朱に関わる遺物をもつなど、他地域の集落に比較して優位性が見られる。また、上東遺跡では船着き場とおぼしき遺構も検出されている（『県報157』 2001年）。

さらに、集落のみならず、楯築弥生墳丘墓（22）（近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会　1992年）、鯉喰神社墳丘墓（平野泰司・岸本道昭「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』22　2000年）、雲山鳥打墳丘墓（近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『県史』）、女男岩墳丘墓（間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年）、矢藤治山墳丘墓（58）（近藤義郎編『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓調査団　1995年）など、大形の墳丘墓が集中することからも、かつて吉備と呼ばれた地域の中枢であった可能性が強い。

古墳時代前半期の集落は弥生時代後期の集落から継続しており、しかも250軒を超える住居からなる津寺遺跡のように拠点集落の発展が窺われる。これらの集落では、弥生時代終末から、近畿地方や東海地方など、各地域の土器が出土している。吉備の中枢勢力として物流をも掌握していたと思われる。しかしその政治勢力の首長墳は以外に少なく、矢部大坑古墳（宇垣匡雅「矢部大坑古墳」『前方後円墳集成』中国四国編　山川出版社　1991年）と中山茶臼山古墳（55）（近藤義郎「中山茶臼山古墳」『県史』）があるにすぎない。足守川流域では中山茶臼山古墳に続き佐古田堂山古墳（西川宏「佐古田堂山古墳」『県史』）が、続いて吉備最大の造山古墳（西川宏「造山古墳」『県史』）が築造される。このあと小造山古墳（中田啓司・近藤義郎「小造山古墳」『総社市史』考古資料編　総社市　1987年）が造られるが、これを最後に足守川流域からは大形の首長墳は姿を消す。

中期の集落は以外に少なく、高塚遺跡や津寺遺跡、三手遺跡（『県報90』 1994年）などがあるにすぎない。しかし、高塚遺跡や津寺遺跡からは朝鮮半島系の遺物が多く出土し、初期のカマドを作り付けた竪穴住居なども認められる。造山古墳の陪塚の一つである榊山古墳（島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』３　岡山県史編纂室　1982年、西川宏「榊山古墳」『県史』）から

は馬形帯鉤や陶質土器が出土しているが、渡来系の人々が足守川中流域に居住していたことが推定される。中撫川遺跡（川入遺跡）でも、かつて大溝から舶載品とみられる陶質土器が出土している（『県報２』 1974年、伊藤晃・島崎東「中国地方」『日本陶磁の源流』柏書房　1984年）。

後期になると周辺の丘陵上には多くの古墳が築かれる。その多くは前内池古墳群（『県報89』 1994年）や王墓山古墳群（23）（間壁忠彦・間壁葭子ほか『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年）などで明らかにされているような、横穴式石室をもつ小規模な古墳であるが、大形の石室に家形石棺を収め、鏡や馬具が副葬された王墓山古墳（山本雅靖・間壁忠彦「王墓山古墳」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年）も存在する。７世紀になると古墳は減少するが、ごく一部の有力氏族はなお古墳を造り続けている。二子14号墳（『県報81』 1993年）は一辺13ｍの外護列石をめぐらす２段築成の方墳で、終末期古墳の一例である。

一方、これとあい前後して日畑廃寺（24）（小野雅明・藤原好二・福本明『日畑廃寺』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告11　倉敷市教育委員会　2005年）が建立される。この地域における有力首長層の仏教の受容を示すとともに、権威の表象の変化を物語るものであろう。有力首長層は中央政権によって官人として組み込まれていくが、前内池古墳（『県報89』 1994年）の石室から出土した「官」字印の押された須恵器はこのことを如実に物語っている。なお、日畑廃寺などの寺院の瓦を焼成した二子御堂奥瓦窯跡（『県報２』 1974年）が二子14号墳の所在した丘陵裾に築かれている。

古代の足守川中流域は備中国の東端に位置し、都宇郡に属していた。都宇郡は４郷からなる小郡で、仏生田遺跡・中撫川遺跡は撫河郷に属していたものと推定される。仏生田遺跡の北西、足守川に接して惣爪廃寺（45）（永山卯三郎「津寺址」『岡山縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第五冊　1925年）があるが、その北側にはほぼ東西に古代山陽道が推定されている。足守川西岸の山陽道沿いには津峴駅に比定されている矢部廃寺（間壁忠彦・間壁葭子『倉敷の古代』倉敷考古館　1972年）がある。津寺遺跡からは、南北124ｍ、東西94ｍの二重の溝で区画された掘立柱建物群が発見されている（『県報127』 1998年）。８世紀に建てられたと考えられ、津寺が交通の要衝であることから、物流の拠点として官衙的な機能が推定されている。集落については不明な点が多いが、津寺遺跡、吉野口遺跡、矢部南向遺跡、東山遺跡（51）（乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』12　1990年）などで掘立柱建物がみられる。この東山遺跡の北西に接して、この地方の有力氏族で、吉備津神社の神官を務めた賀陽氏の居館跡とされる遺跡（50）（『岡山市埋蔵文化財センター年報』２　岡山市教育委員会　2003年）が存在する。また、津寺遺跡では、６世紀末から７世紀初頭に造られた大規模な護岸施設が築かれている（『県報98』 1995年）。この施設は奈良・平安時代に機能していたもので、水利管理や前述の官衙や集落の保護をはたしていたものと推定されている。

中世の遺跡は高塚遺跡、津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、三手遺跡、足守川矢部南向遺跡など、多くの遺跡で集落を構成する遺構が検出されている。このうち津寺遺跡や三手遺跡などでは、溝で区画された屋敷地のなかに建物群がみられるほか、輸入陶磁器を副葬する土壙墓も散見されることから、やや上位の農民層の集落ではないかと考えられる。この足守川中流域は、総社市井尻野の高梁川に設けられた湛井堰から取水する湛井十二ヶ郷用水の潅漑地域にあたる。十二ヶ郷用水の起源は平安時代初期にさかのぼる可能性があるが、仏生田遺跡・中撫川遺跡のある足守川中流東岸は室町時代以降に水路が開発されたとされる（藤井駿・加原耕作『備中湛井十二箇郷用水史』備中湛井十二箇郷組合　1976年）。現在の水田地帯の景観はこの室町時代以降に形成されたものと考えられよう。　（岡本）

第２章　調査の経緯

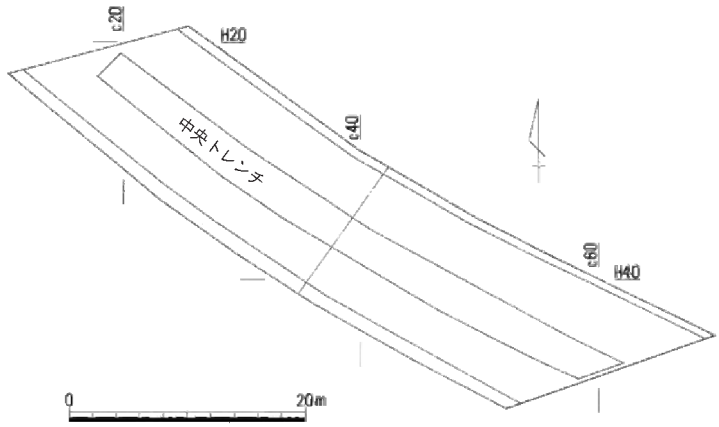
第１節　発掘調査の契機と経過

一般県道吉備津松島線の改築工事に伴う発掘調査は、平成12年度から開始され、平成14年度で路線内の大部分については調査を終了した。しかし、なお一部、用地買収の未調印箇所を残し、また、山陽新幹線の橋梁下部分についても、ＪＲ西日本株式会社との協議が結論を得ていなかった。このような中、調査終了部分については報告書の作成作業に着手することとなり、平成14年度に通年をかけて作業が実施され、翌年度には『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182 』として刊行された。

平成15年度に入り、未調印箇所についての交渉が妥結をみることとなり、一部工事も開始された。新たに調印された仏生田遺跡１区の一部については、水路と擁壁の工事が実施されることとなったため、平成16年１月に立会調査を行った。この新調印された仏生田遺跡１区の一部と仏生田遺跡４区については、平成16年度当初から発掘調査に着手することとし、その間に、新幹線部分にかかる中撫川遺跡４区の協議を鋭意進めてもらうことで岡山地方振興局と合意した。平成16年秋にＪＲ西日本株式

第３図　調査地区位置図（1/15,000）

会社と岡山地方振興局との協議がまとまり、12月から中撫川遺跡４区の発掘調査を実施することとなった。



第４図　仏生田遺跡４区中央トレンチ位置図（1/600）

発掘調査は平成16年４月に仏生田遺跡１区から開始した。調査区の東端には道路の擁壁がすでに完成していて、調査部分のみ盛り土がなされていない窪んだ状況にあった。まず、現在の水田耕作土を手掘りで除去し、以下、土層に従って順次掘り下げを続けた。灰白色の中世水田層を除去した段階で灰褐色系の包含層が現れ、この面で古墳時代と弥生時代の溝が検出された。中世に削平を受けていたものと考えられる。弥生時代の遺構は検出が困難で、溝には試掘溝(トレンチ)を設定し掘り下げた。東側の側溝では井戸が検出された。井戸の掘り下げ中に湧水が始まり、埋土の崩落などが発生した。微高地の基盤層とみられる灰色粘土層上面に達して発掘調査を終了した。

仏生田遺跡１区は小面積であったため、調査途中から仏生田遺跡４区の調査も併行して開始した。４区は３区の低位部と５区の微高地部の境に位置していると想定されていた。３区では激しい湧水もあってトレンチで調査を終えていることもあり、まず、調査区の中央に幅３ｍのトレンチを設定し、土層の状況を観察した。調査区の北半では遺物の出土が少なく、遺構も検出されなかった。暗褐色系の土層も認められず、南部で弥生時代後期の土器を少し包含する層が認められたのみであった。このため、北半についてはトレンチのみで調査を終了することとした。

これに対して、調査区の南半では黒褐色の古代包含層が存在し、トレンチの断面に土壙や土手状の高まりが認められたため、調査区南半全面を発掘することとした。３区では表土下に厚さ70㎝の洪水砂層が存在していたとされるが、４区でも現耕作土の下に40㎝程度の砂層が認められ、これを除去すると図版５－２に示すように畦状の高まりや規則的な畝状遺構が検出された。旧地権者に伺うと、昭和20年代に複数の水田を一面の水田に合わせ、地上げをしたとのことであり、旧耕作土を除去した痕跡が畝状遺構で、砂を入れて地上げをし、その上に新たに耕作土を敷いたものと判断された。

旧耕作土の下には灰黄色系の中世水田層が広がり、水田に伴うと考えられる溝群や柵状遺構が検出された。中世水田層を除去すると黒褐色の古代包含層が現れた。この土層も５区の調査から水田層と考えられ、この層を除去して土手状遺構や土壙群を確認した。古代包含層の下には弥生時代の包含層があったが、土器の出土は少なかった。中央トレンチで、弥生時代包含層の下から細い溝状の遺構を検出していたため、この溝の流路に沿う形で部分的に掘り下げを行い、発掘調査を終了した。

中撫川遺跡の発掘調査は、ＪＲ西日本株式会社との協議によって全面を一度に掘り下げることが認められず、調査区を四分割して掘り下げることとなった。このため、造成土と旧耕作土を重機で除いた後、まず幅50㎝の中央トレンチを東西方向に設定して掘り下げ、次にこれと直交する形で中央に南北トレンチを入れた。中央トレンチの土層観察によって、調査区の東西両端には新幹線橋脚の工事に

よる大きな地盤陥没の生じていることが明らかになった。

発掘は北西区から始め、順次南西区、北東区へと進めた。旧耕作土を除去した段階で既に遺構の検出面に達しているようで、想定される溝などの範囲に土器片の集中が認められた。検出作業を行うと古代から弥生時代後期までの遺構が同一面で検出された。北西区と南西区の西半では大溝が検出され、溝の中には厚く砂が堆積していた。調査区の西端では階段状に陥没があるため、大溝の埋土上面ですでに地表下1.5ｍ近くに達していた。この深さになると湧水がみられ、砂層が厚く堆積していると推定されることから、さらなる掘り下げは労働安全上から危険と判断し、この陥没部分については遺構の掘り下げを断念した。調査区の東端でも溝状の傾斜地形を確認したが、地表下約1.8ｍで掘り下げを中止した。調査区の両端を除いた部分では、最初の検出面で弥生時代後期までの遺構を掘り下げ、その完掘後は層順に従って掘り進め、その間に検出した遺構を完掘した。発掘は微高地の基盤層と考えられる灰白色粘土層上面まで下げ、中央トレンチで灰白色粘土層から遺物が出土しないことを確認して調査を終了した。

調査日誌抄

仏生田遺跡

平成16年

４月１日（木）　調査準備開始。
４月７日（水）　１区資材搬入、発掘開始。
　　４区現地協議。
４月13日（火）　４区発掘開始。
５月11日（火）　４区発掘資材搬入。
５月12日（水）　測量基準杭打設。
５月20日（木）　１区発掘終了。
５月27日（木）　４区南半全面調査開始。
６月11日（金）　安全衛生現場巡視。
６月29日（水）　４区発掘終了。資材撤収。
６月30日（木）　現場整理終了。

中撫川遺跡

平成16年

12月１日（水）　調査準備開始。
12月15日（水）　資材搬入、発掘開始。
12月21日（火）　測量基準杭打設。
12月22日（水）　北西区掘り下げ開始。

平成17年

２月22日（火）　発掘終了、資材撤収。
２月28日（月）　現場整理終了。

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の３：現第94条）

番号	文書番号 日付	種類及び 名　称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	主な指示事項
1	教文埋 第1693号 H12.3.14	集落跡・貝塚・ 生産遺跡 川入遺跡・新邸 遺跡ほか	岡山市吉備津 ～中撫川地内	19,905	道路工事	岡山県岡山地方 振興局 局長　野口泰嗣	H13.4.1 ～ H16.3.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第58条の２：現第99条）

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び 名　称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第35号 H16.4.14	周知	集落跡・水田 仏生田遺跡・ 川入遺跡	岡山市納所・ 川入	1,176	道路	岡山県古代吉備 文化財センター 所長　正岡睦夫	岡本寛久 稲谷知子	H16.4.7 ～ H16.8.31

埋蔵文化財発見通知（法第59条：現第100条）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第375号 H16.7.6	弥生土器・須恵器・土師器・備前焼・陶磁器・瓦・土製品・石器・木製品　11箱	岡山市納所仏生田224, 165-1 仏生田遺跡	H16. 4. 7 ～ H16. 6.29	岡山県教育委員会 教育長　宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
2	教文埋 第1335号 H17.2.25	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・瓦・土製品・石器・鉄製品・銅製品・木材・獣骨　46箱	岡山市中撫川438-1,437-1 中撫川遺跡	H16.12.15 ～ H17. 2.22	岡山県教育委員会 教育長　宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第２節　報告書作成の経過

平成16年度当初には、発掘調査を４月から８月まで実施する予定であったが、前述のように４月から６月までと12月から２月までの二期に変更されたため、報告書の作成作業は変則的に行われることとなった。まず、６月の発掘終了後、７月の１か月間で仏生田遺跡関係の整理を実施した。おもに遺物の洗浄・注記・接合・実測を行い、併行して図面・写真類を整理した。

しばらく報告書作成作業は中断されたが、２月の発掘終了後、３月にやはり１か月間整理作業を再開した。仏生田遺跡出土遺物の実測作業を再開するとともに、中撫川遺跡の遺物の洗浄を行った。また、仏生田遺跡関係の遺構実測図の下図を作成した。

平成17年度は、７月から10月まで職員１名を担当者とし、報告書の年度内刊行にむけて作成作業を継続した。まず、遺物を中心に作業を開始し、中撫川遺跡出土遺物の復元と実測、そして仏生田遺跡出土遺物の浄写ならびに図版作成を行った。つづいて仏生田遺跡の遺構実測図の浄写に入り、８月には仏生田遺跡関係の編集作業をほぼ終了した。９月になると中撫川遺跡の遺構実測図の浄写を始めるとともに写真図版の作成を行った。９月末には遺物の復元作業がほぼ終了したため、遺物の写真撮影を実施し、遺物実測図の浄写と図版作成に取り組んだ。10月の中頃には割付が完成し、原稿の執筆を進めた。10月末をもって報告書作成作業は終了した。掲載遺構は23件、遺物は443点である。

整理日誌抄

平成16年

７月１日（木）　図面・写真整理開始。
７月５日（月）　遺物洗浄開始。
７月７日（水）　遺物注記開始。
７月12日（月）　遺物復元開始。
７月26日（月）　遺物実測開始。
７月30日（金）　整理作業中断。

平成17年

３月１日（月）　整理作業再開。遺物実測、遺物復元再開。仏生田遺跡遺構下図作成開始。中撫川遺跡遺物洗浄開始。
３月３日（木）　仏生田遺跡遺物復元終了。
３月25日（金）　仏生田遺跡遺物実測終了。
３月31日（木）　中撫川遺跡遺物洗浄終了。

７月１日（金）　中撫川遺跡遺物復元開始。
７月５日（火）　仏生田遺跡遺物浄写開始。
７月11日（月）　中撫川遺跡遺物実測開始。
７月26日（火）　仏生田遺跡遺構浄写開始。

８月30日（火）　中撫川遺跡遺構浄写開始。
９月16日（金）　割付作業開始。
10月３日（月）　中撫川遺跡遺物浄写開始。
10月５日（水）　遺物写真撮影開始。
10月11日（火）　写真図版作成開始。
10月31日（月）　報告書作成作業終了。

第３節　発掘調査および報告書作成の体制

前述のように、発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県岡山地方振興局（現岡山県備前県民局）から委託を受け、平成16年度に実施された。４月から６月までは仏生田遺跡、12月から翌年の２月までは中撫川遺跡を調査し、７月と翌年の３月には両遺跡に関して報告書作成のための整理作業を行った。発掘調査および報告書作成作業の実務は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、職員２名を配置した。

平成17年度は、７月から10月まで、岡山県古代吉備文化財センター職員１名が報告書作成作業を継続し、年度末に報告書を刊行した。

平成16（2004）年度

岡山県教育委員会

教 育 長	宮野正司

岡山県教育庁

教育次長	釜瀬　司

文化財課

課　　長	芦田和正
参　　事	田村啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井泰男
主　　任	小林利晴
主　　事	秋山良樹

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	正岡睦夫
次　　長（総務課長）	内田　猛
参　　事	松本和男
参　　事	伊藤　晃
（総務課）	
総括副参事（総務班長）	笏本弘忠
主　　任	小坂文男
主　　任	小川紀久
(調査第二課)	
課　　長	中野雅美
総括副参事（第一班長）(調査担当)	岡本寛久
主　　事　　（調査担当）	稲谷知子

平成17年度（2005）年度

岡山県教育委員会

教 育 長	宮野正司

岡山県教育庁

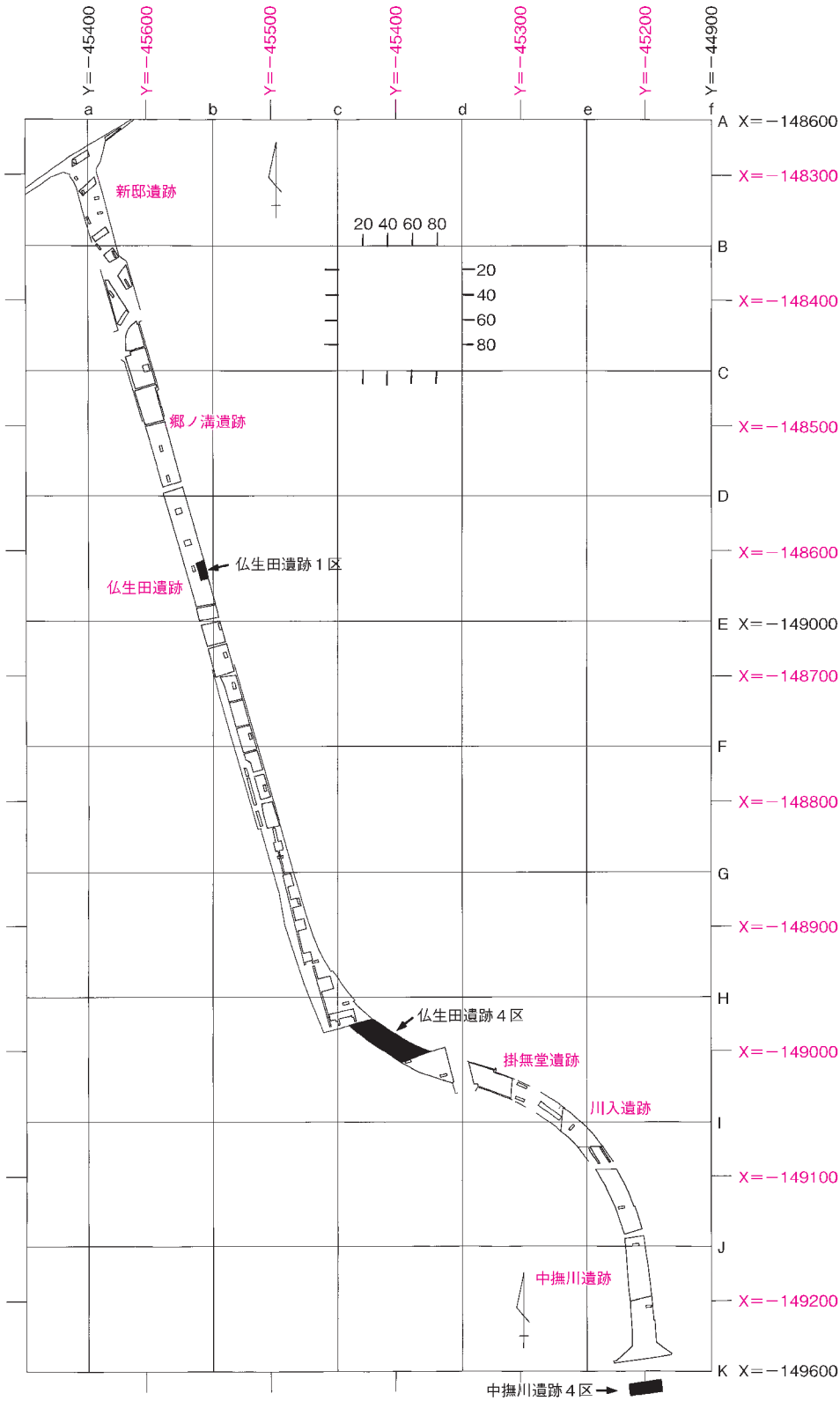
教育次長	釜瀬　司

文化財課

課　　長	芦田和正
参　　事	田村啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井泰男
主　　任	小林利晴
主　　事	金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	松本和男
次　　長（総務課長）	内田　猛
参　　事	平松郁男
参　　事	高畑知功
（総務課）	
総括副参事（総務班長）	若林一憲
主　　任	小川紀久
（調査第二課）	
課　　長	島崎　東
総括副参事（第二班長）(報告書担当)	岡本寛久



第５図　発掘調査区区割図（黒数字：日本測地系　赤数字：世界測地系座標値）（1/5,000）

第３章　調査の概要

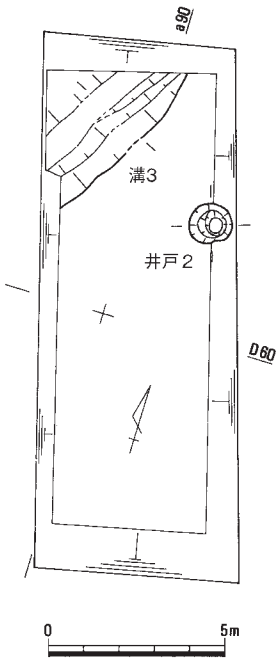
第１節　仏生田遺跡１区

１　調査区の概要

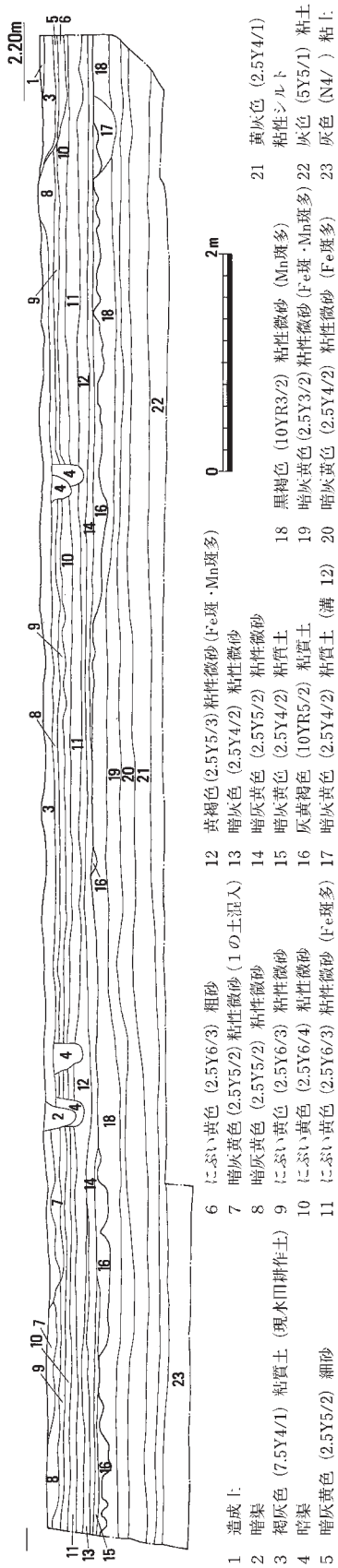
仏生田遺跡は計画路線の中央部にあたり、調査前は水田や畑地となっていた。１区はその北端に位置する全長160ｍの地区である。先の調査では、１区の北半は微高地上に位置し、南半のＤ80ライン付近からしだいに低位部へ移行していくことが確かめられている。微高地部分では、弥生時代に北北東から南南西に流走していた溝が７条検出され、古墳時代になると４条の溝とともに竪穴住居が１軒確認され、集落の存在が確実視されるようになる。古代には瓦や赤色顔料を塗布した土師器を出土する大溝があり、中世の井戸も１基検出され、中世までは集落が継続していたようである。

今回の調査対象地は１区の中央付近東側にあり、現在の水田一枚分の西端部分にあたっていた。東西5.5ｍ、南北15.5ｍ、面積は86㎡を測る。調査区は微高地上に位置し、弥生時代の遺構は溝１条と井戸１基、古墳時代の遺構は溝１条、それに中世の水田跡が検出された。遺物としては、弥生時代から近世までの土器が出土し、土製品が１点みられた。

第６図は調査区東壁の土層断面図である。３層は現在の水田耕作土で、５～８層は床土や地上げ造成土、畦など現水田に関係する土層と考えられる。９層以下は近世の水田層とみられ、水平な堆積を示す。13層からは土色が黄色系



第７図　仏生田遺跡１区弥生時代遺構配置図（1/200）



第６図　仏生田遺跡１区東壁土層断面図（1/60）

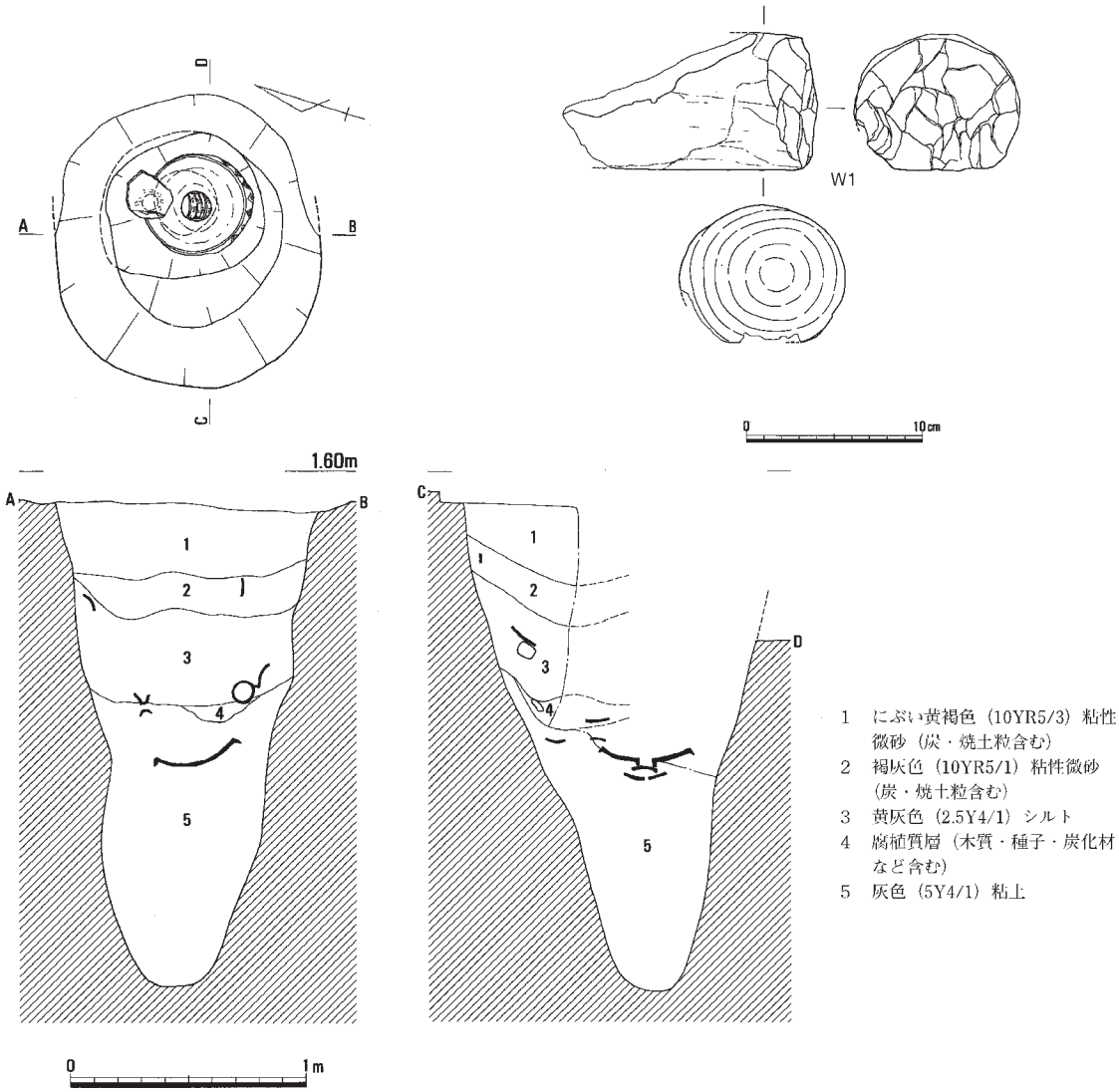
から灰色系に変化し、出土遺物からも中世の水田層と判断される。16層の下面は凹凸が激しく、古墳時代の溝が検出されることから、中世段階で大規模な開発のための削平がなされたと推測される。18層以下は弥生時代の包含層で、22層以下は遺物の出土をみなかった。　（岡本）

２　弥生時代の遺構・遺物

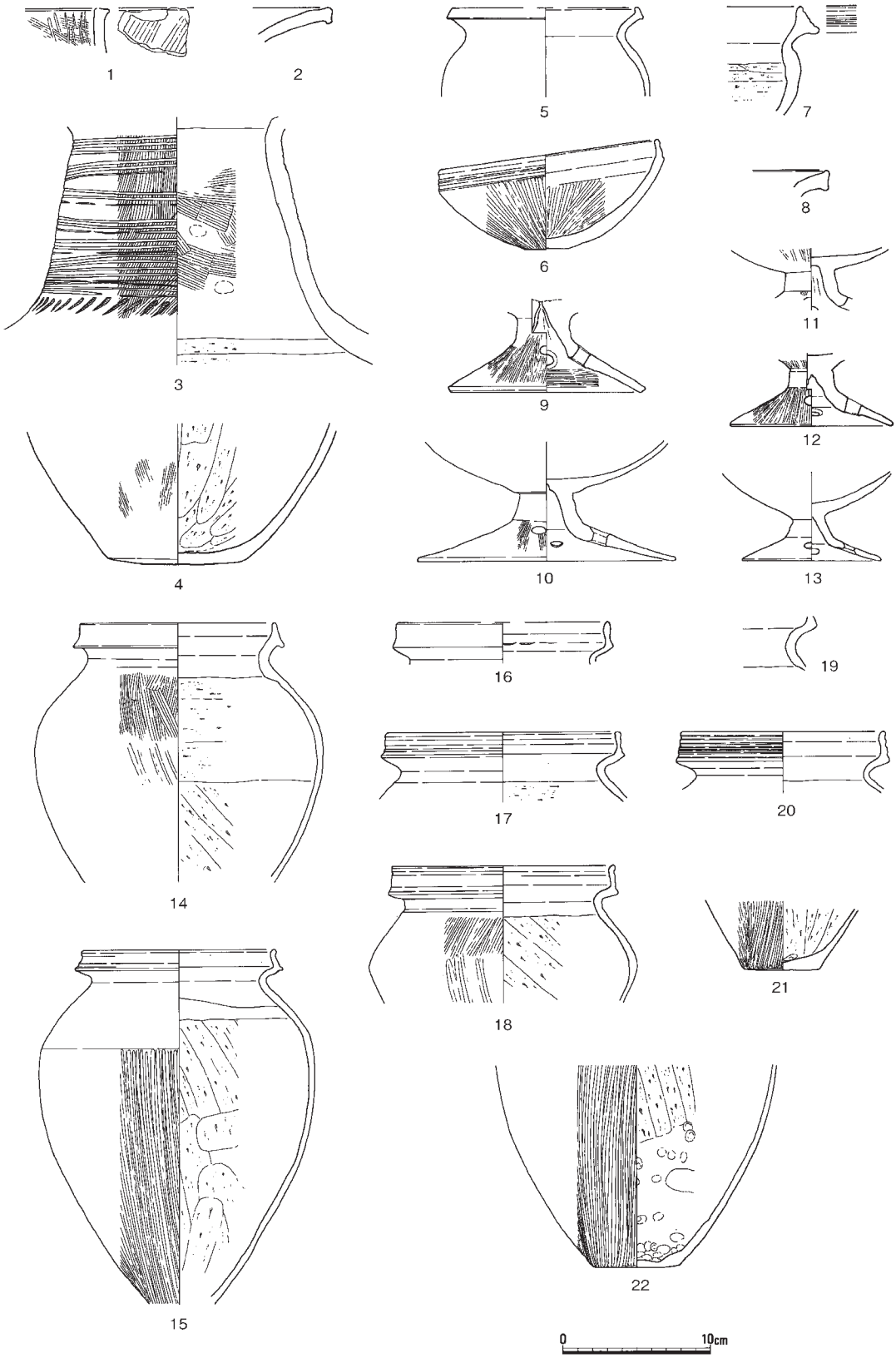
弥生時代の遺構は溝１条と井戸１基である。先の調査では、北北東から南南西に直線的に流れる７条の溝が0.7～15ｍの間隔で平行して検出されたが、最南端に位置していたのが溝３である。溝３は幅が５ｍともっとも広く、今回検出した部分はその南半にあたる。先の調査では溝３からの遺物はほとんどなかったが、今回は遺物の出土がみられ、井戸２とともに後期後半と考えられる。　（岡本）

井戸２（第７～10図、巻頭図版、図版１～４）

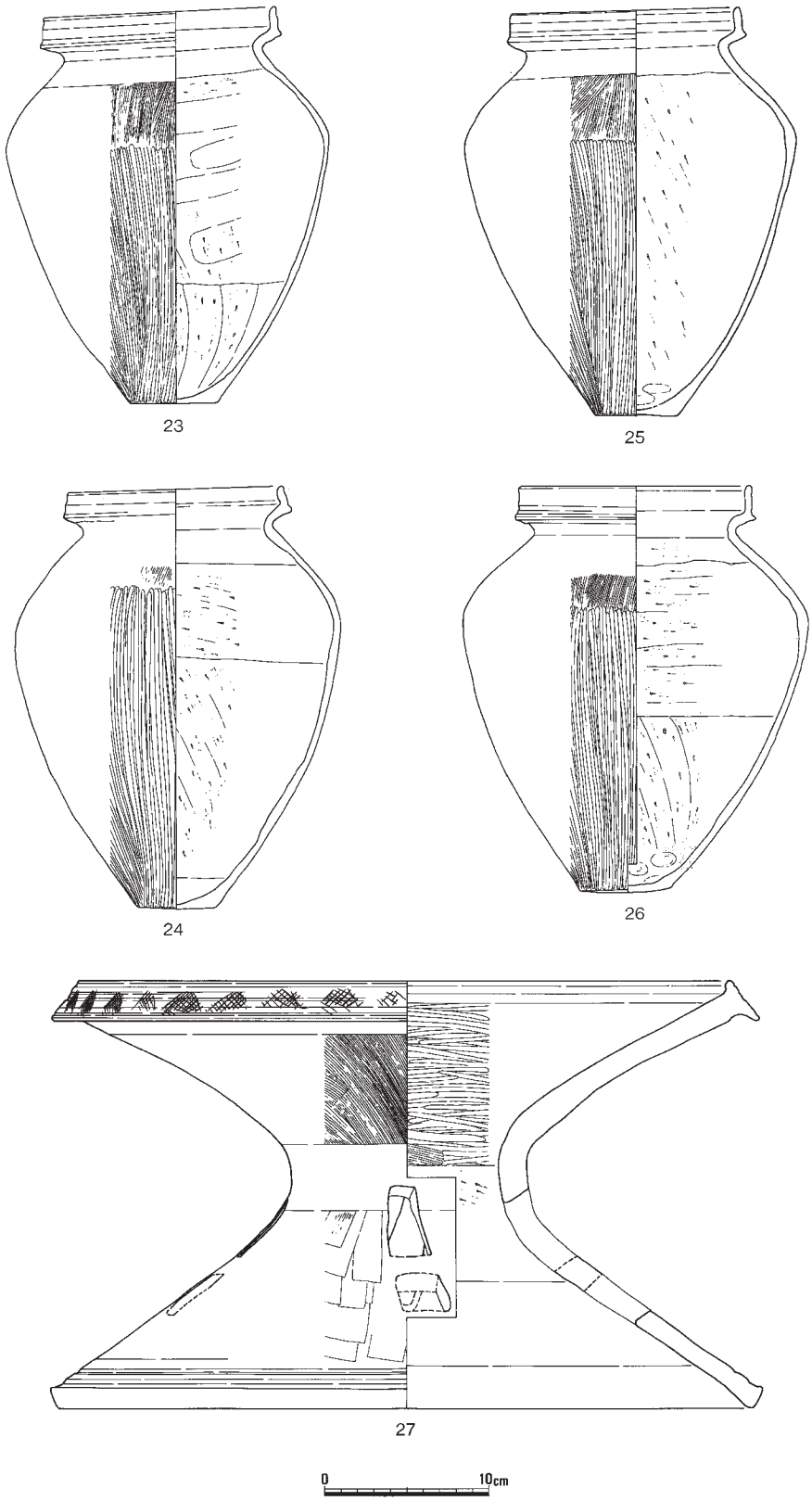
調査区の東端で素掘りの井戸を確認した。検出レベルは海抜1.5ｍである。井戸の東側上層は側溝に切られているが、直径約1.4ｍの円形プランになると推定される。底のレベルは海抜マイナス0.6ｍで、



第８図　井戸２・出土遺物（１）（1/30　1/4）



第９図　井戸２出土遺物（２）（1/4）



第10図　井戸２出土遺物（３）（1/4）

検出面からの深さは約２ｍにも及ぶ。海抜0.3ｍあたりからすぼまり漏斗状の断面形を呈する。埋土は５層に分層している。最下層に１ｍほど灰色粘土が堆積し、底面付近から芯持ち材の加工木で片側に工具の調整痕を残しもう一方が焼けて炭化したＷ１が出土している。他の遺物はこの粘土層上部に集中して出土しており、完品になる土器が含まれる。粘土の上面には第４層とした腐植質層が見られ、木ぎれ・炭化木材・種子・草本類・木の葉が溜まった状態であった。第３層は粘性の強い均質な埋土で比較的大きな土器片、モモやウリ科と思われる種子を含んでいた。井戸の上層第１層・第２層は炭粒・焼土が多量に混じる粘性の微砂で、基盤の包含層に近い土であった。上層はいずれも土器小片を含んでいた。

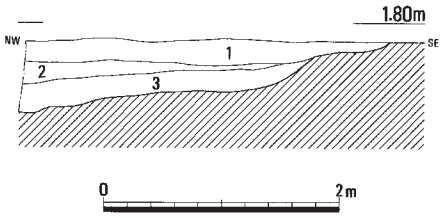
最下層上部付近の遺物出土状態を示すと、長頸壺の頸部が押しつぶれたものの上に器台の口縁が据えられていた。さらに器台の上に乗るように完品の甕26が出土している。取り上げの際には破片となっていたが、腐植質層から器台の周辺にかけての土器片には完品もしくはそれに近い甕に復元されるものが26を含め5個体以上あった。最下層からは人頭大の石が出ており甕の破片の多くはこの下から出土していることからこの石の落下によって破片となった可能性が考えられ、15・22～26の甕は完品のまま廃棄されたものと思われる。胎土が似通っていて判別しきれず16～22として別々に実測しているがこれらのなかで同一個体となるものがあるかもしれない。器台は遺構断面図にあるように胴部以下を打ち欠いて口縁部のみにした状態で口を上にして据えられていた。実測図には27として脚部まで残った状態で掲載しているが、胴部以下の破片は埋土の第３層の中位と第１層、さらに溝３の上層付近からと別の場所から出土したものが接合している。その下の長頸壺も口縁部と肩以下とを打ち欠いており、頸部のみの筒状にしたものであった。この筒状の頸部は横に倒し土管のようにして置かれていたものと思われる。長頸壺については他の部位の破片は見つかっていない。以上が最下層上部付近の遺物出土状況であるが、粘土の堆積により井戸としての機能を失った段階で、長頸壺・器台・甕が廃棄され、植物質も廃棄または流入したものと考えられる。

最下層から第４層にかけて出土した他の土器をみてみると、壺の口縁かと考えられる１・２、壺の底部４、鉢６・８、高杯10・12が器台よりも上のレベルから出ているが、いずれも破片である。このうち鉢６は第１層・第２層出土の破片と接合するもので、残存率は三分の二ほどである。第３層以上から出土した土器にも完品となるものはなく破片のみであった。

井戸の時期であるが、個々の土器をみると、器台27は口縁部に鋸歯文、方形の透かし孔を２段もつ。胴部がほとんどなく屈曲してすぐに脚となるが、口縁や脚裾の形態から後期中葉の新しい段階と考えられる。長頸壺３は３本一組の沈線と刺突文が施され後期後葉の古段階と考えられる。甕についても完全な平底に擬凹線またはヨコナデの口縁部をもつもので、壺と同じ時期であろう。高杯と鉢６は甕よりやや新しい感を受けるが後期後葉のものである。器台自体の時期は若干古くなるが、井戸がその機能を失って完全に埋まるまでの間が後期後葉のうちと考えられる。（稲谷）

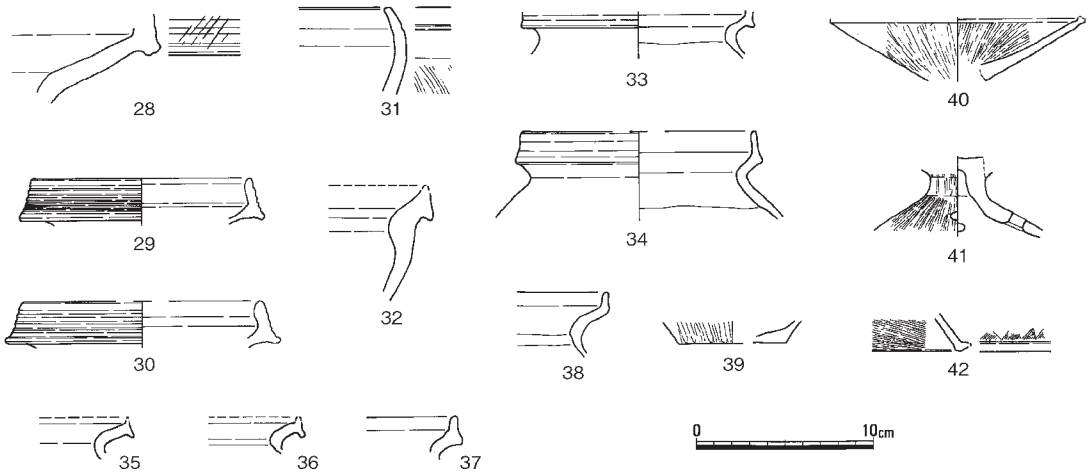
溝３（第７・11図、図版１・２）

調査区の北西隅で検出したこの溝は、『県報182』の仏生田遺跡１区溝３の東肩にあたる。断面の形状は数段のテラス面をもちながら緩やかな傾斜で立ち上がるものであった。溝は調査区際にあるため底面にまで達していないが、検出面から最深部まで40㎝ほどの深さを測る。『県報182』でも東岸のほうが緩やかであるとの報告がなされており同じ状況を示している。埋土は３層に分層可能で、いずれの層からも遺物が出土している。しかし出土量は少なく磨滅の著しい土器小片ばかりであった。



1　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘性微砂（Fe斑多）
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘性微砂（Mn斑多）
3　褐灰色（10YR4/1）粘性微砂（Fe斑多）

図示可能であった遺物は28～30が壺、31・32は鉢、33～39は甕、40～42は高杯である。28は長頸壺と考えられ口縁部に鋸歯文、外面にタテの荒いハケメが残る。29・30の口縁には擬凹線がめぐり丹塗りの痕跡を残す。甕の胴部内面調整はすべてヘラケズリで、口縁に擬凹線を施したと思われる33（２層）・34（３層）と立ち上がりが少なくヨコナデのみの35～38（１層）がある。高杯40は



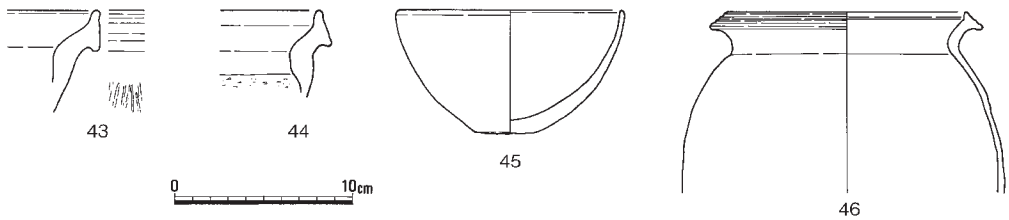
第11図　溝３・出土遺物（1/60　1/4）

灰褐色を呈し砂粒を含む胎土である。41・42は橙色の精良な粘土で、42は非常にシャープな線の鋸歯文が描かれる。31は口縁端部に面を持ち外面に凹線１条とハケメが残る。１層から３層まで土器の時期差はなく、溝の稼働期から埋没までが後期後葉におさまるものと考えられる。（稲谷）

遺構に伴わない遺物（第12図、図版４）

井戸２や溝３の検出面から下にある弥生時代の包含層から土器片がいくらか出土している。図示した土器はいずれも第６図の18層から出土したものである。

43・44はともに鉢で、類似した器形をしている。口縁部は上方へ摘み出すように拡張され、外面には浅い凹線を巡らせていたようである。43の胴部外面はヘラミガキ、44の胴部内面はヘラケズリされる。45は小形の鉢で、口縁部はゆるやかに内湾しながら直立し、底部はわずかに突出した平底である。器表調整はナデか。46は甕で、溝３の南肩部から出土した。口縁部は上下に拡張され、凹線が３条巡らされている。弥生時代後期中葉のものと考える。胴部は磨滅し、調整は不明である。（岡本）



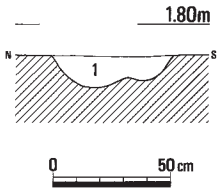
第12図　仏生田遺跡１区包含層出土弥生時代遺物（1/4）

３　古墳時代～古代の遺構・遺物

古墳時代から古代にかけての期間で、明瞭な遺構・遺物が確認されたのは古墳時代後期だけである。調査区の南端から溝が１条検出されたが、これは先の調査で検出された溝の続きである。やはり遺物の出土はみられなかった。遺物では第16図**47**の須恵器がある。**47**は壺の口縁部とみられ、端部外面に突帯を巡らせる。　（岡本）

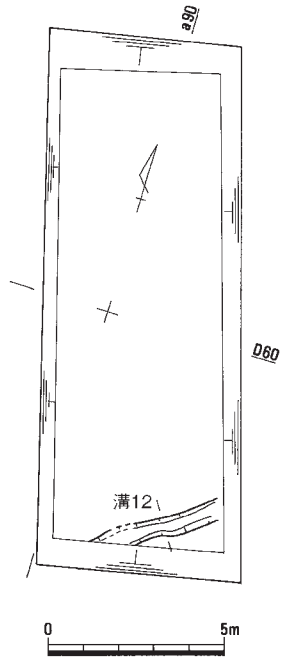
溝12（第６・13・14図、図版１）

調査区の南端を北東から南西方向に延びる溝で幅40～60㎝、深さ15㎝程度を測る。検出部分の底面は流路に添ってほぼ水平で、海抜高は1.5ｍ前後である。埋土は暗灰黄色粘質土で、浅黄色土のブロックを含んでいた。遺物は出土しなかった。『県報128』の断面図の底部高度は第14図のそれより２㎝低いだけであり、ほとんど傾斜はみられない。埋土から古墳時代後半の溝とされている。　（岡本）



1　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
（浅黄色土塊含む）

第14図　溝12（1/30）



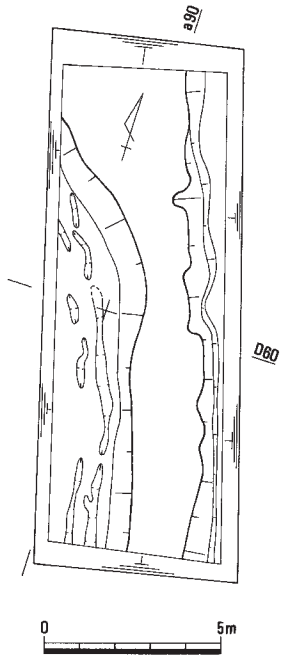
第13図　仏生田遺跡１区古墳時代遺構配置図（1/200）

４　中世以降の遺構・遺物

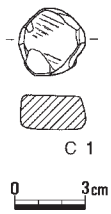
中世になると遺跡の状況は大きく変化する。第６図の調査区東壁の上層断面から明らかなように、中世には付近一帯で大規模な地下げが行われ、弥生時代の包含層まで削平が及んでいる。この地下げが開田のためのものであるのは、次に述べる水田の存在から確実である。これ以降、この地区は水田地帯として現在に続く。　（岡本）

水田遺構（第６・15図）

調査区中央に、幅1.1～3.5ｍの南北方向に延びる畦道状の高まりがあり、その東西両側が落ち込む地形を確認した。西側の落ち込みは畦道からの深さが７～12㎝あり、落ち込みの底面は平坦になっていた。落ち込み内には幅が10～30㎝、深さ５㎝程度の、浅く細い溝が途切れながら検出された。大きな目でみれば、畦道に平行するような形で２条の溝が走っているように観察され、水田の脇に掘られた排水路か、耕作痕跡と考えられよう。東側の落ち込みは階段状を呈し、畦道からの深さが中段で７㎝、下段で15㎝前後を測る。第６図の16層下面が東側の落ち込み底面にあたるが、かなり凹凸が存在している。これも西側の落ち込みと同様に、水田脇の溝状遺構の断面と考えたい。畦道状の高まりが現在の水田境と近い位置にあることとは、水田地割りの起源を考える上で注意される。　（岡本）



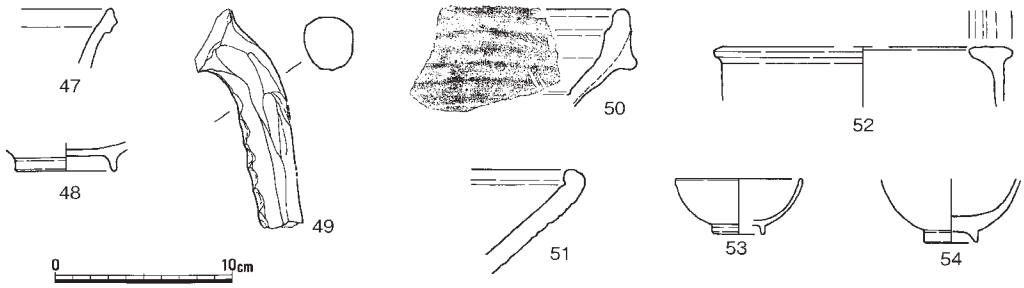
第15図　仏生田遺跡１区中世遺構配置図（1/200）



遺構に伴わない遺物（第16図、図版４）

第16図に掲載した遺物は、古墳時代後半の47以外を除いて、中世と近世のものである。48は中世包含層、49は東側溝、47・50～54・Ｃ１は近世包含層から出土した。

Ｃ１は、瓦質土器の破片を加工して長径３㎝、厚さ1.5㎝の円盤に整形したもので、駒のような遊具ではないかと思われる。中世の遺物と考える。



第16図　仏生田遺跡１区包含層出土古墳時代～近世遺物（1/3　1/4）

48は土師器椀で、高台はしっかりしている。49は土師器の三足鍋の脚部片である。ともに中世のもので13世紀代のものではないかとみられる。水田の年代に関係する遺物とみなすことができよう。

50～54は近世の遺物で、50～52は備前焼、53・54は磁器で、無地の白磁碗である。50はすり鉢、51は大皿、52は水屋甕の破片である。（岡本）

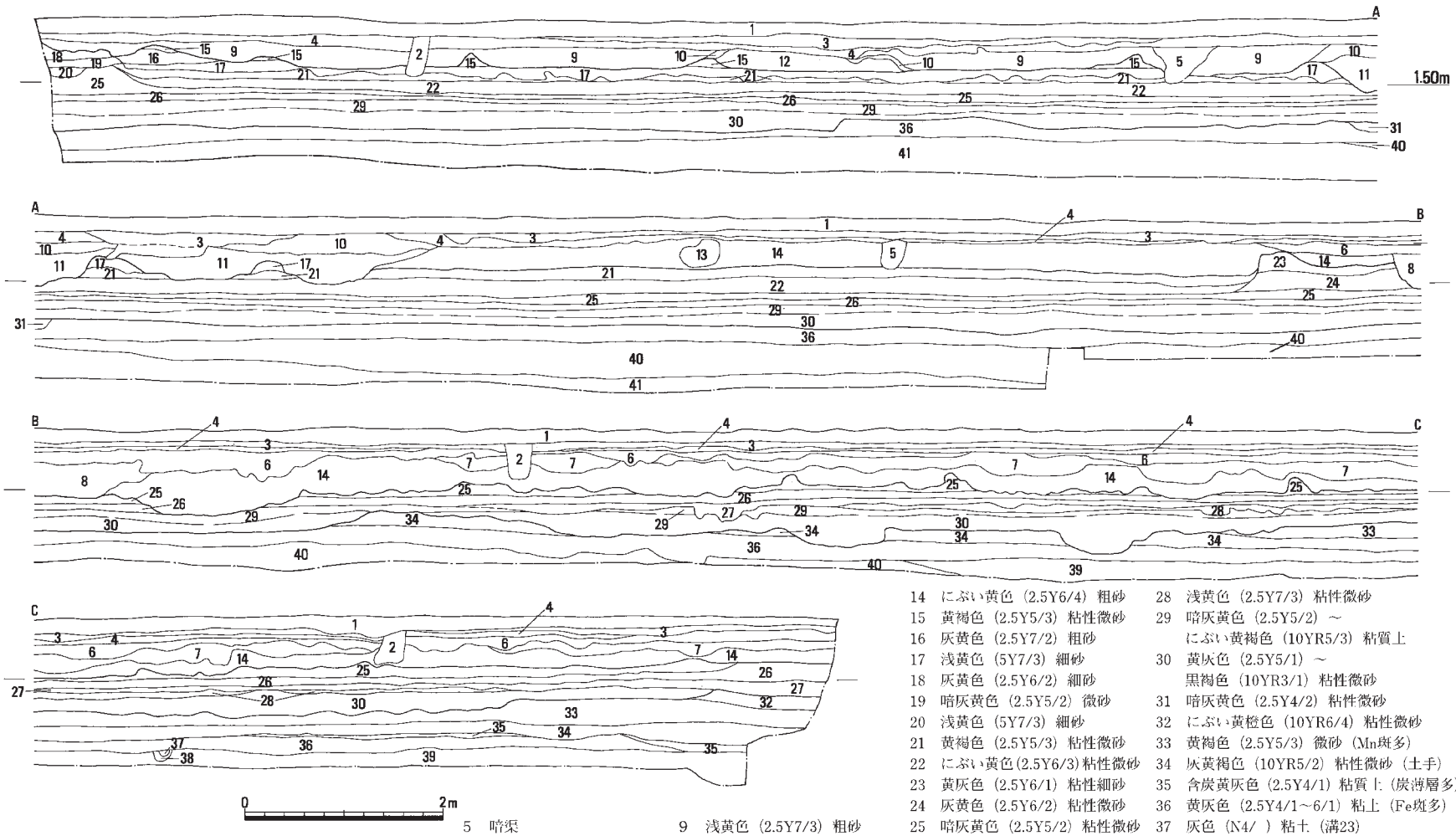
第２節　仏生田遺跡４区

１　調査区の概要

４区は仏生田遺跡の南端近くにあり、２区から３区にかけて広がっていた低位部が、仏生田遺跡５区から掛無堂遺跡にかけて存在した微高地に上がっていくあたりに位置していると想定されていた。調査区の幅は13ｍ、全長が52ｍ、面積は680㎡である。３区では激しい湧水に悩まされたということもあり、まず微高地の端部を押さえることを目的として調査区の中央にトレンチを設定し、微高地の基盤層と考えられる層まで掘り下げた。第17図が中央トレンチ東壁の土層断面図である。

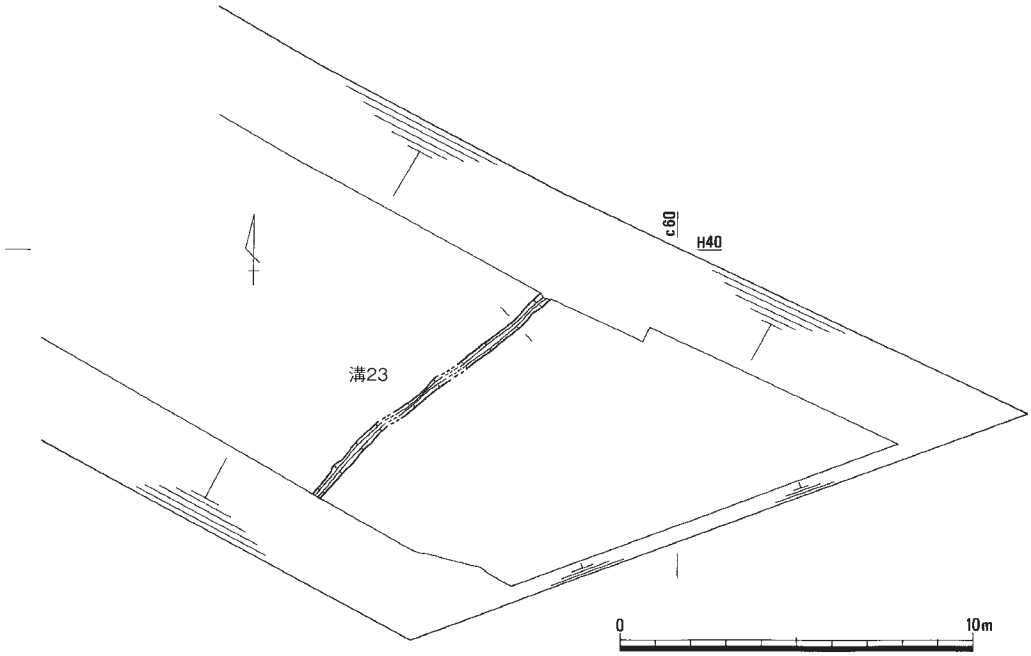
１～５層までは現在の水田耕作に関係する土層である。この現水田層の下には９層や14層のような粗砂層が広く堆積していた。両層ともに厚さが20～35㎝あり、この粗砂を除去すると、15層と25層にみられる断面三角形の畝状の高まりが、図版５－２にみるようにほぼ等間隔で、現在の地割りに沿って検出された。旧地権者の言によると、調査区の水田はもともと３面に分かれていたのを１面の水田に造成したとのことであり、粗砂は地上げするために人為的に投入されたもの、畝状の高まりは旧水田の耕土を除去した痕跡とみられる。図版写真にある大きな畦は23・24層にあたり、造成前の水田畦で、調査区南隣にある畦道に続いていたものである。21・22層は造成前の水田関係層となる。

26～28層までは土色が灰黄色系となり、出土遺物からも中世の水田層と考えられる。３段目の27・28層の下面にみられる凹凸は溝や柵状遺構の断面である。29・30層は７世紀から奈良時代にかけての遺物を多く出土する包含層で、５区の調査から古代の水田層とされる。トレンチの南端近くで微高地



1　黒褐色（10YR3/2）粘質土（現水田耕作土）
2　暗渠
3　暗褐色（10YR3/3）粘性細砂
4　灰オリーブ色（5Y5/2）粘性細砂（Fe斑沈着層）
5　暗渠
6　灰黄色（2.5Y5/1）粘性微砂（Mn斑多）
7　灰黄色（2.5Y6/2）細砂
8　黄褐色（2.5Y5/4）粗砂
9　浅黄色（2.5Y7/3）粗砂
10　灰黄色（2.5Y6/2）粘性細砂
11　にぶい灰黄色（2.5Y6/3）細砂
12　浅黄色（2.5Y7/3）粗砂
13　黄褐色（2.5Y5/3）微砂
14　にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂
15　黄褐色（2.5Y5/3）粘性微砂
16　灰黄色（2.5Y7/2）粗砂
17　浅黄色（5Y7/3）細砂
18　灰黄色（2.5Y6/2）細砂
19　暗灰黄色（2.5Y5/2）微砂
20　浅黄色（5Y7/3）細砂
21　黄褐色（2.5Y5/3）粘性微砂
22　にぶい黄色（2.5Y6/3）粘性微砂
23　黄灰色（2.5Y6/1）粘性細砂
24　灰黄色（2.5Y6/2）粘性微砂
25　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性微砂（Fe斑・Mn斑多）
26　灰黄色（2.5Y6/2）粘性微砂（Fe斑多）
27　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
28　浅黄色（2.5Y7/3）粘性微砂
29　暗灰黄色（2.5Y5/2）～にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
30　黄灰色（2.5Y5/1）～黒褐色（10YR3/1）粘性微砂
31　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性微砂
32　にぶい黄橙色（10YR6/4）粘性微砂
33　黄褐色（2.5Y5/3）微砂（Mn斑多）
34　灰黄褐色（10YR5/2）粘性微砂（土手）
35　含炭黄灰色（2.5Y4/1）粘質土（炭薄層多）
36　黄灰色（2.5Y4/1～6/1）粘土（Fe斑多）
37　灰色（N4/ ）粘土（溝23）
38　暗灰色（N3/ ）粘土（溝23）
39　灰色（N4/ ）粘土
40　灰色（4.5Y5/1）～明青灰色（10BG7/1）粘土
41　灰色（7.5Y6/1）粘土

第17図　仏生田遺跡４区中央トレンチ東壁土層断面図（1/60）



第18図　仏生田遺跡４区弥生時代遺構配置図（1/200）

の端部かとみられる10㎝程度の浅い段を検出した。４段目の32層の西端である。面的に追求すると第21図に示すように延びる。微高地端部から約15ｍ西に土手状の高まりが存在する。３段目の34層西端の高まりがそれである。微高地端部と土手状高まりとの間には30層の落ち込んだ土壙状の遺構も確認された。30層の下面からは古墳時代前期の土器が出土し、この頃から継続する水田の可能性もある。

30層の下に位置する36層は弥生時代後期中葉の包含層で、この層を除去して溝23（37・38層）が検出された。39層以下からは遺物は出土しなかった。いずれも粘土層で後背湿地的な状況を示す。

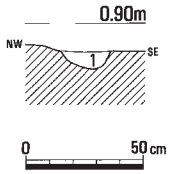
調査区の北半では遺物の出土がほとんどなく、遺構らしき断面も観察されず、低位部の続きにあると判断したため、調査区の南半のみを全面調査することとした。（岡本）

２　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は溝が１条検出されたのみである。出土遺物はなかったが、検出面の上にある包含層から出土する土器によって、後期中葉以前のものと推定される。溝の方向は第21図の古代の微高地端部と平行するようであり、微高地の周縁を巡っていたかもしれない。弥生時代の遺物には石器と土器がある。土器はおもに中央トレンチの中央部付近の包含層からいくらか出土をみた。（岡本）

溝23（第17～19図、図版７）

調査区南端近く、北東から南西に延びる溝状遺構である。幅16～30㎝、深さ10㎝程度と小規模である。底部の高度は海抜73㎝前後を測り、北端と南端で２㎝しか違わない。断面形は椀形をしている。埋土は灰色粘土だが、中央トレンチの断面では下層として暗灰色（N3/ ）粘土が観察された。出土遺物はないが、検出面が第17図36層の下面にあたり、36層からは第20図58・60などの出土があったため、後期中葉以前とされる。（岡本）



1　灰色（N4/ ）粘土

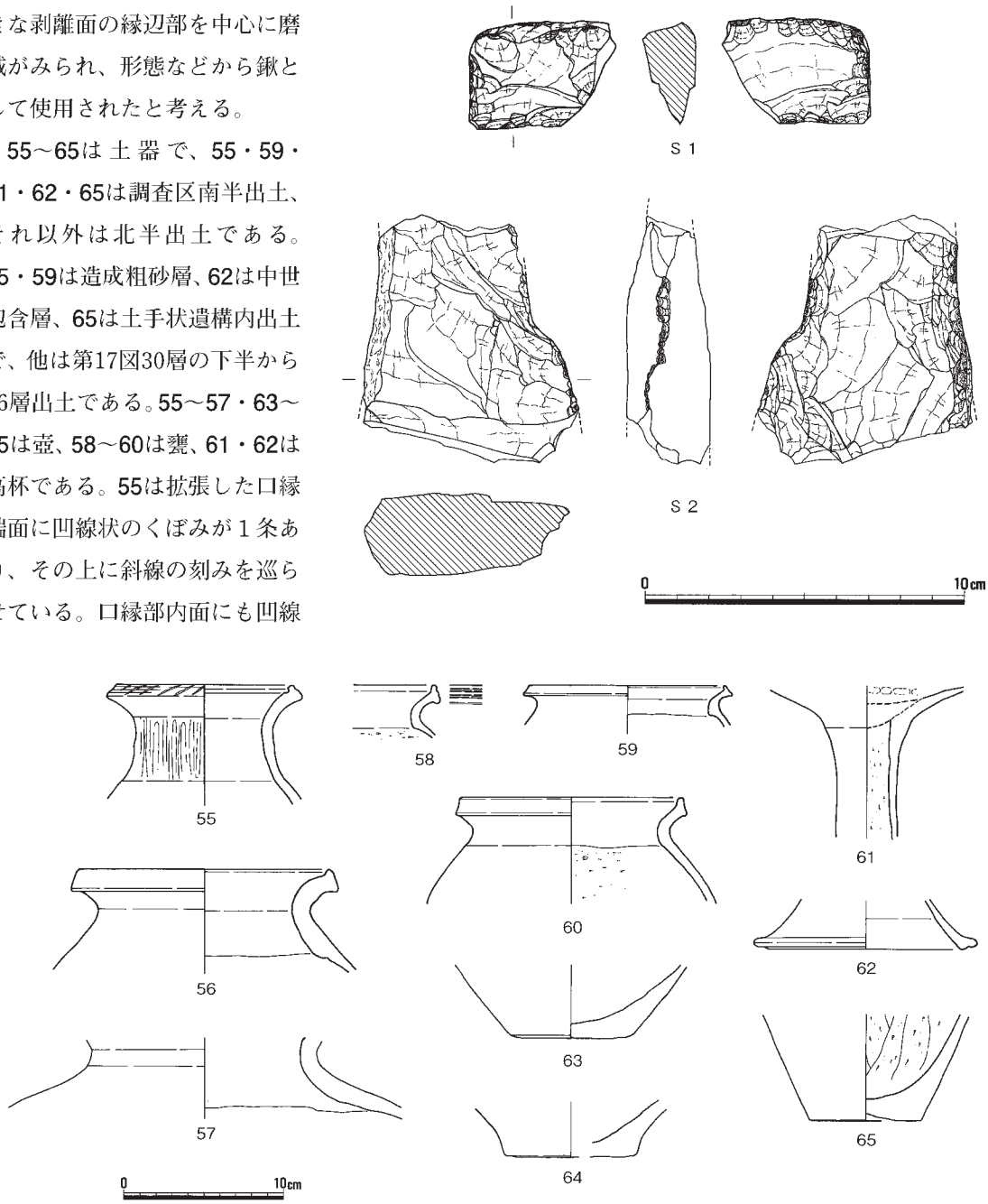
第19図　溝23（1/30）

遺構に伴わない遺物（第20図、図版８）

仏生田遺跡４区では、おもに包含層から弥生時代の石器と土器が出土している。

Ｓ１・Ｓ２はともにサヌカイト製の石器で、折損品である。Ｓ１は中央トレンチの北半側溝、Ｓ２は調査区の側溝から出土した。Ｓ１は長方形を呈するようで、上部に広い平坦面をもち、断面形は三角形をなす。下方の刃部は両面から調整が加えられ、すこし刃潰れが認められる。側縁と上辺にも調整剥離が施される。形態などから楔として使用されたと考えたい。Ｓ２は中央部がくびれ、下方に拡がる。片側には自然面が大きく残り、残余部分には細かい敲打が加えられている。くびれ部分にも敲打が認められる。両面ともに大きな剥離面の縁辺部を中心に磨滅がみられ、形態などから鍬として使用されたと考える。

55～65は土器で、55・59・61・62・65は調査区南半出土、それ以外は北半出土である。55・59は造成粗砂層、62は中世包含層、65は土手状遺構内出土で、他は第17図30層の下半から36層出土である。55～57・63～65は壺、58～60は甕、61・62は高杯である。55は拡張した口縁端面に凹線状のくぼみが１条あり、その上に斜線の刻みを巡らせている。口縁部内面にも凹線



第20図　仏生田遺跡４区包含層出土弥生時代遺物（1/2　1/4）

が引かれる。58は口縁部を上下に拡張し、端面に凹線を２条巡らせる。61は高杯の杯底部から柱状部にかけての破片で、円盤充填法とみられる。62は高杯の脚端部で、端面が拡張されて凹線を１条巡らせる。56・57・63・64の器面は剥落し、調整技法は不明瞭である。57と63は同一個体とみられる。

61・62は弥生時代中期後半のものと考えられるが、他は後期中葉のものである。　（岡本）

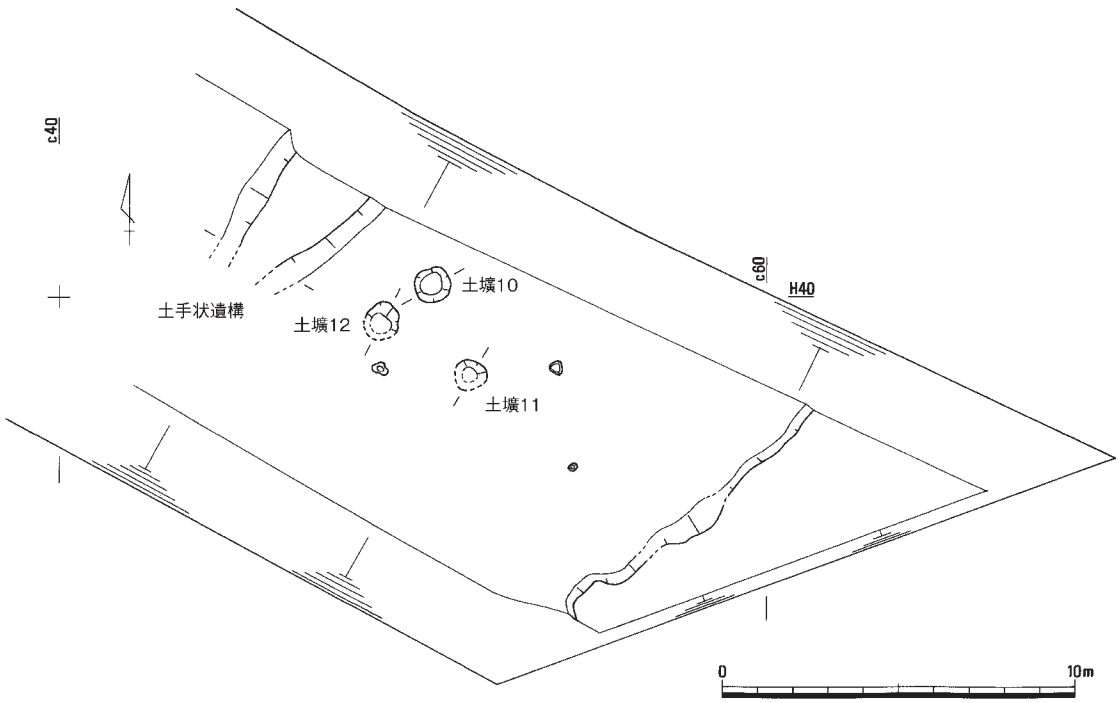
３　古墳時代～古代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は検出されなかったが、古代の水田層と考えられる第17図30層から、古墳時代の土器がいくらか出土している。第24図66・67のような古墳時代前期のものもみられることから、水田の年代が古墳時代までさかのぼる可能性もある。

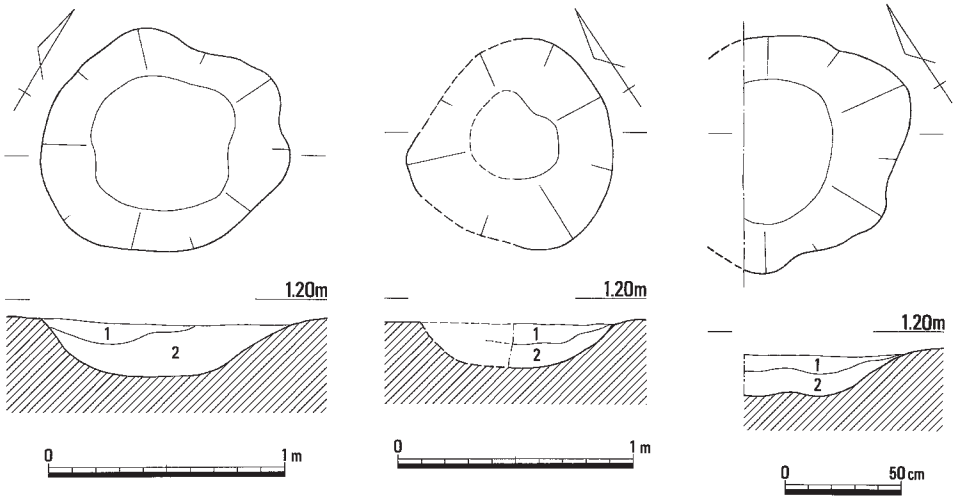
古代の遺構は複数検出されている。調査区の南端近くに10㎝程の段差が続いているのが確認され、これが水田の南端であり、微高地の端部と考える。低いのは中世に削平を受けたためである。微高地端部に平行するような形で、西に15ｍ離れて土手状の高まりが検出された。この土手状遺構の西にも30層は堆積しているが、遺物の包含量は減少する。微高地端部と土手状遺構の間の水田層（30層）を除去すると３基の土壙と柱穴状の小穴が３個検出された。土壙の埋土は30層と類似するが、出土遺物はみられなかった。古代の遺物は古代の水田層から中世包含層にかけておもに出土した。　（岡本）

土壙10（第21・22図、図版６）

土手状遺構から２ｍ東で検出され、南西に70㎝離れて土壙12が存在する。平面形は不整形な円形で、長径105㎝、短径95㎝、深さは24㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壙壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は２層に分けたが、それほど明瞭な違いはなかった。出土遺物はないが、土層関係から古代の遺構と考える。水田部分に位置しているため、耕作に関する施設かと思われるが不明である。　（岡本）



第21図　仏生田遺跡４区古代遺構配置図（1/200）



1　褐灰色（7.5YR4/1）粘性微砂
2　黒褐色（7.5YR3/1）粘性微砂

1　褐灰色（7.5YR4/1）粘性微砂
2　黒褐色（7.5YR3/1）粘性微砂

1　褐灰色（7.5YR4/1）粘性微砂
（灰白色土塊含む）
2　黒褐色（7.5YR3/1）粘性微砂

第22図　土壙10（左）・11（中）・12（右）（1/30）

土壙11（第17・21・22図、図版６・７）

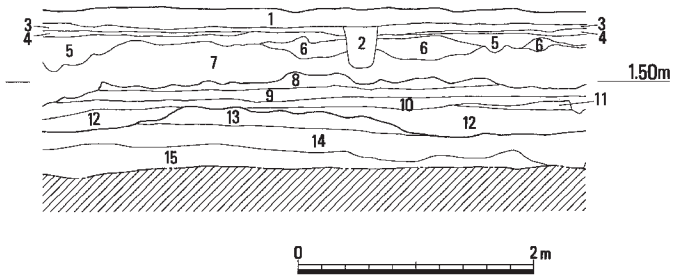
土壙10から２ｍ南東に位置し、土手状遺構からは５ｍ、微高地端からは6.5ｍ離れている。平面形はやや角張った円形で、長径が87㎝、深さは24㎝を測る。断面形は椀形を呈し、壙壁の傾斜はゆるやかである。埋土は中央トレンチの東壁では明瞭ではなかったが、２層に分けられ、上層では灰白色土の塊が含まれていた。年代は古代と推定されるが、機能については明確ではない。（岡本）

土壙12（第17・21・22図、図版６・７）

土壙10の南西70㎝に位置し、土手状遺構からの距離は２ｍである。中央トレンチの側溝によって一部を破壊した。平面形はかなり不整形な円形で、残存部分の長径が100㎝、深さは20㎝を測る。断面形は椀形を呈するようだが、底部には浅い凹凸がみられる。埋土は２層で、上層には灰白色土の塊が含まれていた。土壙10・11と同年代・同機能と考えるが、具体的には明確ではない。（岡本）

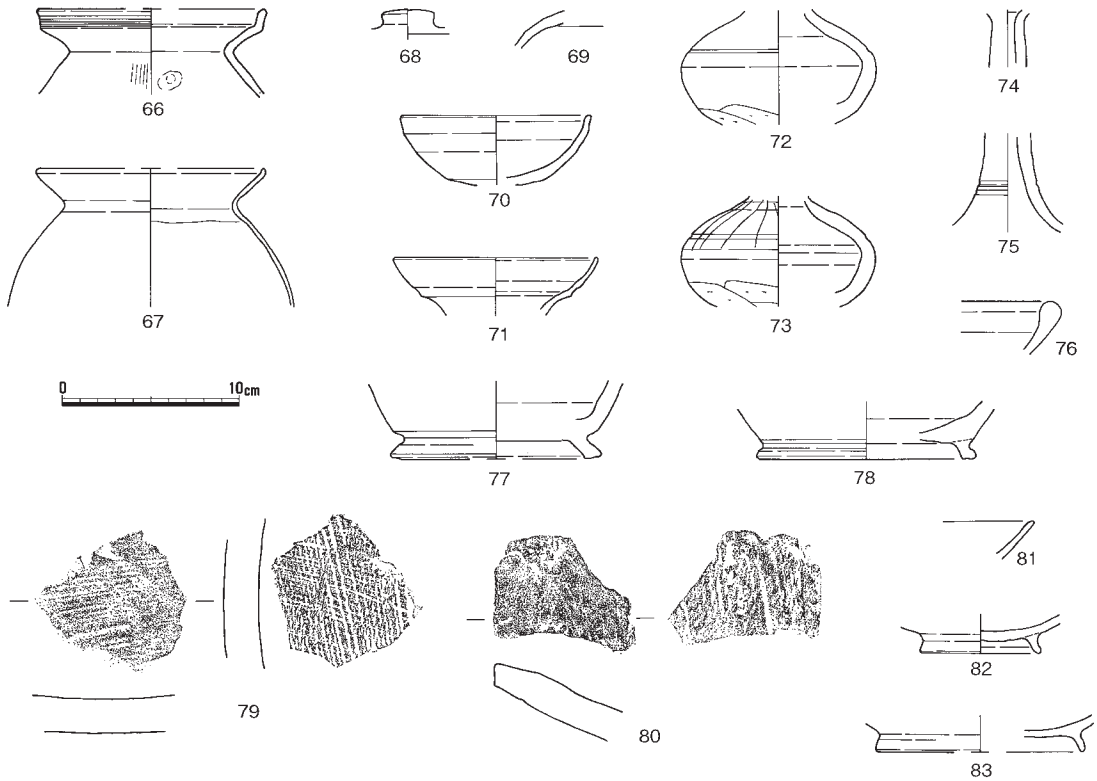
土手状遺構（第17・20・21・23図、図版６）

中央トレンチの東壁断面で、微高地端から16ｍほど西に幅2.5ｍ、厚さ15㎝の高まり（34層）が認められた。そこで、これを面的に検出してみると、第21図にあるように、微高地端と平行して、幅が2.5～3.5ｍ、検出長が3.5ｍの上手状を呈することが判明した。中央トレンチにかかる部分は破壊したようだが、それより南では確認されず、中央付近から造られていたものと推定される。第23図の



1　黒褐色（10YR3/2）粘質土
（現水田耕作土）
2　暗渠
3　暗褐色（10YR3/3）粘性細砂
4　灰オリーブ色（5Y5/2）粘性細砂
5　灰黄色（2.5Y5/1）粘性微砂
6　灰黄色（2.5Y6/2）細砂
7　にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂
8　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性微砂
9　灰黄色（2.5Y6/2）粘性微砂
10　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土
11　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
12　黒褐色（10YR3/1）粘性微砂
13　灰黄褐色（10YR5/2）粘性微砂
14　黄灰色（2.5Y4/1）粘土
15　明青灰色（10BG7/1）粘土

第23図　土手状遺構周辺土層断面図（1/60）



第24図　仏生田遺跡４区包含層出土古墳時代～古代遺物（1/4）

13層が土手状遺構の断面で、古代の水田層と考えられる12層は土手状遺構で一度途切れ、土手状遺構の西側で再び堆積していた。遺物の出土状況や土壙などの位置から考えると、土手状遺構と微高地端部の間が水田として利用され、土手状遺構は現代の畦道のように、西側の湿地と水田を隔てるとともに、水田を保護する機能も担っていたのではないかと思われる。上手状遺構内からは第20図65の上器底部が出土した。平底で、外面は剥落しているが、ヘラミガキのようである。弥生時代後期のものとみられるため、土手状遺構は開田の際に削り残された可能性がある。（岡本）

遺構に伴わない遺物（第24図、図版８）

第24図にはおもに包含層から出土した古墳時代から古代にかけての遺物を掲載した。80は中央トレンチ北半から出土したが、他はすべて調査区南半からの出土である。出土層位別では、古代の水田層（第17図29・30層）からのものが66・67・71～73・80、中世包含層（第17図25～28層）出土のものが69・70・74・75・77・78・82・83、造成粗砂の除去中出土が76、側溝出土が68・79・81である。

66～68は土師器である。66は二重口縁をもつ甕で、口縁部の立ち上がり部分には櫛描き沈線を巡らせる。胴部外面はハケ、内面には指頭圧痕が残る。67も甕で口縁端部をつまみ上げている。胴部の調整は剥落で不明。近畿地方の庄内型甕に似る。土手状遺構の北側から出土した。68は蓋のつまみである。66・67は古墳時代前期、68は奈良時代かと考える。

69～78は須恵器である。69は蓋、70は杯、71～73は鼎とみられ、74・75が高杯、76は鉢のようで、77・78は瓶か壺の底部とみられる。72と73はよく類似しているが、73の胴部上半には鋭い線刻が上下に引かれている。この線刻が全周しないものであれば、同一個体とできる。底部には手持ちのヘラケズリが認められる。75は２条の凹線を飾る。76は口縁部を肥厚させている。77・78の高台は踏ん張り形にならず、端面はほぼ接地する。69～75は７世紀代、76～78は奈良時代のものと考える。

79・80は須恵質の平瓦で、凸面には縄の叩き目が残る。79は凹凸面ともに粘土板の切り取り痕跡が明瞭である。いずれも奈良時代以降のものである。

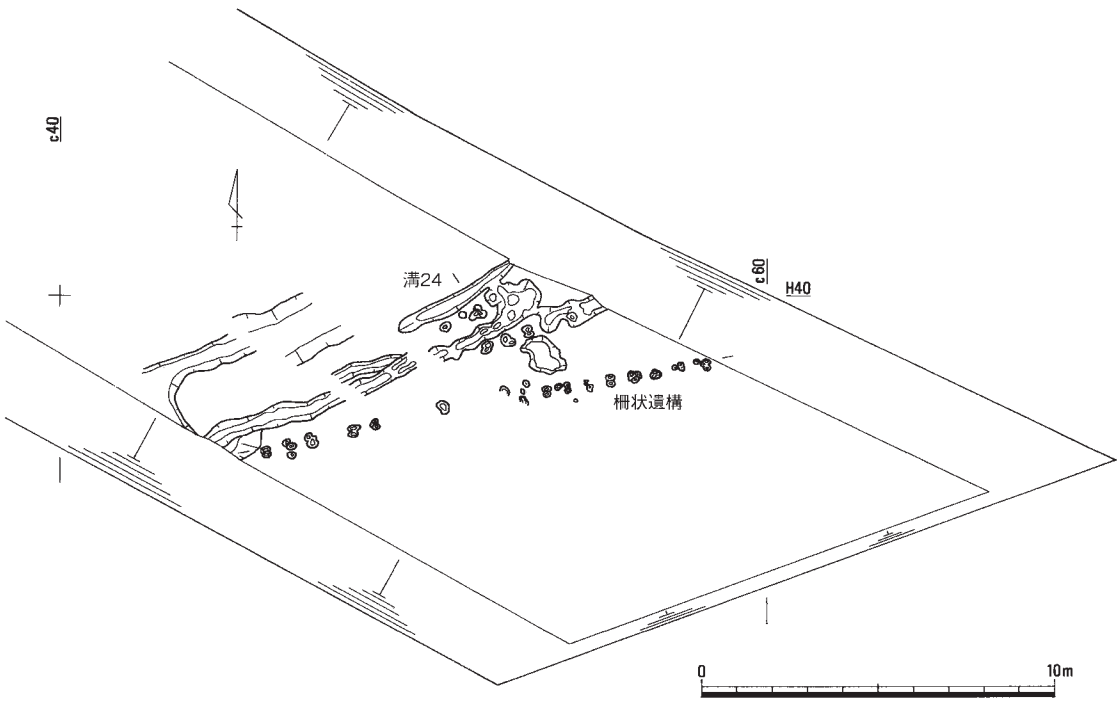
81は須恵質の緑釉陶器椀の口縁部とみられる。４区から出土した緑釉陶器はこの１点のみである。82・83は黒色土器椀で、いずれも内黒である。薄い高台をもち、82は外反、83は内湾する。81～83は９～10世紀にかけてのものである。（岡本）

４　中世以降の遺構・遺物

仏生田遺跡４区は中世に入っても水田が広がっていたとみられ、明瞭な遺構としては、柵状遺構と溝状遺構群が検出されたのみであった。これらの遺構の方向をみると、古代の微高地端や土手状遺構とは類似するものの少し異なり、むしろ調査区南東辺に示されている現代の畦方向に近い。古代の微高地端部の段差が低いことから、仏生田遺跡１区と同じように中世段階での地下げを考えたい。中世の遺構はその方向から水田に伴う施設と考えるが、第17図３段目の27層のくぼみが溝状遺構群、28層のくぼみが柵状遺構とみられることから、両遺構の間には年代的なずれが存在するかもしれない。水田層の中世包含層からは、第28図に掲載したような鎌倉時代の遺物の出土が多い。（岡本）

柵状遺構（第17・25・26図、図版５・６）

調査区南半の中央付近を東西に横断するように、複数の小穴がかたまりつつ列状にならんでいた。それぞれの小穴は楕円形がほとんどで、長径が10～35㎝、深さは12㎝までであった。２個ないし３個が集まっている例が多いが、この集まりが約60㎝の間隔でほぼ直線状にならんでいる。検出時には、個々の小穴の間での切り合い関係は確認できなかった。第25図をみると溝24や溝状遺構群に沿っても小穴列があるようで、柵状遺構が何度も作り直された可能性がある。小穴の埋土は浅黄色粘性微砂で



第25図　仏生田遺跡４区中世遺構配置図（1/200）

第26図　柵状遺構（1/60）

中世の包含層と同じである。水田を区画する施設の痕跡と考えるが、小穴の状況からすると恒常的なものとは考えにくく、小枝や低木を使った垣根のようなものではないかと想像する。　（岡本）

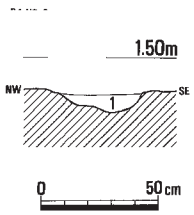
溝24（第17・25・27図、図版５）

柵状遺構の北にある溝状遺構群の北東端に位置する。幅が最大で45㎝、深さは15㎝を測る。埋土は灰黄色粘質土である。中央トレンチ部分では検出面が低かったため破壊した可能性があるが、溝状遺構群の南半では検出されていない。断面形は皿形だが、最深部が南に片寄っている。　（岡本）

溝状遺構群（第17・25図、図版５・６）

柵状遺構の北側に沿って溝状の落ち込みが数条検出された。それらの方向はほぼ平行しているが、柵状遺構とは少し異なり、より現在の水田畦の方向に近い。柵状遺構と溝状遺構群の南端との距離は東端で２ｍ、西端では50㎝にすぎない。溝状遺構群の南端の落ち込み内には小穴が認められることから、別の柵状遺構と溝状遺構が重なっている可能性が高い。この南端の溝状遺構は幅が最大で65㎝、深さは12㎝を測る。北端の溝状遺構は幅が80㎝と広いが、東の方では検出できなかった。深さは10㎝程度と浅い。この溝は西端で直角に曲がるが、この部分は図版５－２の大きな畦の下にあたる。

この溝状遺構群は柵状遺構と近接し、また、別の柵状遺構と重なっている可能性も高い。水田を区画する施設として継続して作られたものの一つと考えられ、より近世に近いものである。　（岡本）



1　灰黄色（2.5Y7/2）粘質土

第27図　溝24（1/30）

遺構に伴わない遺物（第28図、図版８）

第28図におもに包含層出土の中・近世遺物を掲載した。84～109が土器、Ｃ２～９が土製品、Ｓ３は石鍋の口縁部である。第17図26～28層の中世包含層から出土したのが85～92・94・95・98・99・Ｃ２・Ｃ３・Ｃ５、25層から出土したのが96・109、現水田の造成土中から出土したのが102・103・105・106・Ｃ６～８、現水田の床土から出土したのが100・107・Ｃ４・Ｃ９・Ｓ３、調査区の側溝出土が84・93・97・101・104・108である。

84～93・95は土師器で、84～88・92は皿、89～91は椀、93は脚台、95は三

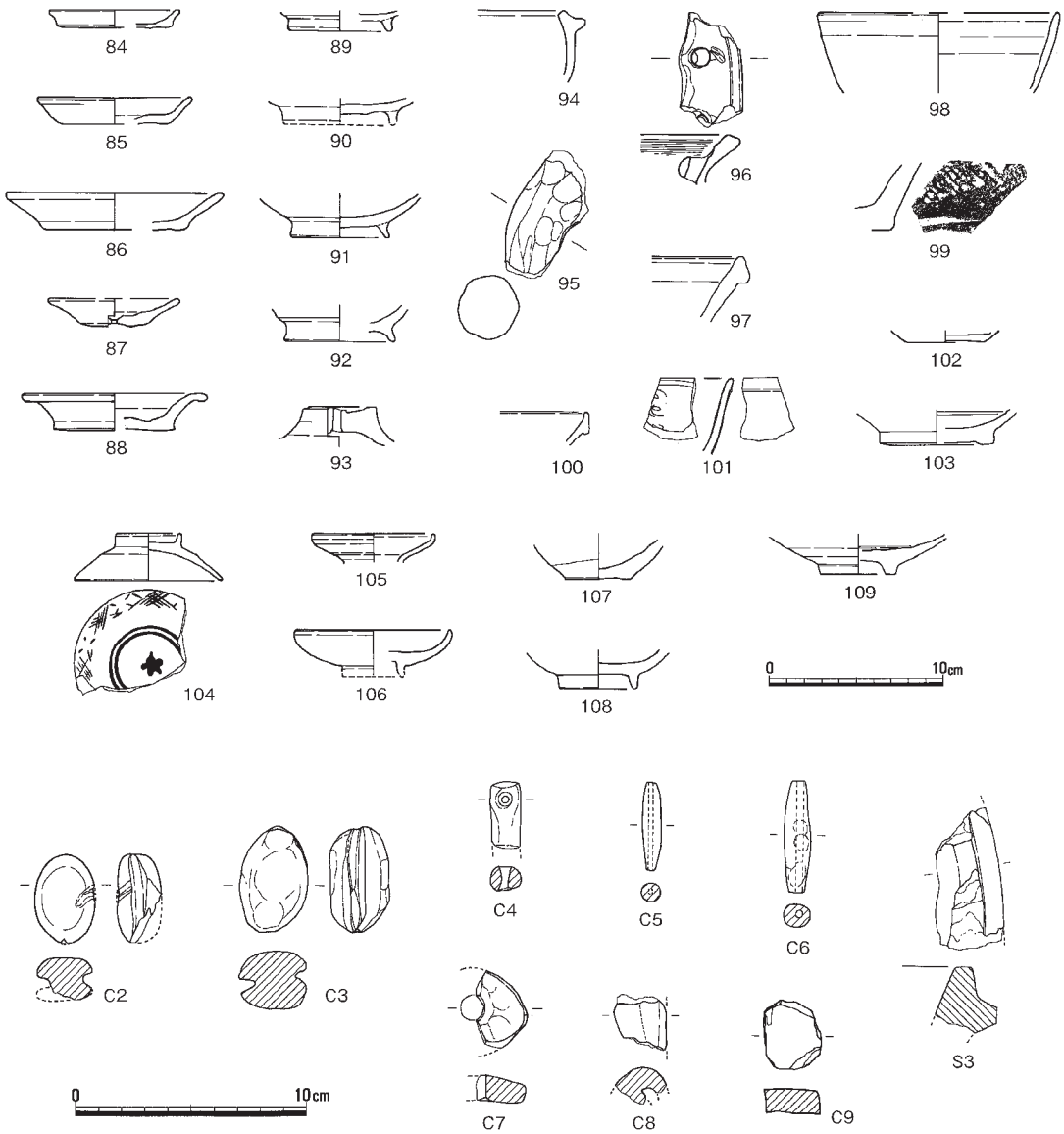
足鍋の脚である。92は高台をもつ皿とみられ、87は穿孔がある。84・88の底部はヘラキリである。椀は高台が付き、89・90の短く垂下する高台と91の外反する高台がある。93の上面はヘラキリされ、中心が穿孔されている。

94・96は瓦質土器の鍋で、94は鍔が付くもの、96は内耳をもつものである。

97は須恵器のこね鉢とみられる、東播磨産か。98は焼成が不良だが、備前焼の椀である。99も須恵器で、外面に格子目の叩き痕が残り、一部板状工具の痕跡が認められる。亀山焼の甕であろう。

100～103は輸入磁器で、いずれも碗とみられる。101は青磁、他は白磁である。101は口縁端に沈線を巡らせ、体部内面には細い沈線の草花文を飾る。103は見込み付近に沈線を巡らせる。口縁部は100のような玉縁をもつと考えられる。

104～109は近世の国産陶磁器である。104・108・109は染付磁器で、104・109は伊万里産である。104の蓋は見込みに五弁花文を置き、口縁部には四方襷文を巡らせる。107は唐津焼の椀である。105



第28図　仏生田遺跡４区包含層出土中世～近世遺物（1/4　1/3）

はオリーブ灰色の釉で、壺の口縁部か。106は白磁皿で、見込みは釉剥ぎされている。

89～91・97・98・101・103などは鎌倉時代前半、96は室町時代後半、107は16世紀、104は18世紀後半頃の年代が与えられる。このことからすれば、中世の水田は13世紀代には始まったとみられる。

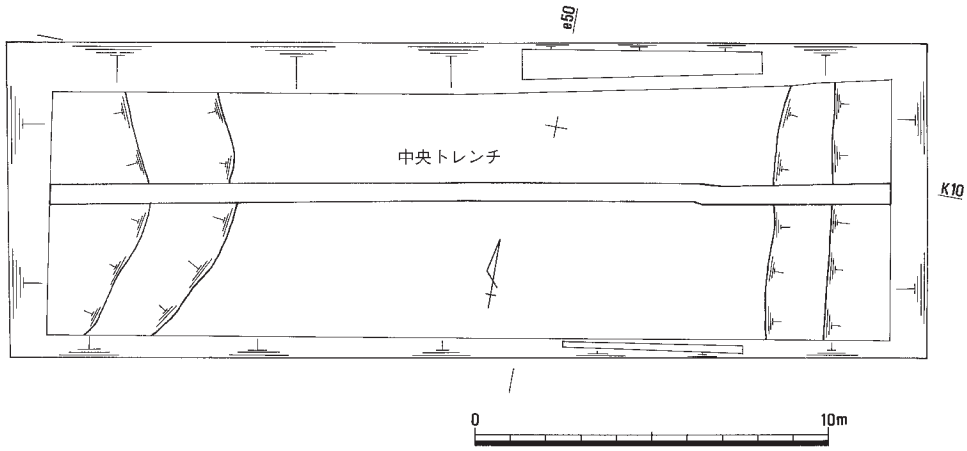
Ｃ２・３は楕円形を呈し、側縁に溝を巡らせた土錘である。Ｃ３は全長45.5㎜、幅29㎜、厚さ26㎜、重さ32.5ｇを測る。Ｃ４は棒状の両端に穿孔した土錘である。Ｃ５・６は細長い紡錘形の土錘で、中軸に貫通孔がある。Ｃ６は全長48㎜、最大径11.5㎜、重さ4.8ｇである。Ｃ７は中央に穿孔のある円盤で、復元径が44㎜ほどになる。紡錘車のような用途が考えられる。Ｃ８は穿孔を伴うようだが用途不明の土製品。Ｃ９は備前焼片を加工した円盤で、駒のような遊具であろうか。　（岡本）

第３節　中撫川遺跡４区

１　調査区の概要

中撫川遺跡４区は山陽新幹線の橋脚間に位置し、幅９ｍ、長さ26ｍ、面積230㎡の調査区である。第30図は中央トレンチ南壁の土層断面図である。盛土と現代水田層を除去した段階の図であるが、水田層の直下から柱穴や溝などが検出され、この地区が過去に大きな地下げをうけていたことが明らかである。東西両端では造成土砂の厚い堆積が認められたが、その下の土層堆積は隣接部分と段差はあるものの同じ層序関係を示すことから、橋脚工事による陥没部分を造成土砂で埋めたものである。工事中に湧水とともに砂が排出されて陥没が生じたもので、この内側にもう１か所断層面があった。

調査区の西側には古墳時代の大溝の東肩がかかり、溝内には砂（第30図13層）が堆積していた。このため、この部分では地形が下がり、古代の包含層（６・７層）が形成されていた。調査区の東側には弥生時代後期から古代にかけて大きな溝が何度も掘られていた。溝の肩部は弥生時代の包含層であったが、遺物の出土はあまりみられなかった。27層以下はほぼ水平に堆積し、下半では黒色層と黄色層の互層がみられ、洪水を繰り返しながら微高地がしだいに形成されていったことを示す。黒色層は37・35・32層、黄色層は36・34層である。38層が微高地の基盤層と考えられる。わずかに西へ傾斜するものの調査区全域で認められ、４区が微高地上に位置していることが明らかである。　（岡本）

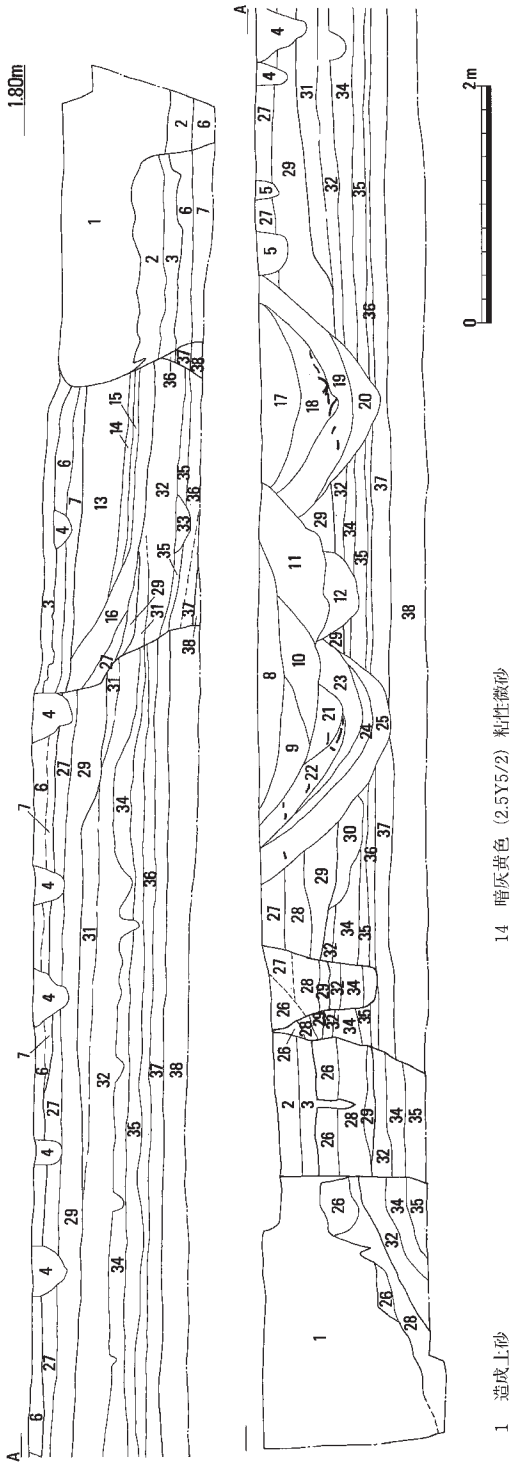


第29図　中撫川遺跡４区中央トレンチ位置図（1/200）

２　弥生時代の遺構・遺物

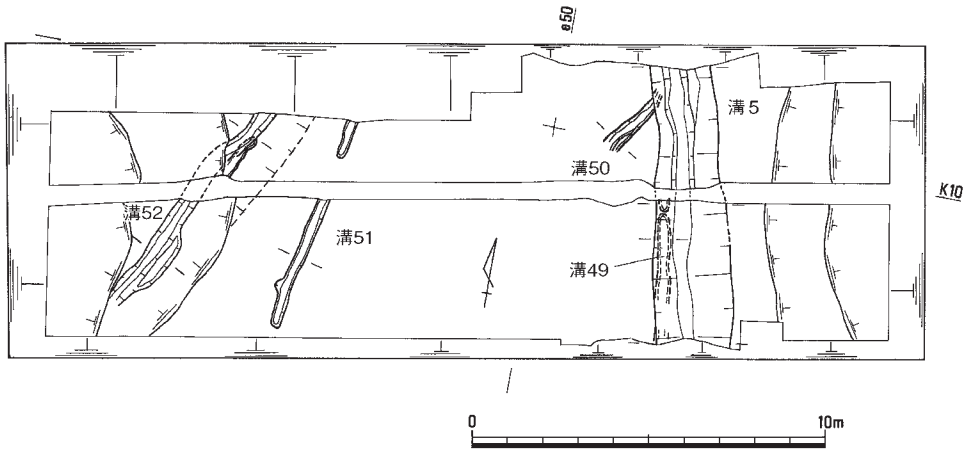
弥生時代の遺構はすべて溝で、調査区の東西に分かれる。西側の溝51・52は地形に沿うような形で、調査区を少し斜めに横切る。いずれも浅い小規模なもので、必ずしも人為的なものとは判断できない。第31図の西側に破線で示したのがかすかな傾斜面の肩で、その落ち際にあるのが溝52（第30図33層）である。溝51は第30図32層の落ち込み部分にあたる。どちらの溝も検出面が下位にあり、中期以前に遡る可能性が高い。

東側の溝は西側の溝よりも新しく、規模も大きい。溝50は、かなり掘り下げが進行した段階で土器溜まりを検出して存在が確認されたもので、本来はもっと幅があり、検出面も溝５と同じであったと推定される。この溝50は古墳時代の溝12に切られ、溝５の調査区北壁断面でも確認されなかったが、出土土器の年代が溝５と同じ後期後葉であったため、溝５の分流とみられる。溝49は溝５より検出面がかなり低いが、方向は類似する。溝５は大規模



1　造成土砂
2　緑灰色（7.5GY5/1）粘質土（粗砂混）
3　緑灰色（7.5GY5/1）粘質土（現代耕作土）
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性微砂（含炭・焼土）
5　黒褐色（2.5Y3/2）粘性微砂（含炭・焼土）
6　灰黄褐色（10YR5/2）粘性微砂
7　灰黄褐色（10YR6/2）粘性微砂
8　灰色（5Y4/1）粘質土（含礫、粗砂混）（溝25上層）
9　オリーブ黄色（5Y6/4）粘質土（含礫、粗砂混）
10　灰オリーブ色（5Y4/2）粘質土（含礫・炭・焼土、粗砂混）
11　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘質土（炭粒多、粗砂混）
12　灰オリーブ色（5Y6/2）細砂（含礫）（溝24？）
13　黄褐色（2.5Y5/3）粘性細砂
14　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性微砂
15　灰黄色（2.5Y6/2）粘性微砂
16　黄褐色（2.5Y5/3）粘性微砂（黄灰色土塊・炭粒混）
17　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性微砂（含炭）
18　オリーブ黒色（5Y3/2）粘質土（微砂混）
19　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土（微砂混）
20　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土（溝12）
21　黄褐色（2.5Y5/4）粘性微砂
22　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘性微砂
23　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性微砂
24　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
25　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土（溝５）
26　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘性微砂（溝６？）
27　黄褐色（2.5Y5/4）粘性微砂
28　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘性微砂
29　黄褐色（2.5Y5/3）～暗黄褐色（2.5Y5/2）粘性微砂
30　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性微砂
31　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性微砂
32　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘性微砂
33　灰色粘土（溝52）
34　オリーブ黄色（5Y6/4）粘性微砂
35　黒褐色（2.5Y3/1）～褐灰色（7.5YR4/1）粘性微砂
36　黄灰色（2.5Y4/1）粘性シルト
37　灰色（5Y4/1）粘土
38　灰白色（N7/1）粘土

第30図　中撫川遺跡４区中央トレンチ南壁土層断面図（1/60）

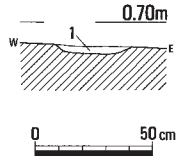


第31図　中撫川遺跡４区弥生時代遺構配置図（1/200）

な用水路で、中撫川遺跡1区から連続して検出され、その全長は160ｍに達する。　（岡本）

溝49（第30～32・36図、図版16）

調査区の南東部で検出された。ほぼ南北方向に直線的に延びる溝で、幅40㎝、深さ４㎝前後、検出全長３ｍを測る。ごく浅いためか、北東部では検出されなかった。埋土は暗灰黄色粘質土である。出土遺物はないが、検出面が第30図37層上面のため、中期以前の溝と考える。　（岡本）

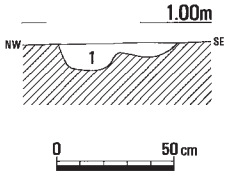


1　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土

第32図　溝49（1/30）

溝50（第31・33図、図版15・16）

古墳時代の溝12に切られていて中央トレンチではみつからず、溝５・12の完掘後の掘り下げ中に土器溜まりが検出され、第30図32層上面で確認できた。弥生時代末期の土器が出土するが、第36図上段の溝５断面内には存在しないため、溝５の分流の可能性が高い。幅49㎝、深さ11㎝を測るが、本来はもっと広くて深い。　（岡本）

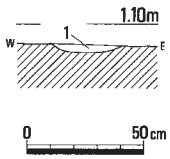


1　黒褐色（10YR3/1）粘性微砂

第33図　溝50（1/30）

溝51（第30・31・34図、図版16）

調査区西側で検出された。第30図32層の下面に凹凸が認められたため、それを面的に追求したところ、第31図に示すような溝状の遺構が確認された。幅34㎝、深さ４㎝、検出全長6.5ｍを測る。溝の方向は地形に沿うようで、32層下の凹部が等間隔に近く認められるため、耕作痕跡の可能性もある。出土遺物はなく、土層関係から中期以前の遺構と考える。　（岡本）

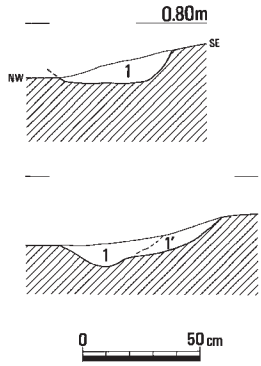


1　オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘性微砂

第34図　溝51（1/30）

溝52（第30・31・35図、図版16）

調査区の西側で、第30図34層の上面が西へ下がっていくのが確認された。その肩口の線が、第31図の破線である。下って傾斜がやや緩やかになる傾斜変換点に溝52が位置していた。調査区を斜めに縦断し、幅50～82㎝、深さ13～21㎝を測る。水田脇の溝状遺構を連想させる。出土



1　灰色（5Y4/1）粘土
1'　青灰白色粘土混灰色粘土

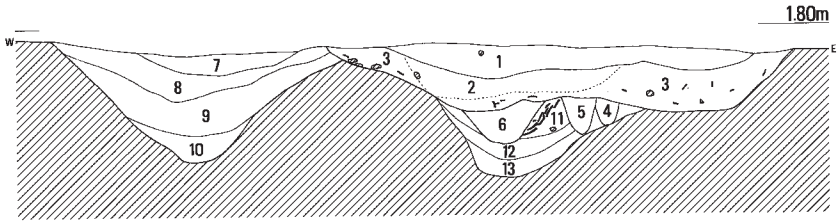
第35図　溝52（1/30）

遺物はない。（岡本）

溝５（第30・31・36～40図、図版11～15・17・18）

調査区の東半で検出された大形の溝で、用水路として利用さていたと考えられ、中撫川遺跡１区から160ｍにわたって続いている。後世の溝24・25に破壊されていたが、調査区を縦断し、検出全長は８ｍで、幅が1.65～2.20ｍ、深さは1.10～1.22ｍを測った。調査区の壁面や中央トレンチの南壁から推定すると、幅は2.5～2.9ｍあったと思われる。溝の断面形はほぼ対称的なＶ字形をなすが、底部付近はやや下方に突出し、流水による浸食を示していた。埋土は５層に分けられるようで、第36図中段では第３層が土色で二分されている。第３層の上部付近に土器溜まりが形成され、上器の一部は第２層に及んでいた。土器溜まりは、溝の廃絶後に、不用になった土器が

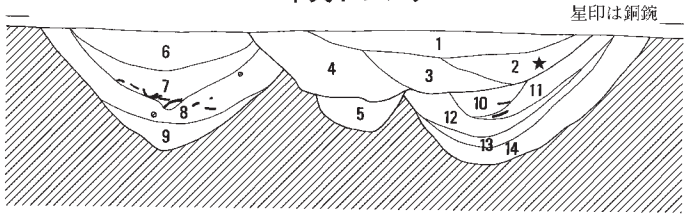
北壁



1　灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土（粗砂・炭・焼土粒混）
2　暗オリーブ色（5Y4/3）粘質土（粗砂・炭・焼土粒混）
3　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
4　黒褐色（2.5Y3/1）粘性微砂
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘性微砂
6　明黄褐色（2.5Y5/6）細砂
7　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘性微砂
8　暗褐色（10YR3/4）粘性微砂
9　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性微砂
10　黄灰色（2.5Y4/1）粘性シルト
11　灰黄褐色（10YR4/2）粘性微砂
12　黒褐色（10YR3/1)粘性微砂
13　褐灰色（10YR4/1）粘性シルト

1～3：溝25埋土　6：溝24埋土　7～10：溝12埋土　11～13：溝５埋土

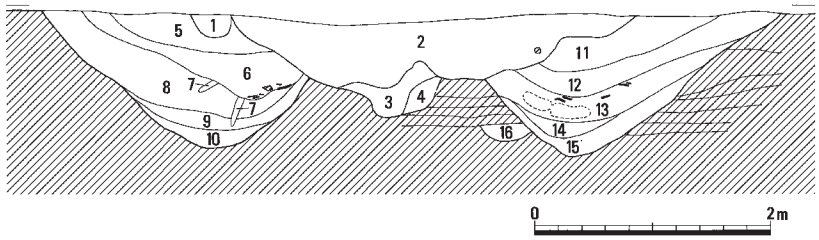
中央トレンチ



1　灰色（5Y4/1）粘質土（含礫、粗砂混）
2　オリーブ黄色（5Y6/4）粘質土（含礫、粗砂混）
3　灰オリーブ色（5Y4/2）粘質土（含礫、炭・焼土・粗砂混）
4　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘質土（炭粒多・粗砂混）
5　灰オリーブ色（5Y6/2）細砂（含礫）
6　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性微砂（含炭）
7　オリーブ黒色（5Y3/2）粘質土（微砂混）
8　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土（微砂混）
9　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
10　黄褐色（2.5Y5/4）粘性微砂
11　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘性微砂
12　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性微砂
13　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
14　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土

1～4：溝25埋土　5：溝24埋土　6～9：溝12埋土　10～14：溝５埋土

南壁



1　黄灰色（2.5Y4/2）粘性微砂（含炭）
2　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性粗砂
3　黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性微砂
5　明黄褐色（2.5Y6/6）粘性微砂
6　黄褐色（2.5Y5/4）粘性微砂（炭・焼土多混）
7　褐灰色（10Y4/1）粘性微砂
8　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘性微砂（含炭）
9　黄灰色（2.5Y4/1）粘性微砂
10　黄灰色（2.5Y4/1）シルト
11　明黄褐色（2.5Y6/6）粘性微砂（含炭・焼土）
12　黄褐色（2.5Y5/3）粘性微砂（炭粒多混）
13　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性微砂（炭・焼土多混）
14　黒褐色（2.5Y3/2）粘性微砂
15　灰色（5Y4/1）シルト
16　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土

2：溝25埋土　3・4：溝24埋土　5～10：溝12埋土　11～15：溝５埋土　16：溝49埋土

第36図　溝５・12・24・25・49（1/60）

溝内へ投棄されて形成されたとみられ、完形品はみられなかった。溝５は埋没後に中央部に窪みが残ったようで、第１層からは古墳時代の土器も出土した。

溝５から出土した土器は、土器溜まりを境に上下に二分して取り上げた。土器溜まりとその下方から出土した土器を下層出土とし、埋土第３層から第５層が下層にあたる。第36図では、上段の11～13層、中段の11～14層、下段の13～15層が下層となる。ただ、土器のほとんどは埋土第３層出土であり、第４・５層からの出土は少なかった。上層は埋土第１・２層で、第36図の中段10層、下段11・12層が上層となるが、発掘中は厳密な分層が困難であったため、土器溜まり検出までの土器を上層出土として取り上げた場合もみられた。このため、上層出土土器の中には埋土第２層と第３層出土の土器が一部混在し、上層出土土器片と下層出土土器片の接合する例も存在した。

第37・38図は下層出土の土器である。このうち、111～113・115・119・121・122・124・128・132・134・136は上層出土とされた土器片と接合した。110は最下層、すなわち埋土第５層出土である。

110～116は壺である。110は長頸壺で、頸部にヘラ描きの沈線をらせん状に一筆で巡らせる。111～113は短く下方に拡がる頸部に二重口縁をもつ壺である。112と113は同一個体とみられ、頸部下端にハケ状工具の刺突文を連続させる。114・115は直口の口縁に、扁平な胴部をもつ壺とみられる。外面には細かなヘラミガキ、内面には指頭圧痕が顕著である。116は二重口縁をもつようである。

117～121は鉢である。117～119は外反する口縁部をもつ。内外面ともに剥落しているが、118の内面はハケのようで、119の外面にはヒビが顕著である。120・121は直口の鉢で、口縁端面をもつ。120は内外面ハケ、121は内外面ヘラミガキで、口縁部内面はハケ、外面にはヒビが顕著である。

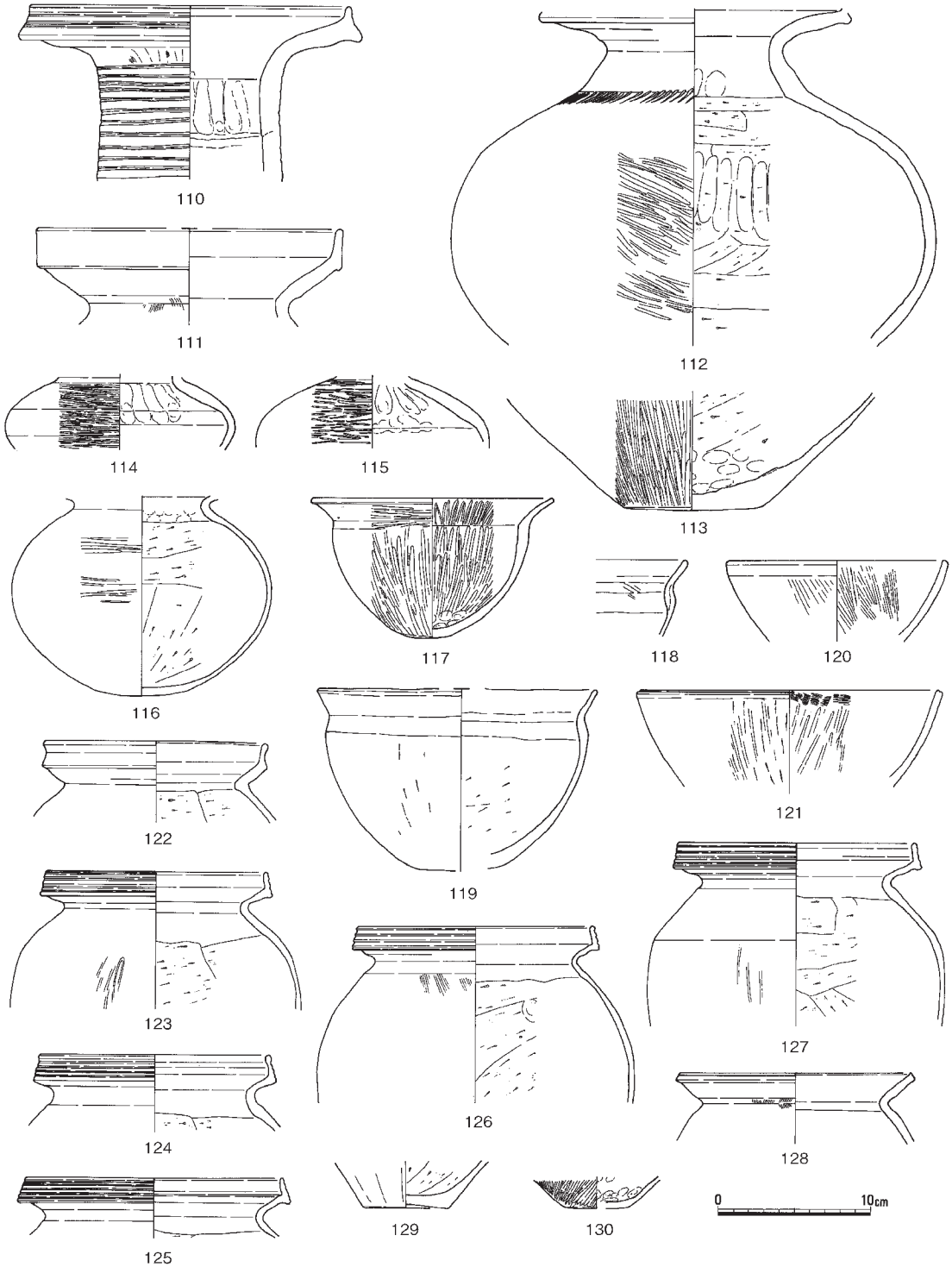
122～130は甕である。122～127は口縁部を上方へ長く立ち上げる二重口縁の甕で、口縁部が無文の122以外はすべて口縁部外面にヘラ描き沈線を巡らせている。胴部外面は剥落しているものが多いが、123・127はヘラミガキ、126はハケがかすかに認められる。胴部内面はヘラケズリされるが、胴部上端で終わるものが多く、ケズリの上端も乱れている。128は直口で、口縁部の中程が厚く、口縁端部もわずかに拡張する。胴部外面はハケのようで、内面はヘラケズリ後にナデているようである。近畿地方の庄内型の甕に類似している。129・130は甕の底部で、130の外底面はヘラミガキされる。

131～140は高杯である。いずれの高杯も柱状部は短く、杯部は口縁部が長くて大きく開く深い形のものである。口縁部の外面下端には凹部が巡り、沈線状を呈するものもみられる。脚部は内湾気味で、４個の穿孔を常とする。ただ、４孔の割付はいずれも不正確である。杯部と柱状部の接合は差し込み式になっている。外面には細かなヘラミガキが施されるが、杯部内面や脚部外面ではハケ調整が先行し、脚部内面はハケのみである。柱状部外面に縦方向の面取り痕跡を残すものが多い。柱状部内面に絞り痕跡を認めるものがあり、134はヘラケズリされる。いずれの胎土も精製粘土を使用している。

第39図は上層出土と出土層位不明の弥生土器である。上層出土のものは143～145・147・148・151・154・155・157～159・162・163・165・167～169である。141は溝25の下層出土であるが、溝５からの混入とみられる。146も溝25出土である。150と161は中央トレンチ出土とのみあるが、土器の年代から溝５出土と判断される。

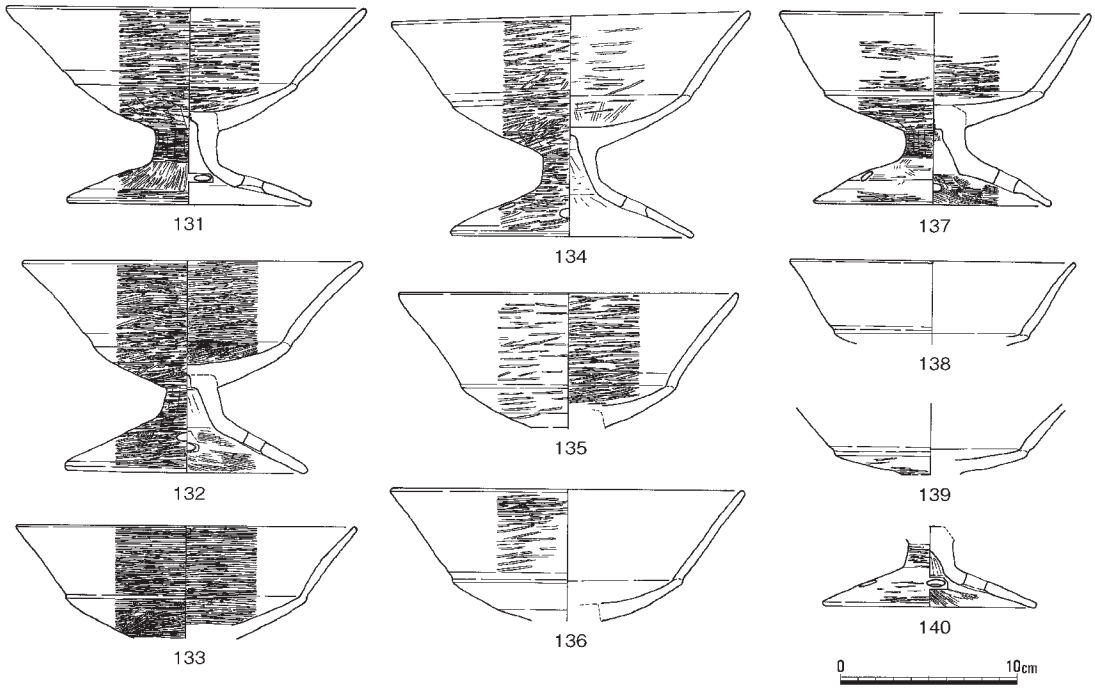
141～144は壺である。141・142は短く下開きの頸部に二重口縁をもつとみられる。142の頸部下端には貝殻刺突文が巡らされる。143の外反気味の口頸部はヨコナデされる。扁平な胴部をもつか。

145～152は鉢である。145～147は口縁部を外反させるもので、口縁部から頸部にかけて強いヨコナ



第37図　溝５下層出土遺物（１）（1/4）

デを施すため胴部の肩が張る。145の胴部はヘラミガキされるが、147の内面はハケ調整である。148は直口の鉢で、152のような底部になる可能性が強い。外面は底部まで指頭圧痕が認められる。内面は全面ハケ調整をする。149～152は鉢の底部と考えられる。150の底面には木葉圧痕が残る。152の内面には工具の圧痕があり、151と同じようにハケ調整がなされていたとみられる。



第38図　溝５下層出土遺物（２）（1/4）

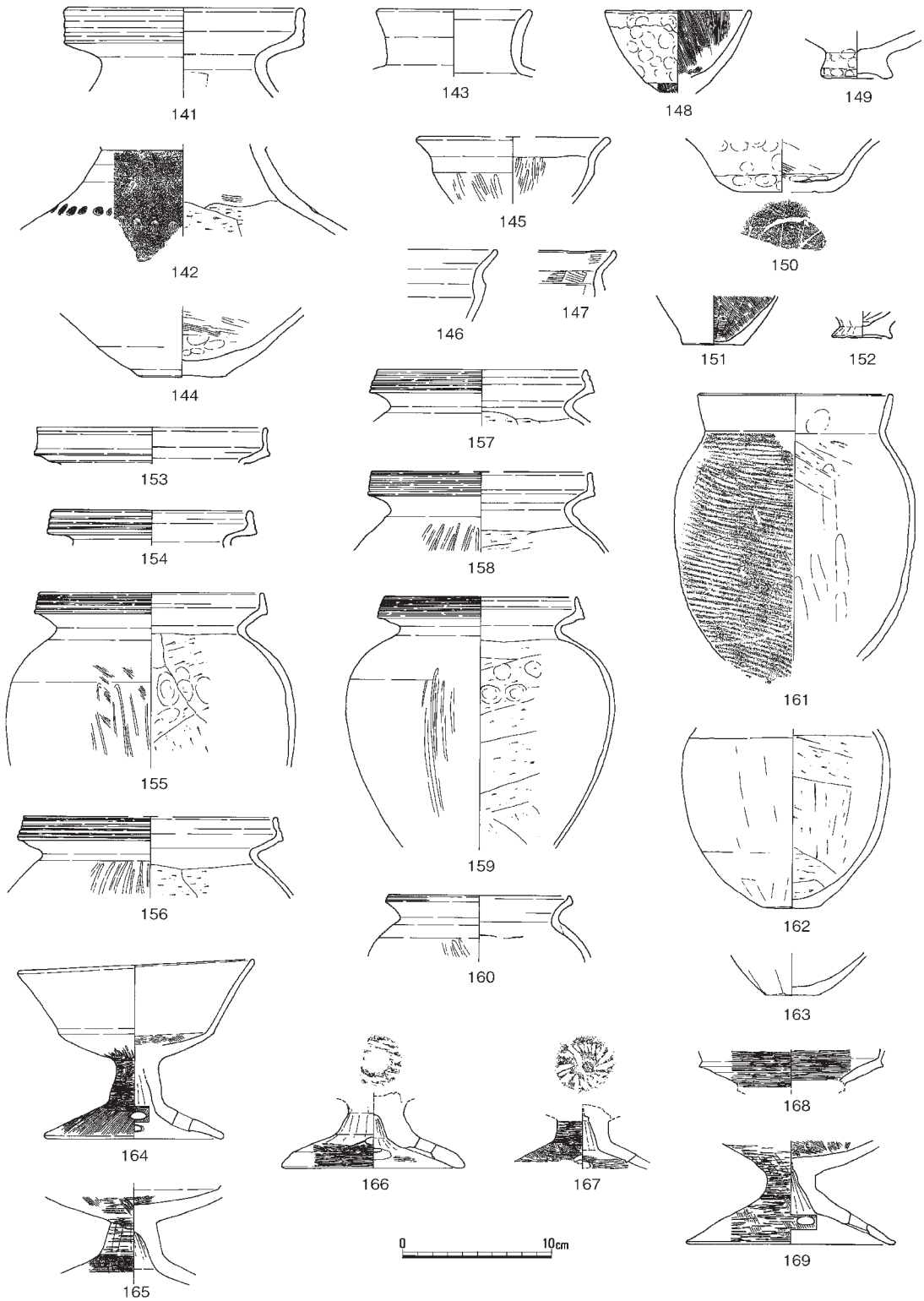
153～163は甕である。153～159は二重口縁をもつ甕である。口縁部外面はヘラ描き沈線で飾られるが、153のみ無文である。胴部外面はヘラミガキされ、内面は頸部下端までヘラケズリされる。胴部の形状は肩が張る。160・161は直口の甕である。160の口縁端部は上方へ摘み出され、端面はハケ状工具で調整される。胴部内面はナデ調整である。161の頸部から胴部の外面全面には右下がりの叩き目が残る。胴部内面はヘラケズリの後に全面ナデ調整されている。163の底部は工具で調整したような稜線が認められ、底面は多角形をしている。内面はナデ調整である。

164～169は高杯である。いずれも柱状部の短い短脚高杯で、杯部は164のように口縁部が大きく外反する。168は図示した杯部の下端にも段があるようで二段の杯部をもつ高杯のようである。柱状部の外面には面取りの痕跡のような鈍い稜線が縦方向に認められるものが多い。器表面には細かいヘラミガキが施されるが、それ以前にハケ調整されている場合が多い。164・165・169の脚部内面はナデ調整されている。杯部と柱状部の接合は差し込み式で、166や167では柱状部の上面に接合を強固にするための刻みがヘラによってなされている。高杯の胎土には精製した粘土を使用している。

第40図に示したのは溝５から出土した古墳時代の土師器である。172・176以外はすべて上層出土のものであり、溝５の埋没後、中央部にできた窪みに後世の遺物が埋没したものと考えられる。ただ、172は底面出土の注記があり、176も下層出土の可能性があるため、少し疑問が残る。

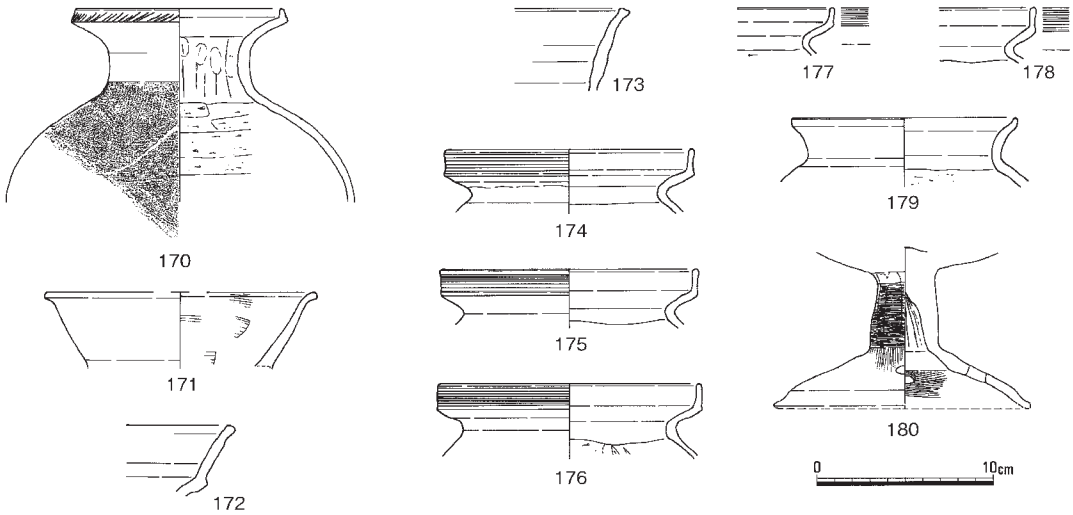
170～172は壺である。170は口縁端部を上方へ摘み上げて拡張し、端面にハケ状工具によるとみられる刻み目を巡らせる。胴の肩部にはハケ状工具で上から波状文、直線文、波状文を順に飾る。この施文方法は山陰地方の土器を思わせる。171は二重口縁の立ち上がり部分とみられ、内面にハケの痕跡が認められる。下端の頸部との接合面にもハケの転写痕跡が残る。172は鉢の可能性もある。

173～179は甕である。173は大形の二重口縁甕とみられる。外面の断面は波状を描き、口縁端部を拡張させる。174～178は口縁部を垂直に立ち上げる二重口縁甕で、口縁部の外面には櫛描き沈線が巡



第39図　溝５上層ほか出土遺物（1/4）

らされる。胴部内面のヘラケズリは頸部下端にあって、ヘラケズリの上端は直線的になる。179は直口の甕だが、口縁端部を摘み上げ気味に内湾させる。胴部内面はヘラケズリである。



第40図　溝５出土古墳時代遺物（1/4）

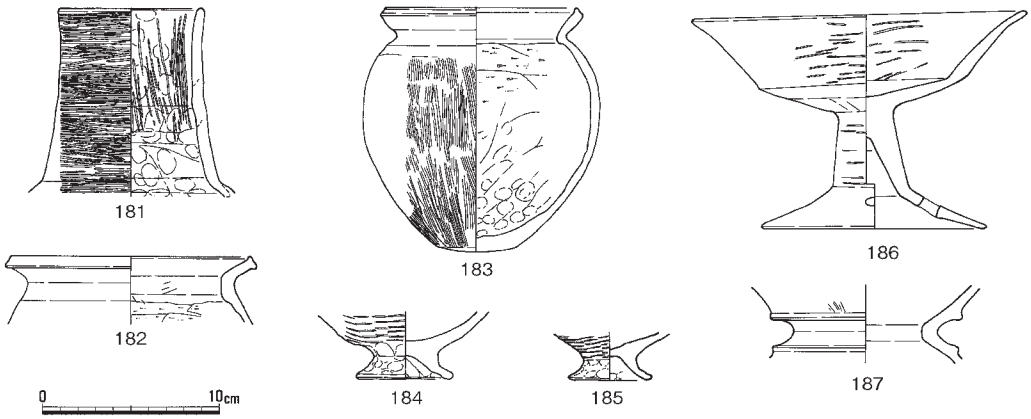
180は高杯である。柱状部の外面には面取りの稜が認められる。内面はナデで、絞り痕跡が残る。脚部は内外面ハケ調整である。穿孔は１孔しか残存していない。胎土は精製粘土である。

土器溜まりの年代は後期末である。**110**の出土から考えれば、溝５は後期後葉に機能し、後期末には埋められて廃絶したもので、古墳時代前葉に溝状の窪みが残存していたと判断される。　（岡本）

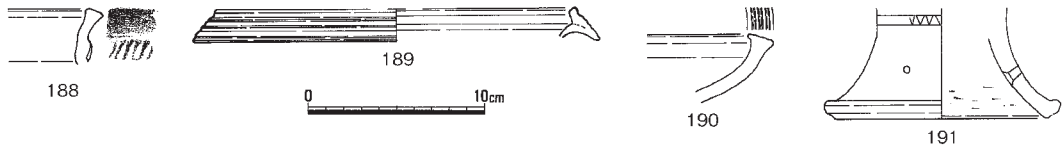
調査区東端下がり（第30・41図、図版18）

調査区の東端では、橋脚工事の影響で地盤沈下がみられたが、掘り下げ中に弥生土器がいくらか出土した。中撫川遺跡３区の調査によれば、溝５から４ｍ東には溝６が存在し、溝６に重複して古墳時代の溝11が検出されていた。第30図を見ると、上層の傾斜は陥没の影響としても、26層の存在が不自然であり、弥生土器の出土を考慮すれば、この26層が溝６の埋土である可能性は残る。

第41図の土器がこの調査区東端出土である。**181**は裾広がりの筒状の口頸部に扁平な球形の胴部に脚台をもつ壺とみられ、口縁部内面にもヘラによるミガキが認められる。**182・183**の甕は口縁端部を拡張させ、明瞭な端面を作る。**184・185**は製塩土器で、外面に叩き目を残し、小さな脚台は手捏ねに



第41図　調査区東端出土遺物（1/4）



第42図　中撫川遺跡４区出土弥生時代遺物（1/4）

よる。186の高杯は大きく外反する口縁部をもち、杯底部外面にはヘラケズリが認められる。脚部の穿孔は４孔である。187は鼓形器台である。内外面には赤色顔料が塗布されている。受け部の内外面はヘラミガキされ、くびれ部分の外面はヨコナデ調整される。

これらの上器の年代は、おおむね弥生時代後期後葉と考えるが、溝５出上上器よりは古相を示す。187は古墳時代のもので、溝11に関係した土器であろうか。（岡本）

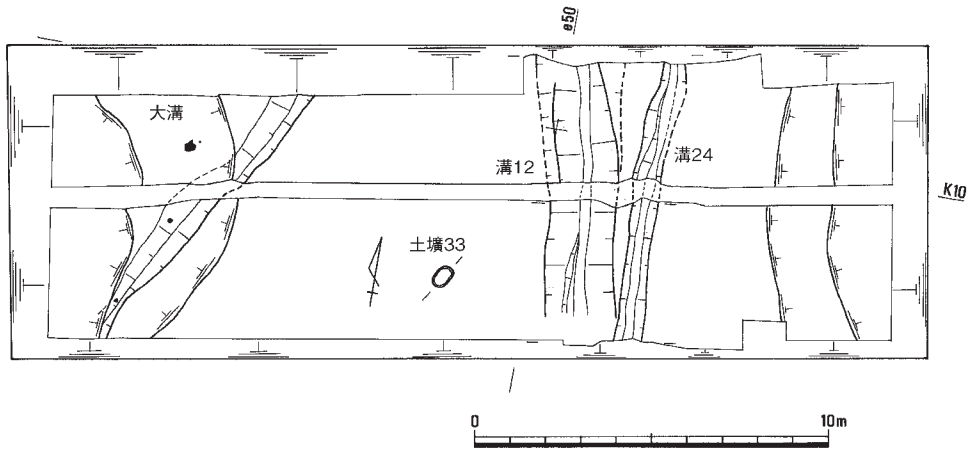
遺構に伴わない遺物（第42図）

弥生時代中期の土器がわずかに出土しているので第42図に掲載する。188は短頸壺で、頸部に刻目突帯を巡らせる。溝５出土で、中期中葉と考える。189は中期後葉の甕で、口縁部は折り返しで拡張され、凹線を飾る。190・191は高杯である。190は杯の口縁部を内湾させ、口縁端面を拡張して凹線を施す。191の外面には２条の沈線間に鋸歯文が描かれ、小孔が穿たれる。脚端は上方に拡張される。ともに中期後葉のものである。190は溝12下層、191は中央トレンチ東端出土である。（岡本）

３　古墳時代～古代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は溝が３条と土壙が１基である。弥生時代の溝５が埋没した後、すぐ西側に溝12が掘削される。溝12も溝５と同様に中撫川遺跡１区から続き、全長は160ｍに達する。溝12も古墳時代前期前半で埋没し、ここでは一時溝が消滅するが、古墳時代後期になって溝24が掘られ、続いて大形の溝25が造られることとなる。溝12では埋没時に土器が大量に投棄され、土器溜まりとなっていた。

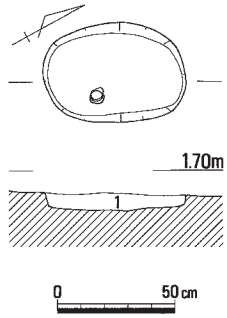
中撫川遺跡３区の南端で検出された溝12の拡張部分から始まる落ち込みが、上述の溝12の本流とは別に、南西方向へ延び、調査区の西端をかすめていた。『県報16』で大溝と報告され、幅は６ｍ程度と推測される。検出したのはその東半部分である。この大溝から出土した土器には、年代的に溝12出土土器に後続するものがある。調査区の中央南半に前期の浅い土壙が１基検出された。（岡本）



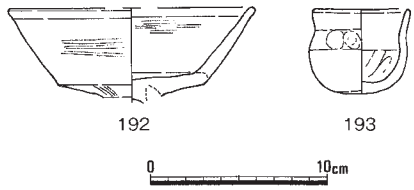
第43図　中撫川遺跡４区古墳時代遺構配置図（1/200）

土壙33（第43・44図、図版10・18）

調査区の南半中央付近、溝12から2.5ｍ西で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径が61㎝、短径は42㎝、深さ８㎝を測る。埋土は暗灰黄色粘性微砂で、焼土や炭の粒が多く含まれていた。壙底はほぼ平坦面となっていた。土壙内からは**193**の手捏ね土器が立った状態で出土した。他に**192**の高杯もあり、古墳時代前期後半の土壙である。**192**の杯底部にはヘソが付いている。（岡本）



1　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性微砂（焼土・炭粒多混）



第44図　土壙33・出土遺物（1/30　1/4）

溝12（第30・36・43・45～49図、図版11～15、18～20）

溝12は調査区の東半に位置し、調査区を南北に縦断する形で検出された。東側の肩部は溝25によって破壊されていたが、検出長が7.5ｍ、検出幅は1.55～1.95ｍ、深さは1.06ｍを測った。第36図の土層断面図から推定すると、溝の幅は2.25～2.65ｍほどあったものとみられる。ちなみに、弥生時代の溝５の西肩と溝12の東肩の距離は推定では20～80㎝しか離れていない。溝の断面形はほぼ対称的なＶ字形をなすが、底部は流水の浸食によって少し突出していた。

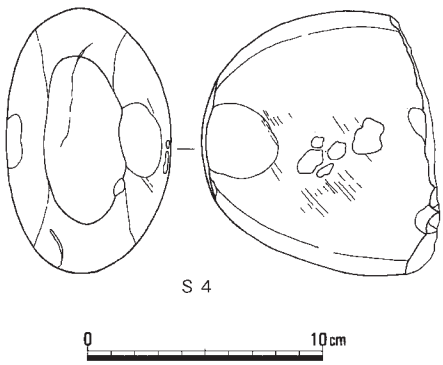
埋土は４層に分けられたが、調査区南壁では、第４層が土質の違いによってさらに２層に分けられた。溝12は溝５と同じように、埋没途中に土器が大量に投棄され、土器溜まりが形成されていた。土器溜まりはおもに第２層の下半に集中していたが、一部第３層からの出土もみられた。第２層は黒っぽい色調で、炭や焼土を点々と含んでいた。遺物の取り上げにあたっては、土器溜まり検出までに出土したものを上層とし、土器溜まりとその下から出土したものを下層、第４層から出土したものを最下層としたが、最下層出土は少数のため、本書では下層と最下層を下層として図示している。

第45図Ｓ４の石器は破断しているものの、全面に摩擦痕跡がみとめられ、磨り石のようである。残存長101㎜、幅112㎜、厚さ70㎜、重量1171ｇを測る。材質は流紋岩で、土器溜まりから出土した。

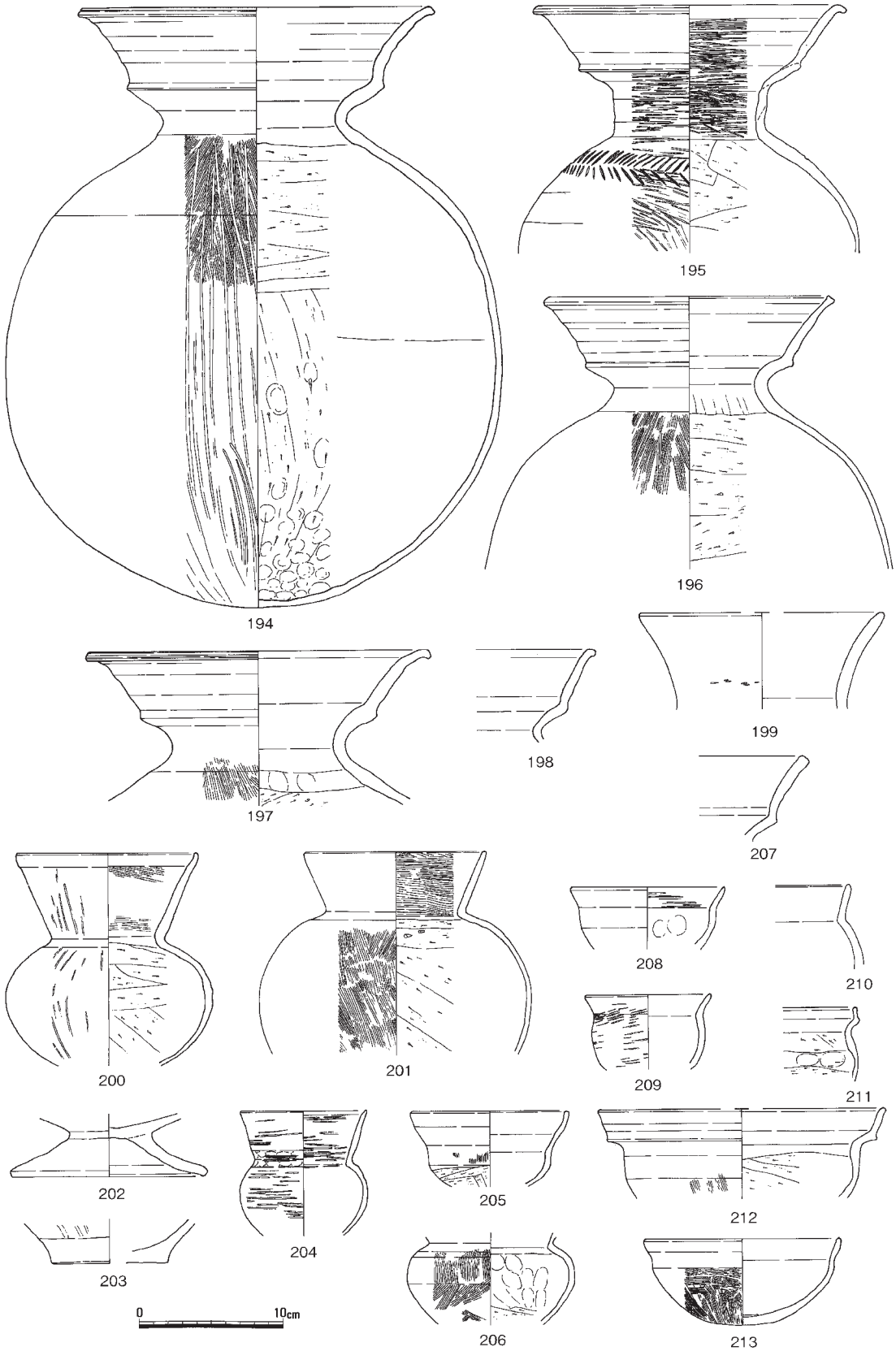
溝12から出土した土器はすべて土師器である。第46～48図は下層出土の土器で、このうち最下層出土は**203**・**208**・**213**・**218**である。

194～**206**は壺である。**194**～**198**は大きく外反する口縁部をもつ二重口縁の壺で、口縁端部をおもに外方へ肥厚させ、口縁部と頸部の境が突帯状になる。**195**の肩にはハケ状工具の刺突による綾杉文があり、山陰系の土器である。**200**・**201**・**204**～**206**は直口の口縁部と球形の胴部をもつ丸底壺で、大小２型がある。**202**は台付甕の可能性もある。

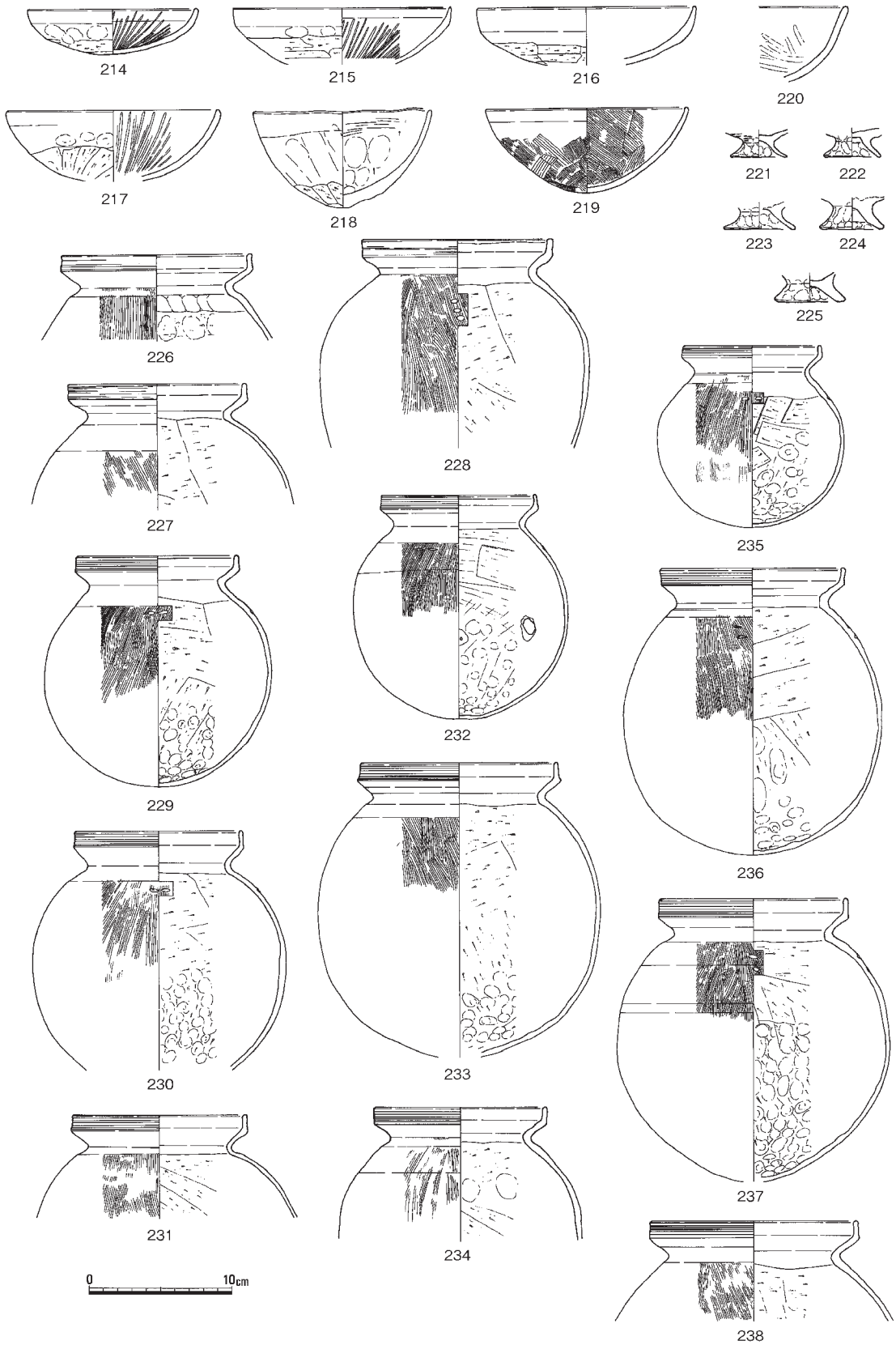
207～**220**は鉢である。**208**～**210**・**213**は口縁部が外反するもので、**209**の外面には叩き目らしき痕跡が残る。胴部内面はナデかヘラミガキのようである。**207**・**211**・**212**は二重口縁の鉢で、胴部内面はヘラケズリされる。**214**～**217**は内湾する直口をもつ浅鉢で外底面はヘラケ



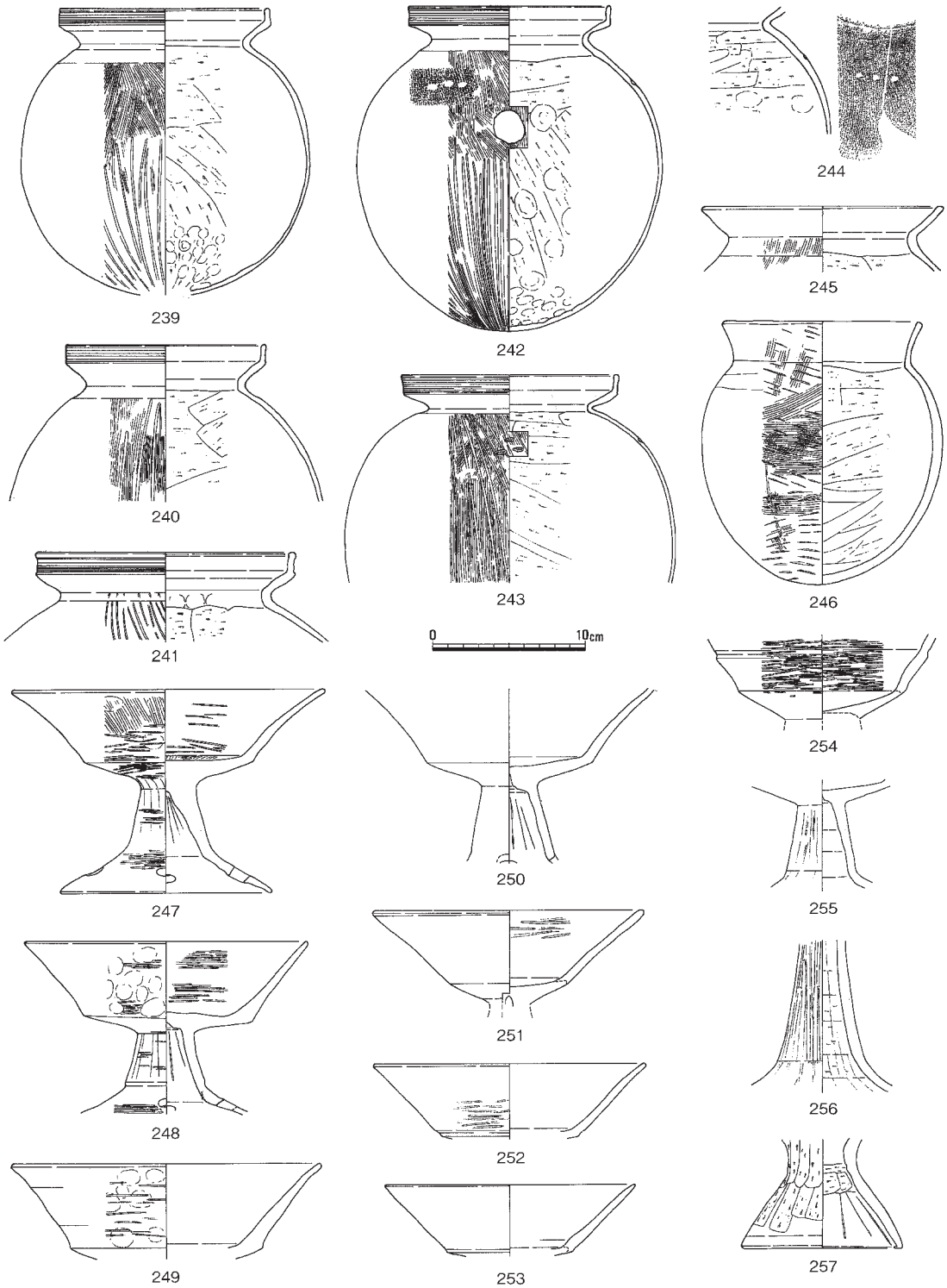
第45図　溝12下層出土遺物（１）（1/3）



第46図　溝12下層出土遺物（２）（1/4）



第47図　溝12下層出土遺物（３）（1/4）

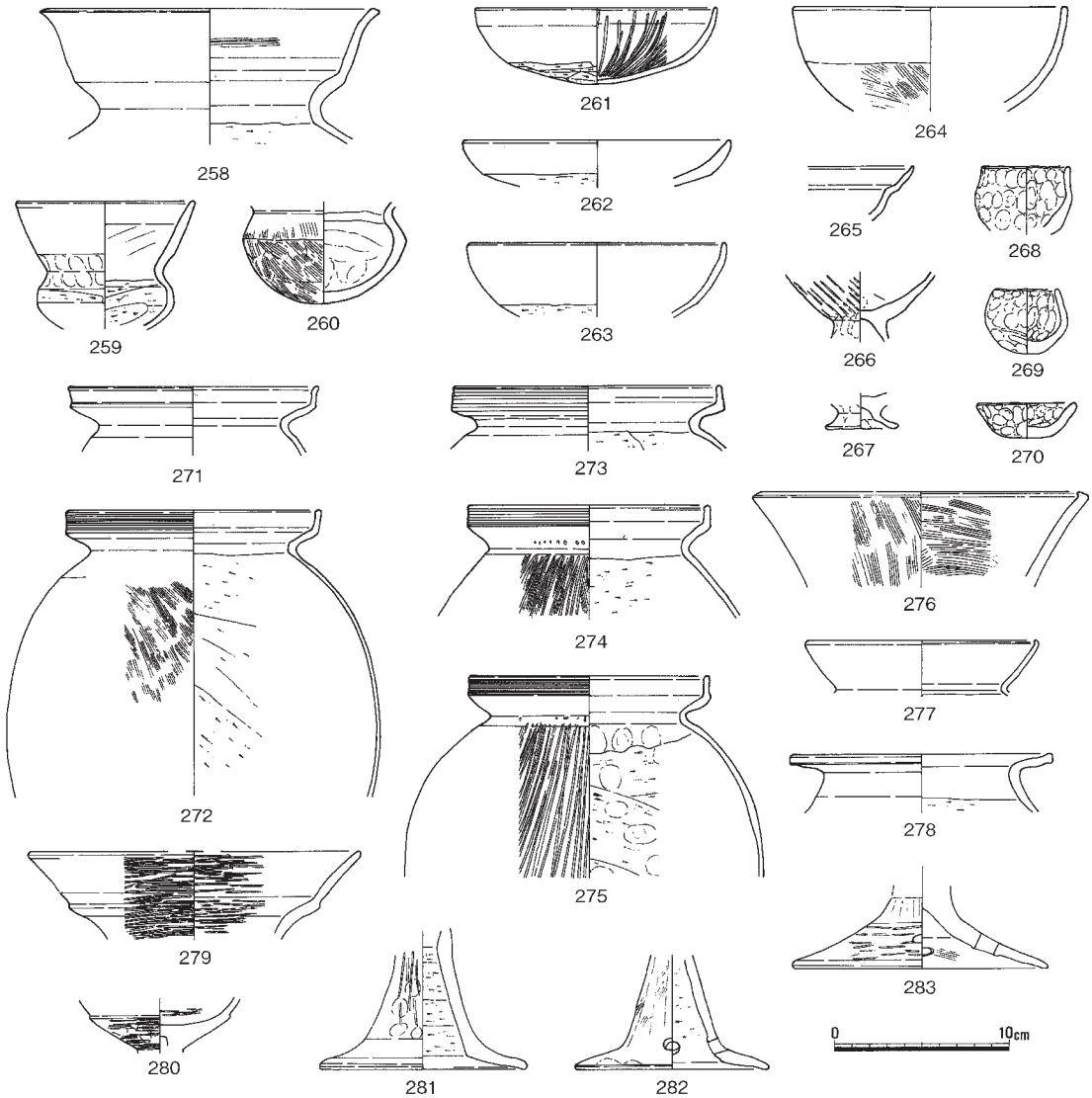


第48図　溝12下層出土遺物（４）（1/4）

ズリ、内面は放射状に暗文風のヘラミガキを施す。218～220は直口の椀形で、丸底ないし尖底となる。

221～225は製塩土器である。手捏ねの脚部のみが残存し、使用後に廃棄されたものである。

226～246は甕である。二重口縁の甕が大部分を占めるが、「く」の字口縁の甕もいくらかみられる。



第49図　溝12上層ほか出土遺物（1/4）

226～228の口縁部外面はハケ状の工具で調整がなされる。頸部が強くヨコナデされるものがあり、胴部上半はハケ調整である。229～238は口縁部外面に櫛描き沈線が施される。頸部を強くナデるものが多く、胴部上半はハケで調整され、下半はナデ調整される。胴部内面上半のヘラケズリは頸部下端に及び、上端が直線的になるものが多い。内面下半には指頭圧痕が顕著である。球形の胴部を呈するものがほとんどである。239～244の諸特徴は前者と類似するが、外面に暗文風のヘラミガキが認められる。245・246は「く」の字口縁の甕である。245の口縁は内湾し、口縁端面をもつ。246は叩き目の痕跡を残し、その後ハケ調整されている。ともに近畿地方の影響が考えられる。

247～257は高杯である。杯部は大きく外反する口縁部をもつ。254のみ二段高杯である。247～249の杯部外面には指頭圧痕が多く残る。柱状部には面取り風の鈍い稜線が認められる。柱状部上端の杯部底に小孔を残すものが多い。257は弥生土器の可能性もあり、器種がはっきりしない。

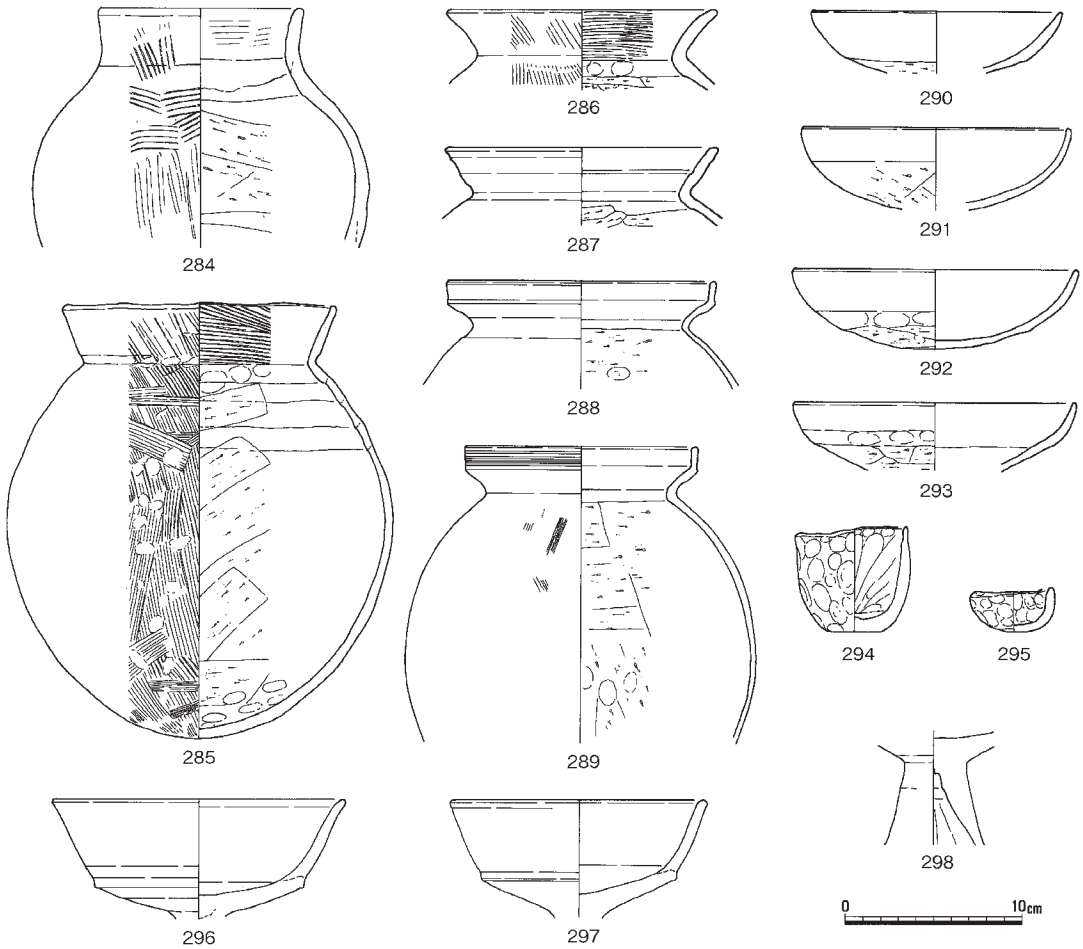
第49図は溝12の上層出土と出土層位不明の土器である。すべて土師器である。上層出土土器は258・

268・269・271・275・279・281～283である。溝25下層出土として取り上げたが、溝12出土とみられるものは**262・263・273・276**、中央トレンチ内の溝12部分から出土したものが**267・277・280**、その他は溝12出土としかわからないものである。**258～260**は壺、**261～265**は鉢、**266・267**は製塩土器、**268～270**は手捏ね土器、**271～278**は甕、**279・281～283**は高杯、**280**は器台である。　（岡本）

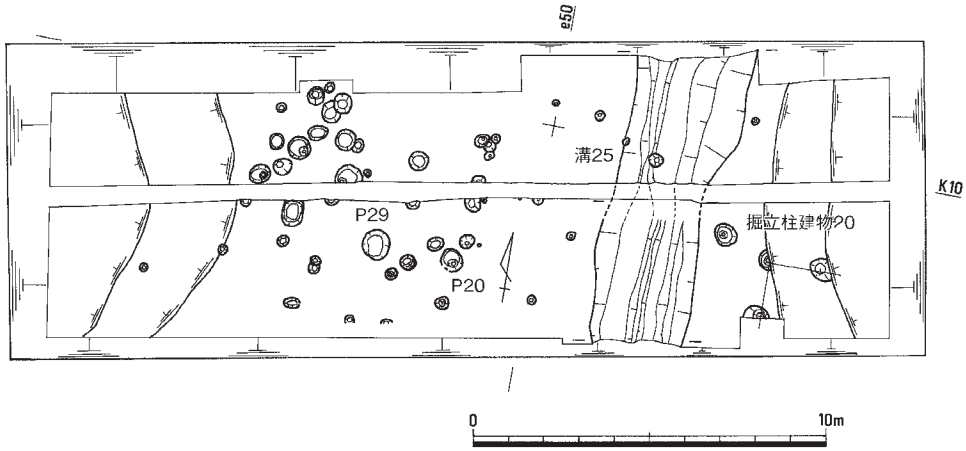
大溝（第30・43・50図、図版９・10・20）

幅６ｍと推定される大溝の東肩部を調査区の北西角で検出した。第30図に示すように、溝の大半は洪水砂とみられる細砂（13層）で埋没し、溝が機能していた時の堆積層（14・15層）も薄く２層みられた。16層は黄灰色土塊や炭粒を含むことから大溝の堆積土と考えられるが、改修時の整地層の可能性もある。溝の深さは16層の下面までで70㎝、15層の下面では58㎝を測る。洪水砂層は溝12では認められず、出土土器の年代からみても、大溝は溝12の埋没後に掘削された可能性が高い。図版９・10に見るように、洪水砂層を除去した段階で出土したのが**285・294～296**であることから、洪水砂に埋没したのは古墳時代前期の後葉と考えられる。**287・289・290**は洪水砂層の上面から出土した。

第50図に掲載したのは大溝出土の土器で、土師器のみである。**284～289**は甕、**290～293**は鉢、**294・295**は手捏ね土器、**296～298**は高杯である。**284～287**は直口の甕で、胴部外面は粗いハケ調整がなされる。鉢はいずれも浅く、底部をヘラケズリする。高杯は口縁部下端が段状となる。　（岡本）



第50図　大溝出土遺物（1/4）

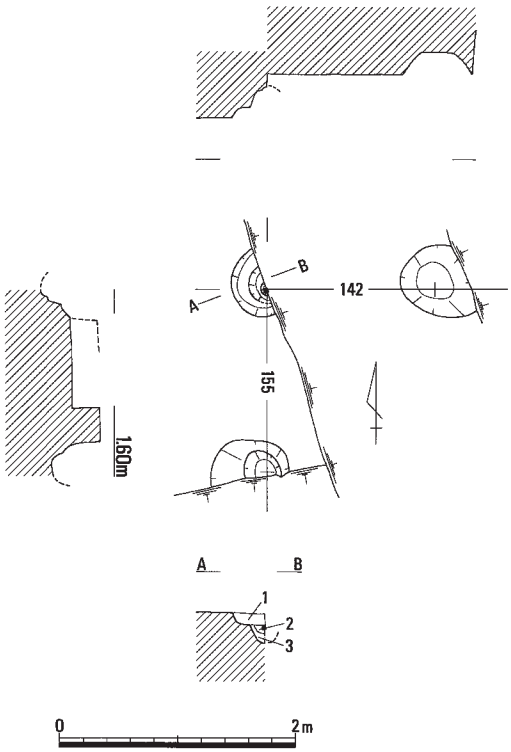


第51図　中撫川遺跡４区古代遺構配置図（1/200）

溝24（第30・36・43図、図版12・23）

調査区の東半にあり、溝25の下から検出された。調査区を南北に縦断し、検出長は８ｍ、幅62～83㎝、深さ34～46㎝を測る。底には平坦面があり、断面形は逆台形、埋土はおもに細砂である。６世紀末から７世紀初頭の須恵器が含まれていた。形態や埋土から溝24の続きと判断した。　（岡本）

古代の遺構としては溝１条と柱穴がある。溝25は大規模で、弥生時代から用水路のあった所に掘られている。水路は一時途絶えるが、古墳時代の終わり頃に溝24が掘削され、溝25で規模が拡大する。溝25は中撫川遺跡１区から続き、流長は160ｍに達する。柱穴は調査区一帯で検出されたが、南東部にある大形の柱穴は、溝25の方向と平行するようにＬ字状に配置され、また、隣接区の調査結果（『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1991(平成11)年度』岡山市教育委員会　2001年）からみても掘立柱建物のあった可能性が高い。　（岡本）



1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性微砂（明黄褐色土塊混）
2　黒褐色（10YR3/1）粘性シルト（柱根・炭粒混）
3　黒褐色（10YR3/2）粘性微砂（炭・焼土粒少混）

第52図　掘立柱建物20（1/60）

掘立柱建物20（第51・52図）

調査区の南東部で、長径59～70㎝の３基の柱穴が逆Ｌ字状に配置され、西側の２柱穴を結ぶ方向が溝25と平行しているのが確認された。南隣接地の調査では、北側の２柱穴と対応するような柱穴列があり、南北棟の掘立柱建物となる可能性が高い。現状では梁行柱間1.42ｍ、桁行柱間1.55ｍ、棟方向は真北を指す。柱穴の深さは20～41㎝で、北西柱穴では柱根が一部残存していた。柱穴からは土師器・須恵器の古代の土器とともに鉄滓が出土

した。周辺地区の調査結果からすれば、９世紀後半の可能性がある。　（岡本）

溝25（第30・36・51・53～57図、図版11・14・15・21～24）

調査区の東半にあり、幅2.5～3.25ｍ、深さ60㎝を測る大規模な溝である。調査区を縦断し、検出長は8.5ｍである。調査区内ではほぼ真北の方向をとるが、中撫川遺跡１区から160ｍにわたって連続して検出されていて、その間は蛇行する。溝５や溝24と重複していることもあってか、溝底には２条の窪みが認められ、断面形はW字形に近い。埋土の状況は、調査区の北壁・南壁、中央トレンチの断面がそれぞれに異なり、埋没過程の解釈を困難にしているが、大きく上層と下層に分けられるようである。第36図上段と中段の１層が上層にあたり、上段の２・３層、中段の２～４層が下層にあたる。下段では上下の分層が困難であった。下層では炭や焼土が上層より多く包含されていた。両層ともに礫の包含が目立ったが、それ以上に粗砂の混入が顕著で、盛んな流水のあったことが知られる。

溝25からは土師器・須恵器の土器類がかなり出土した。量的には上層が多く、土師器より須恵器がまさる。鉄滓もいくらか出土した。瓦もわずかにみられたが、とくに注目される遺物として銅鋺がある。第36図中段の星印の位置から出土したもので、下層出土と判断される。

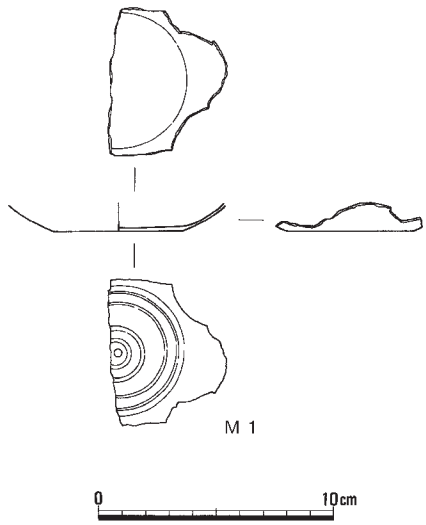
第53図が銅鋺である。底部の半分が残存し、体部もごくわずか残されている。底面は平らで、外面には線刻が同心円状に何重も認められるが、二重線が単位になっているようである。線の間隔は一定せず、底面を研磨した痕跡と考えたい。体部や器内の表面は滑らかで、全面に薄い錆がみられる。底径は54㎜、残存高は12㎜で、器壁の厚さは1.5～2.0㎜を測る。重量は12.60ｇである。器形としては、底面から体部が屈折して立ち上がり、内湾しながら直立気味の口縁に至るものと想定される。

第54図から第57図にかけて示したのが、溝25から出土した土器類である。**299～388**が須恵器、**389～422**が土師器、**423**は瓦質の丸瓦である。**299～305**は下層出土として取り上げたものであるが、発掘中は明瞭な分層が困難で、とくに溝の北半では分離できていない。上層出土として取り上げたものは**315・317・328・337・339・343・353・364・365・371・374・378・381・384・385・387・388・398・423**であり、量的には上層が圧倒する。ちなみに、中層出土としたものもあり、**308・324・346・349・369・376・377・393・395・396・407・408**がそうである。

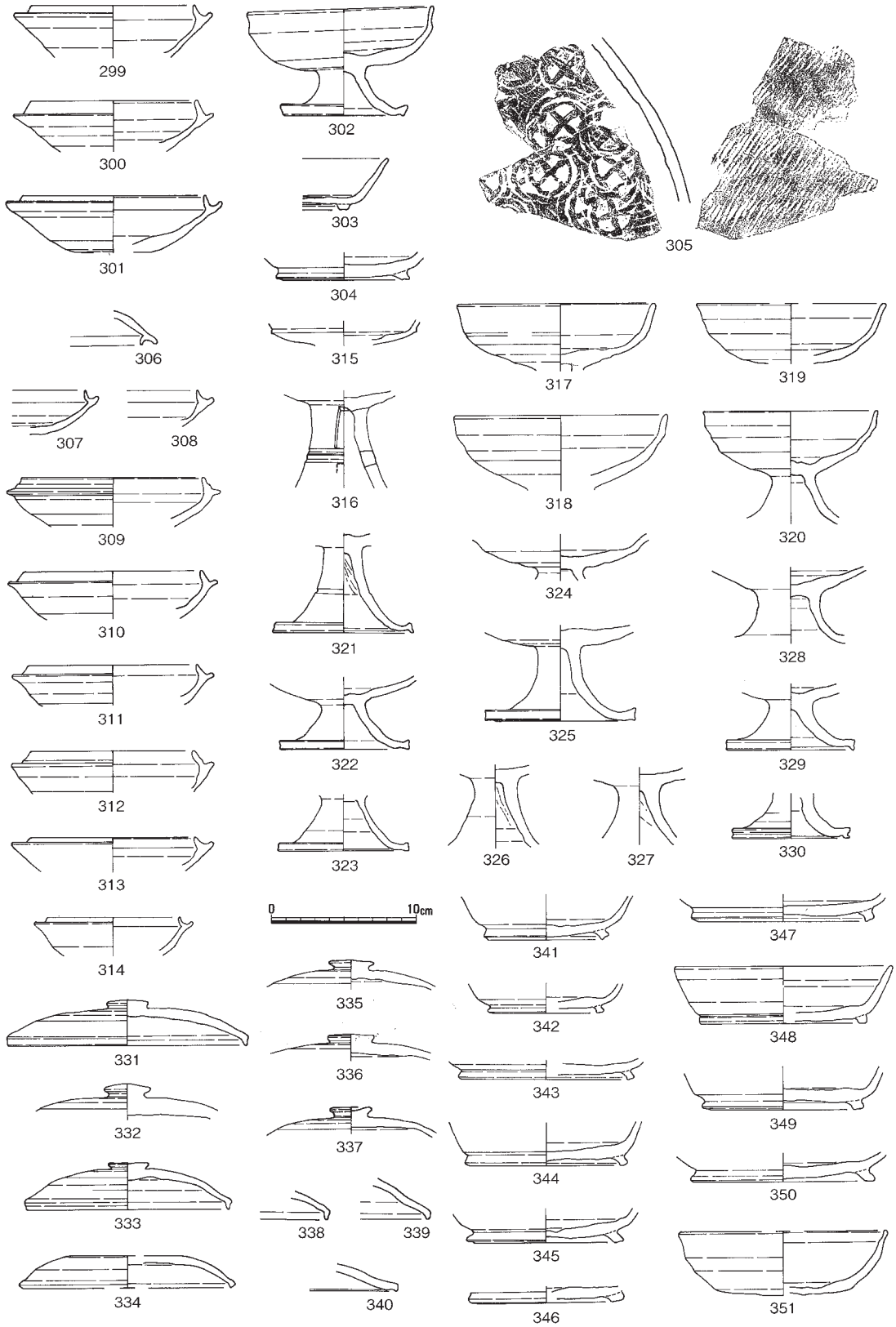
下層出土の**299～301・303・304**は杯で、口縁部が立ち上がり、受け部をもつものと底部に高台をもち、直口のものの二種がある。**302**は低脚の高杯、**305**は内面に中心が十文字になる車輪文の当て具痕をもち、甕の破片とみられる。

306は口縁部にかえりをもつ杯蓋とみられる。**307～314**は、口縁部が立ち上がり、受け部をもつ杯身である。口径は11～12.5㎝を測る。**315～330**は高杯で、**317～330**は無蓋高杯とみられる。**315**は杯部に突帯をもち、**316**は長脚で二段の透かし孔を入れる。**306～330**は７世紀中葉以前と考える。

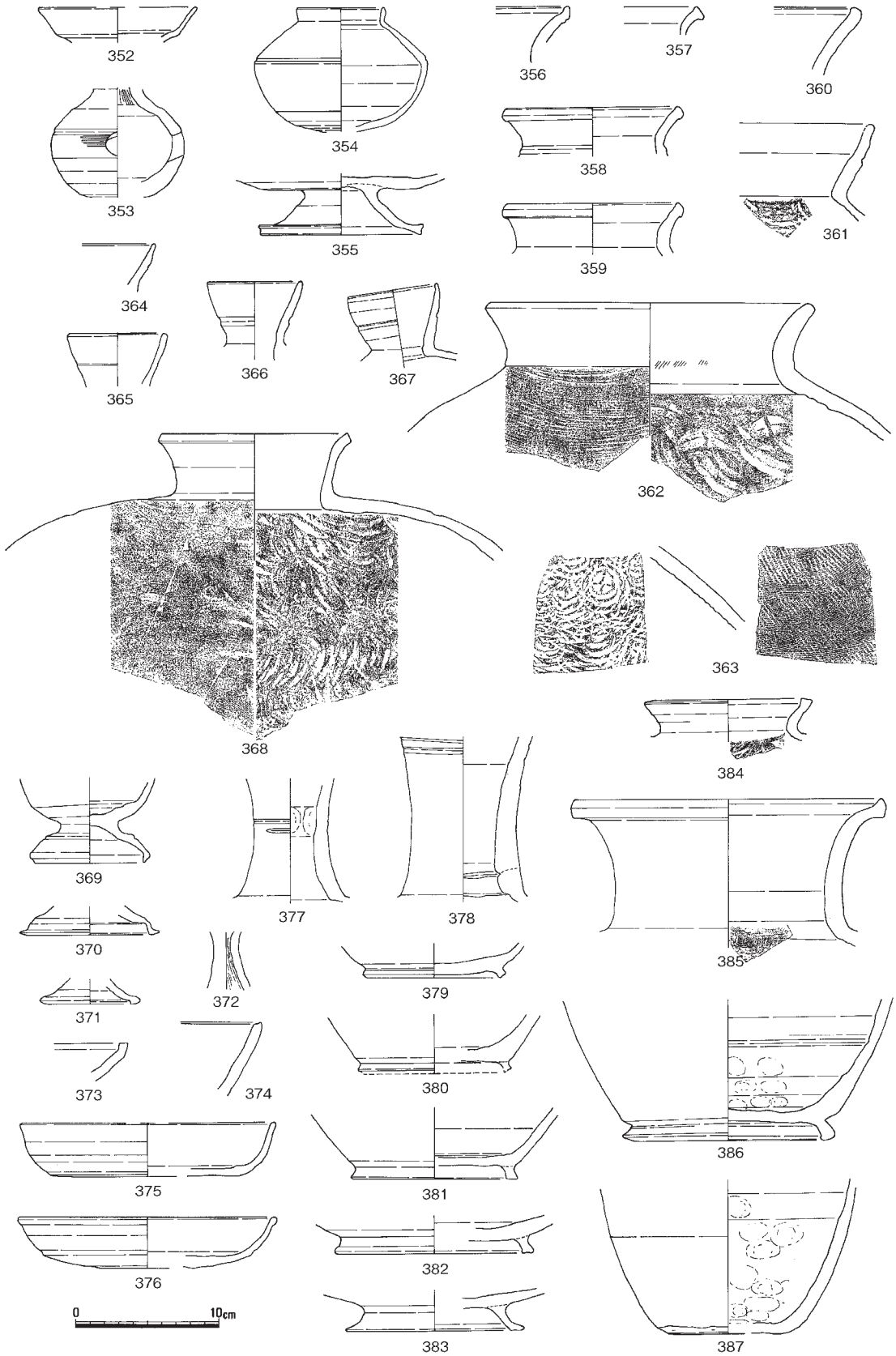
331～340はつまみをもつ杯蓋で、口縁端を下方に拡張させる。つまみは扁平な宝珠形のものと中央の窪むものがある。**341～350**は高台をもつ杯身とみられる。高台は斜め下方に延びる。**351**は無高台で、口縁部が内湾する。**331～351**は７世紀後葉から８世紀中葉にかけてのものとみられる。



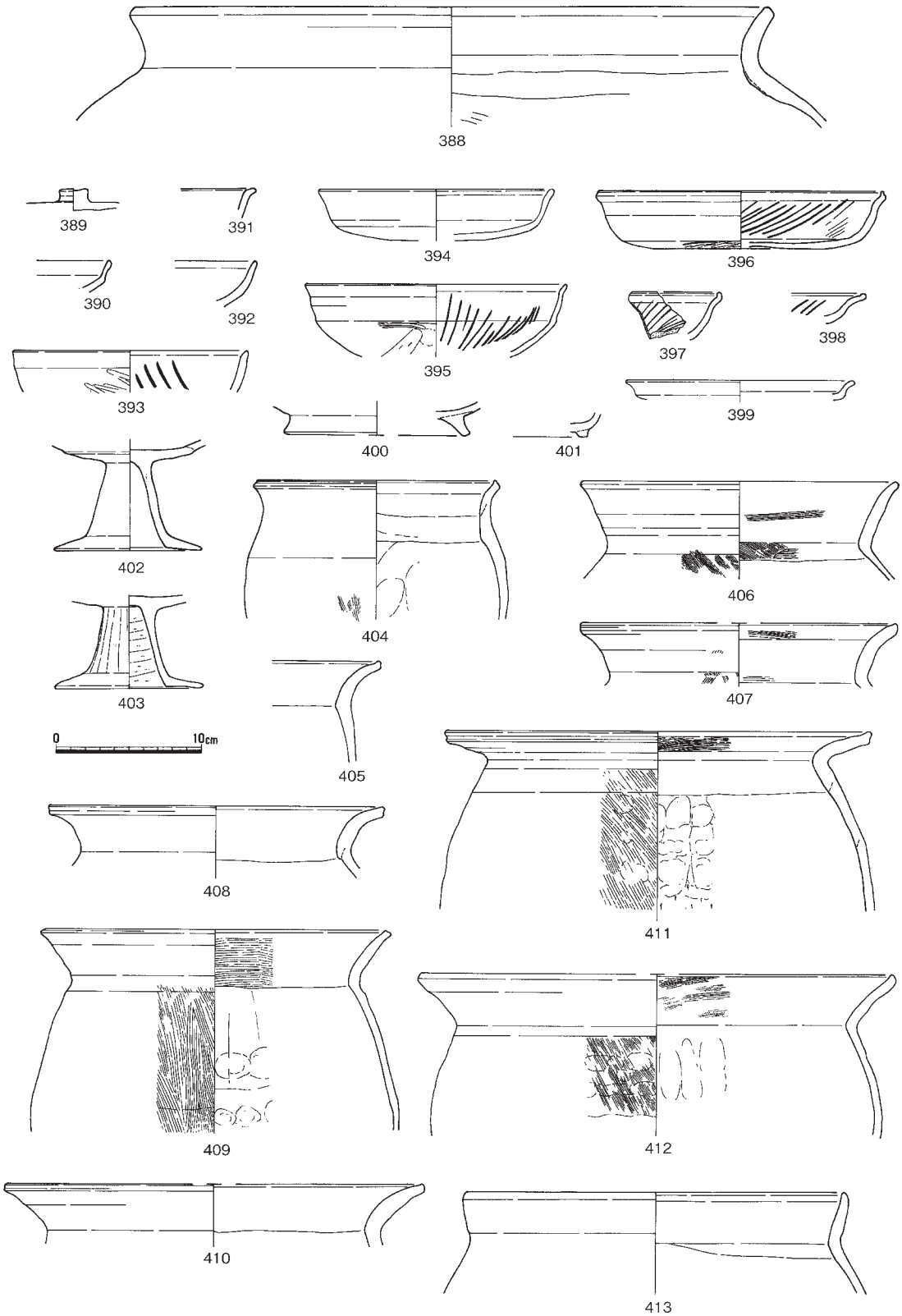
第53図　溝25出土銅鋺（1/3）



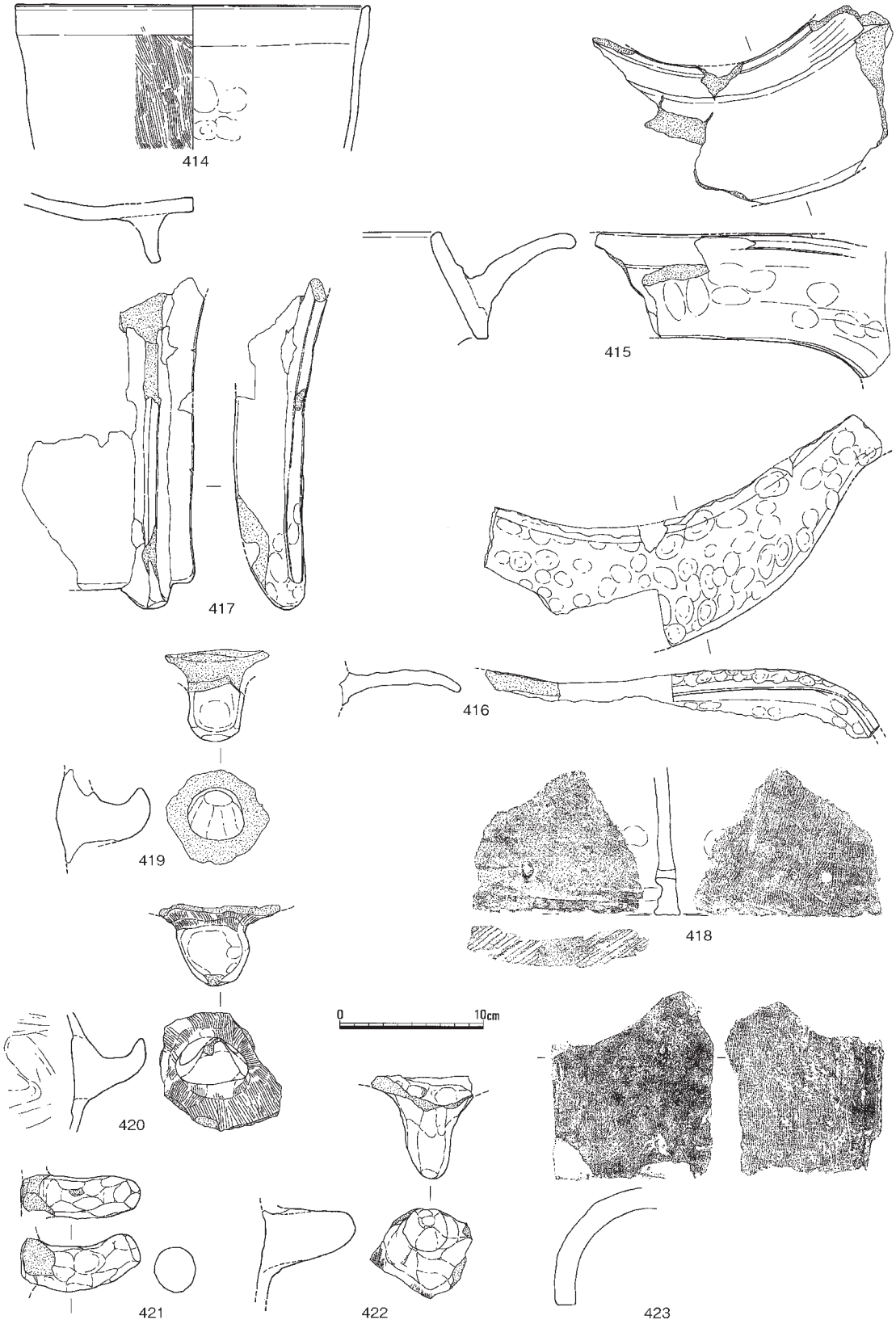
第54図　溝25出土遺物（１）（1/4）



第55図　溝25出土遺物（２）（1/4）



第56図　溝25出土遺物（３）（1/4）



第57図　溝25出土遺物（４）（1/4）

352・353は小形の甕、354は短頸壺である。355は口径の大きな器種のようで、盤のようなものであろうか。356・357は壺、358・359は小形の甕、360～363は甕で、362の外面はカキ目調整である。364～367は平瓶の口縁部とみられ、いずれも頸部に沈線を巡らせている。368は横瓶である。外面は不定方向のカキ目で調整されている。352～368は７世紀前葉から中葉にかけてのものと考える。

369～371は小形の脚台で、甕や椀のようなものに付くとみられる。372は小形高杯の柱状部で絞り目が認められる。373・374は盤か皿の口縁部と思われる。375・376は皿である。377・378は長頸瓶の頸部で、沈線が巡らされる。379～383は瓶類の底部とみられるが、383の高台は形態が異なる。384・385は壺の口縁部である。384は内側に、385は上方に口縁部が拡張される。386・387は壺か瓶の底部である。388は大形甕の口縁部である。369～388は７世紀中葉から８世紀中葉のものであろう。

389は杯蓋のつまみとみられる。つまみの径は小さく、上面が窪む。390・391・393・394・396・397は杯で、394・396は器表に赤色顔料が塗布されている。393では右下がり、396・397では左下がりの暗文が体部内面に施されている。396・397の口縁部は外反してから上方へ摘み上げられる。392・395は椀で、395の内面には暗文があり、体部外面にはヘラケズリが認められる。398・399は皿とみられる。398は器表に赤色顔料が塗布され、内面には暗文がある。400は皿に付くようで、器表には赤色顔料が認められる。401は高台付きの杯である。389～401の土師器の杯・皿類は８世紀代のものが多い。

402・403は高杯である。403の柱状部内面はヘラケズリされ、外面には面取りの稜が認められる。

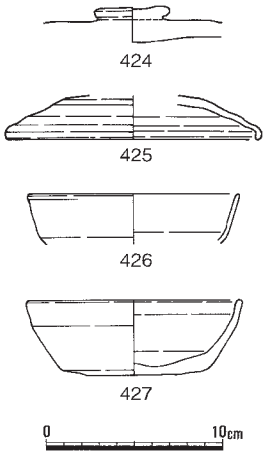
404～413は甕である。411のように、口縁部が外反し、口縁端部を摘み上げて口縁端面を形成するものが多いが、406のように口縁端部を丸くおさめるものや、413のように口縁端部を内湾させるものもある。胴部外面や口縁部内面はハケ調整で、胴部内面の上半には指頭ナデや押圧痕を残す。

414は甑である。口縁部分を厚くしている。415～418は竈各部の破片で、415は口縁部から庇部分、416は焚き口上部の庇部分、417は焚き口の下端から庇へ続く突帯部分、418は底部である。417は風を入れるために突帯の下端が突出している。418には穿孔がみられる。419～422は把手で、419・421・422の断面が円形に近いものは甑、420の扁平なものは竈に付くようである。

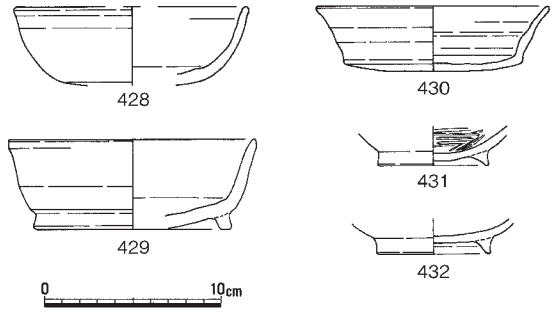
溝25やその下の溝24からは獣骨がかなり出土し、富岡直人氏（岡山理科大学）による鑑定の結果、下表のように、ニホンジカ・ウシ・イヌと判明した。文中ではあるが深謝申し上げる。

中撫川遺跡４区出土獣骨鑑定結果一覧表

番号	遺構	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長	破損	計測値	備考	色調
1	溝24	古墳後期	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨と歯	R	下顎体＋臼歯＋連合部　P2×，3○，4○，M1×	P4小窩連結，P3小窩連結	cmなし？			茶褐色
2	溝25中層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	角	R	小枝	第3枝以上（4歳以上）	cm（骨幹部，3.8mm深以上，片側破断）		2.3は一対	茶褐色
3	溝25中層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	角	L	小枝	第3枝以上（4歳以上）	cm（骨幹部，1mm程度深）			茶褐色
4	溝25中層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	遠位端＋骨幹部	f	sp　イヌ噛み痕　cm不明	Bd：35.15	viv	茶褐色
5	溝25中層	古代	哺乳綱	ウシ	上顎 M2,3	L	完形（両根一部欠損）	小窩連結	不明	M2 L：29.95Ba：22.60B p：22.10 M3 L：30.95Ba：19.25B p：—	viv	茶褐色
6	溝25中層	古代	哺乳綱	ウシ	下顎 I1?	R	歯冠部＋歯幹部	小窩独立	不明	L：(15.50)	viv 歯根部破損	茶褐色
7	溝25中層	古代	哺乳綱	ウシ	大腿骨	L	骨幹部＋遠位端	f	sp（イヌ噛み跡？　1.5mm深）（Butchering Mark）		viv?	茶褐色
8	溝25下層	古代	哺乳綱	ウシ	中足骨	R	近位端＋骨幹部	f	不明	Bp：55.00	viv? 9と同一個体	茶褐色
9	溝25下層	古代	哺乳綱	ウシ	中足骨	R	骨幹部	f	不明		viv? 8と同一個体	茶褐色
10	溝25上層	古代	哺乳綱	目不明	肩甲骨	R?	関節部	f	イヌ噛み痕		viv? ウシ？	茶褐色
11	溝25上層	古代	哺乳綱	ウシ	下顎 M3	R	完形（一部欠損）	小窩独立	不明			茶褐色
12	溝25上層	古代	哺乳綱	イヌ	第2頸骨	M	下位	f?	不明			茶褐色
13	溝25上層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	遠位端＋骨幹部	f	なし？			茶褐色
14	溝25上層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	R	骨幹部＋関節部　左内側損壊	f	不明（イヌ噛み痕？）		viv?	茶褐色
15	溝25上層	古代	哺乳綱	目不明	不明	?	不明	不明	不明			茶褐色
16	溝25上層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	ph1基節骨	L	遠位端＋骨幹部	f（遠位端）	不明			茶褐色
17	溝25	古代	哺乳綱	ウシ	上顎 M3	L	完形	前位咬頭咬耗開始	不明	L：35.90 Ba：18.25 Bp：18.10		茶褐色
18	溝25中層	古代	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	骨幹部	不明	不明			茶褐色



第58図　柱穴群出土遺物（1/4）



第59図　中撫川遺跡４区出土古代遺物（1/4）

溝25は出土遺物から８世紀中には埋没したとみられる。下層からも８世紀代の土器が出土し、埋没は短期間であったようである。始まりは７世紀前葉であろうか。　（岡本）

柱穴群（第30・51・58図、図版９・10）

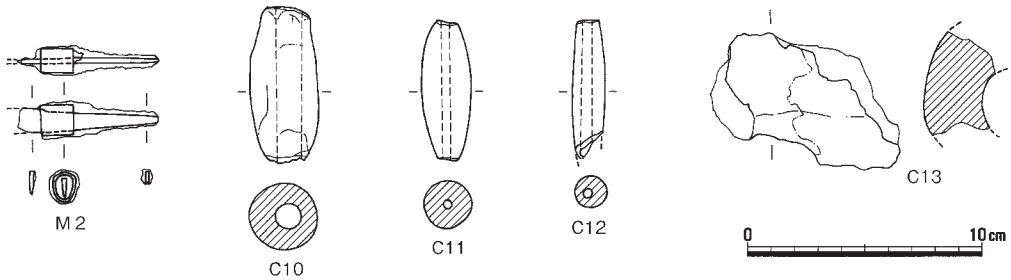
調査区の全域で柱穴状の穴が大小40基ばかり検出された。長径が20～84㎝、深いものでは40㎝の深さがあった。検出面で長径が13～30㎝の柱痕が認められたり、底に柱のめり込みを残すものがあり、多くが柱穴と判断された。埋土に炭や焼土の粒を含むものが多く、図版に示したように、焼土塊が充填されているものもあった。大形の柱穴は出土遺物が多い。第58図の土器は**424**がＰ20、**425**～**427**がＰ29出土で、**424**・**425**は須恵器の蓋、**426**・**427**は須恵器の杯である。奈良時代のものか。　（岡本）

遺構に伴わない遺物（第59・60図）

第59図は側溝や包含層から出土した土器である。**428**は須恵器椀、**429**は須恵器杯でともに８世紀、**430**は土師器杯で９世紀、**431**は黒色土器椀で10世紀、**432**は土師器椀で11～12世紀代のものと考える。第60図も包含層出土遺物である。**Ｍ２**は刀子の茎から関にかけての破片で、鋒は完存していた。背に関をもつようである。**C13**は羽口の可能性が高い土製品で、被熱痕跡が認められる。　（岡本）

４　中世以降の遺構・遺物

調査区内には中世の包含層は存在せず、過去に地下げを受けたとみられる。中世の遺構は確認されず、柱穴からも中世の遺物は出土しなかった。表土層などから中世土器が若干採集されたが、図示できるほどのものはない。第60図の土錘**C10**～**12**は中世のもののようで、両端がすぼまる。**C10**は全長66㎜、重さ50.5ｇ、**C11**は全長58㎜、23.1ｇ、**C12**は残存長57㎜、10.2ｇを測る。　（岡本）



第60図　中撫川遺跡４区出土古代～中世遺物（1/3）

第４節　小結

１　発掘調査の成果

今回の発掘調査は小面積ではあったが、各調査区ともに新しい成果を上げることができた。ここでは、前回の調査結果と関連させながら、その成果を述べて今回の調査のまとめとしたい。

仏生田遺跡１区では、弥生時代後期の井戸２の検出が注目される。これまで、この調査区の弥生時代の遺構は溝のみで、それも北北東から南南西に直線的に延びる溝が何条も平行する状況を呈し、用水路が掘り直されつつ、長期間維持されていた地区とみられた。すなわち、微高地の端部に近く、集落の周縁と考えていたのである。ところが、井戸がみつかったということは、近接して生活の拠点となる住居の存在が予想され、弥生時代の集落がこの地区に及んでいたことが考えられる。古墳時代には竪穴住居が検出されているが、すでに弥生時代後期から集落が形成されていたとみられる。

井戸２からはかなりの土器が出土し、復元完品がまとまっていた甕をみると、二重口縁の外面をハケ状工具で調整するものがほとんどであり、形態的にも斉一性がみられた。土器編年上の一括資料として利用できると考える。溝３から土器の出土があり、年代が確定したのも成果の一つである。

仏生田遺跡４区では古代の水田層の確認がまず上げられる。仏生田遺跡５区から広がっているもので、掛無堂遺跡から中撫川遺跡で検出された古代の集落ないしは官衙との関係で注目される。水田層からは平瓦が出土し、緑釉陶器も包含されていた可能性が高い。微高地端部から16ｍほど離れて検出された土手状遺構は当時の水田の形態を考える資料とされよう。

微高地の端部に沿うような形で検出された弥生時代の溝23は、微高地縁辺部における水田などの開発利用との関連が考えられる。低位部には弥生時代後期の包含層があり、いくらか土器片が出土している。仏生田遺跡４区に近接して弥生時代中期以降の集落の存在する可能性が高い。

なお、仏生田遺跡４区では中世前半に大規模な地下げがなされている。これは仏生田遺跡１区でも同様であり、この地域においては、この時期に新たな開墾事業が展開されたとみられる。このことについては、第１章でも少しふれた堪井十二ヶ郷用水の開発との関係で注意される資料である。

中撫川遺跡４区は、すでに、隣接地で度重なる発掘調査が実施されていて、それらから推定されていた通りの遺構がほぼ検出された。新しい事実としては、調査区の東半を縦断している溝群が中撫川遺跡１区から延々と続いて流長が160ｍに達し、さらに南の岡山市教育委員会が実施した調査区へ300ｍ以上にわたって流れていたことである。弥生時代後期から奈良時代まで、同じ場所で幾度となく掘り直されながら継続していることから、この地域における幹線水路であったとみられる。　　（岡本）

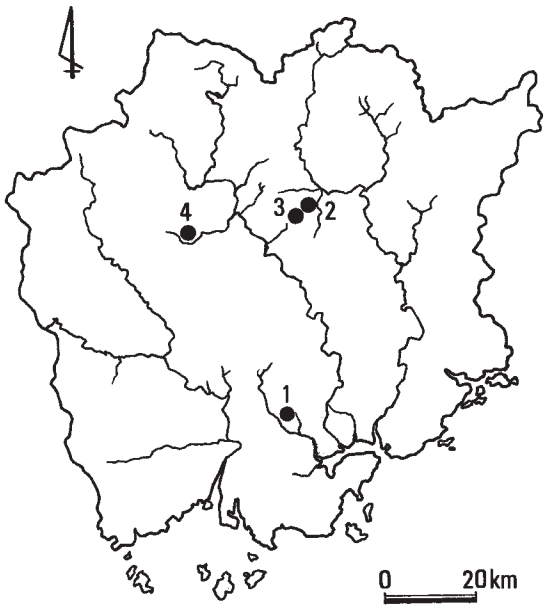
新旧遺構名対照表

仏生田遺跡１区		仏生田遺跡４区		中撫川遺跡４区			
報告書遺構名	調査時遺構名	報告書遺構名	調査時遺構名	報告書遺構名	調査時遺構名	報告書遺構名	調査時遺構名
井戸　２	ＮＯ．５	溝　２３	ＮＯ．２	溝　４９	ＮＯ．10	土壙３３	ＮＯ．５
溝　　３	ＮＯ．４	土壙１０	ＮＯ．５	溝　５０	ＮＯ．９	溝　１２	ＮＯ．３
溝　１２	ＮＯ．３	土壙１１	ＮＯ．１	溝　５１	ＮＯ．11	大溝	ＮＯ．７
		土壙　１	ＮＯ．４	溝　５２	ＮＯ．６	溝　２４	ＮＯ．８
		溝　２４	ＮＯ．３	溝　　５	ＮＯ．４	溝　２５	ＮＯ．２

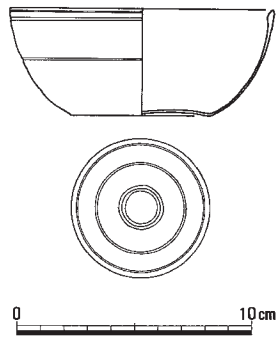
２　溝25出土の銅鋺について

溝25の下層より出土した銅鋺は、底部を半分ほどと体部をわずかに残す破片であった。平底の外面には２条一組の沈線が同心円状に多数巡り、底径は5.4㎝、底部の厚みは1.5～2㎜を測る。底部から緩やかに立ち上がる体部は厚さ1～1.5㎜で、現存する器高は1.2㎝である。

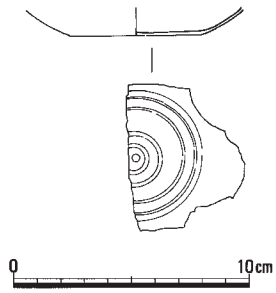
現在、県内出土の奈良時代以前の銅鋺は中撫川遺跡を含め４例が確認されている。なかでも荒神西古墳出土のものは完品で、若干上げ底となるが中撫川と同様に沈線が多数巡る平らな底部をもち、厚み・底径ともほぼ同じである。これらの銅鋺は毛利光俊彦氏の分類(註１)する無台鋺ＢⅠ類にあたると考えられ、うち体部に沈線が多数巡るものを7世紀前半に、沈線の少ないものを7世紀後半に比定している。荒神西古墳の銅鋺は無袖の横穴式石室内から宝珠つまみの須恵器杯蓋とともに出土している(註２)。杯蓋の年代は７世紀半ばと考えられ、毛利光氏の編年ともズレはない。中撫川の銅鋺についてもこの年代を当ててよいものと思われる。



1　中撫川遺跡　　3　殿田１号墳
2　荒神西古墳　　4　定北古墳



荒神西古墳出土銅鋺（地図２）



中撫川遺跡出土銅鋺（地図１）

第61図　岡山県内銅鋺出土地分布図

岡山県内出土銅鋺一覧表

	遺跡名	遺跡種別	出土遺構	銅鋺種類	毛利光分類	時期	備考
1	中撫川遺跡	集落	溝	無台鋺	無台鋺ＢⅠ	7世紀後半	
2	荒神西古墳	円墳	横穴式石室	無台鋺	無台鋺ＢⅠ	7世紀後半	
3	殿田１号墳	円墳？	横穴式石室	無台鋺	無台鋺ＡⅠ	7世紀後半	
4	定北古墳	方墳	横穴式石室	鋺　蓋	高台付鋺Ｂ or 高脚付鋺Ａ	7世紀後半	

銅鋺は仏具として捉えられているが、寺院やそれに関連する遺跡からよりも古墳からの出土量が多く、分布も関東周辺に集中している(註３)。こういった状況から必ずしも銅鋺を仏教と結びつけて考える必要はなく、実用の豪華な食器として豪族層に浸透していたとの見解がなされている(註４)。古代の集落内の溝から破片となって出土した中撫川遺跡の銅鋺はどのような性格を持つものであったのか。長野県では集落遺跡からも銅鋺が多数出土していることが報告されており、その年代にも幅があることから、金属器を頂点とする大陸の食膳具様式を畿内で受容した後、７世紀代には地方で実用の食器として有力豪族層に浸透、９世紀以降は施釉陶器に高級食器としての地位を譲り、その後は仏具としてのみ中世以降も残されたという一連の流れが想定されている（註５)。中撫川の銅鋺が出土した溝25は『県報182』の溝25に続くもので、7世紀中葉～８世紀代の遺物を含む。この溝の東岸には8世紀代の土器をピットに含む大形の掘立柱建物群が整然と並んでおり、建物周辺の包含層やたわみからは多量の緑釉陶器が出土している(註６)。また今回の調査区のすぐ隣でも緑釉陶器を含む掘立柱建物が検出されている(註７)。溝・建物・周辺埋土から出土した銅鋺以外の仏教に関係する遺物としては、瓦が若干あるにすぎない。また溝内の遺物に完品の土器が一括して廃棄されたようすはなく、破片が散在する状況であった。

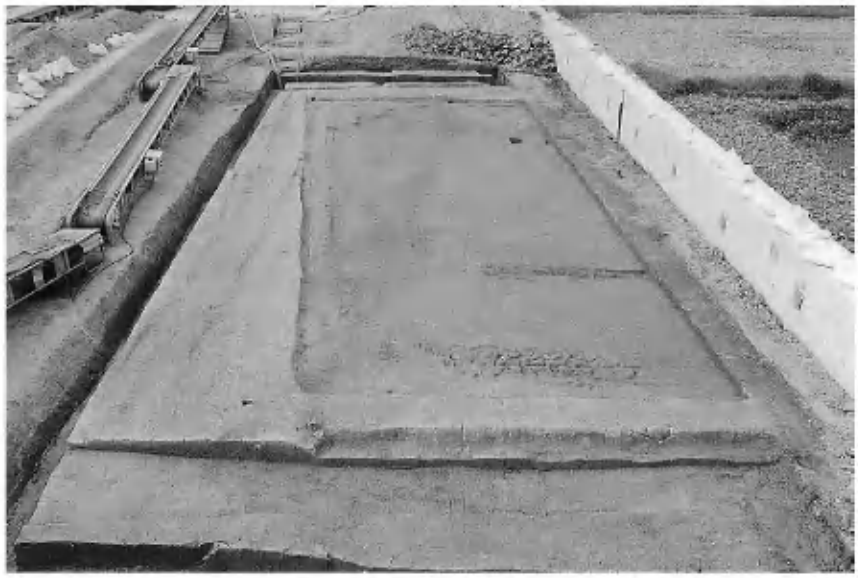
以上のことから中撫川遺跡では、溝周辺の集落や建物群周辺で緑釉陶器が現れるまでの間、高級食器として須恵器や土師器とともに銅鋺が長く用いられたのではないだろうか。そして破損した後には他の食膳具と同様、溝に廃棄されたものであったと考える。（稲谷）

註

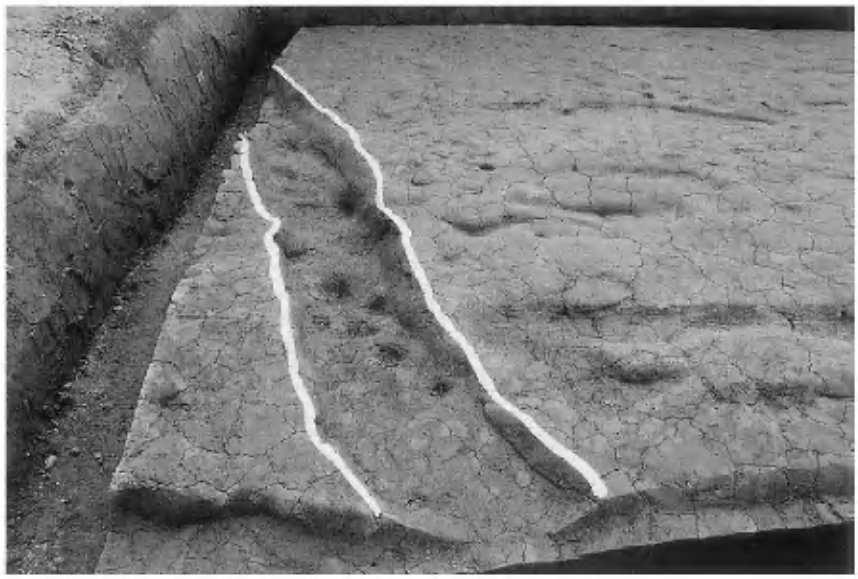
（１）ａ毛利光俊彦「古墳出土銅鋺の系譜」『考古学雑誌』第64巻　第１号　1978年
　　ｂ毛利光俊彦「青銅容器・ガラス容器」『古墳時代の研究　第８巻　古墳Ⅱ　副葬品』雄山閣　1991年
（２）村上幸雄ほか『糠山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980年
（３）註（１）文献
　　大嶋和則『久本古墳』高松市教育委員会　2004年
（４）註（１）ｂ文献に同じ
（５）原昭芳「銅鋺考」『長野県の考古学』(財) 長野県埋蔵文化財センター　1996年
（６）岡田博ほか『新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182　岡山県教育委員会　2004年
（７）正岡睦夫ほか「川入遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２　岡山県教育委員会　1974年

岡山県内出土銅鋺一覧表参考文献
２　註（２）文献
３　註（２）文献
　『久米町史　上巻』久米町教育委員会　1984年
４　新納泉・尾上元規ほか『定北古墳』北房町教育委員会　1995年

その他参考文献
　中野政樹「供養具」『仏教考古学講座　第５巻　仏具』雄山閣　1978年
　岡崎穣治「密教法具」『仏教考古学講座　第５巻　仏具』雄山閣　1978年
荒神西古墳出土銅鋺実測図については註（２）文献より再トレース



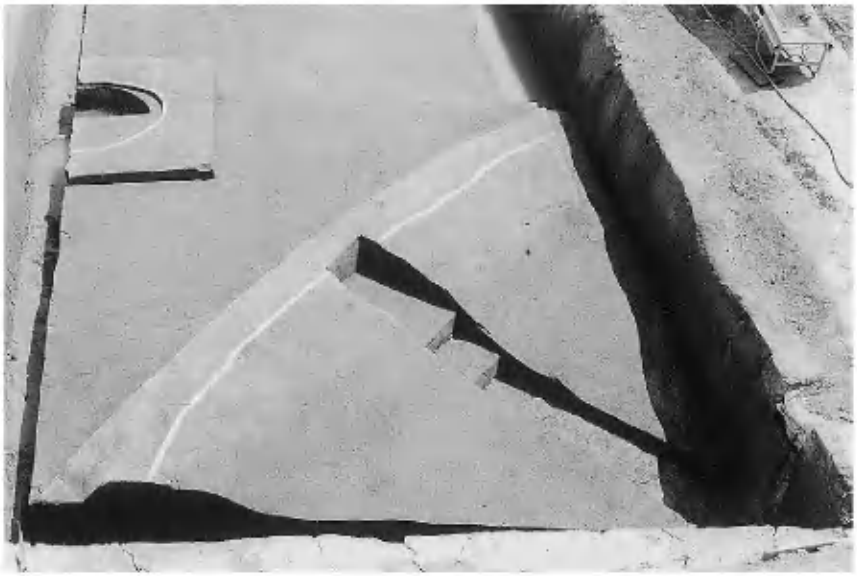
１　現耕作土除去後
調査区全景（南から）



２　溝 12（東から）

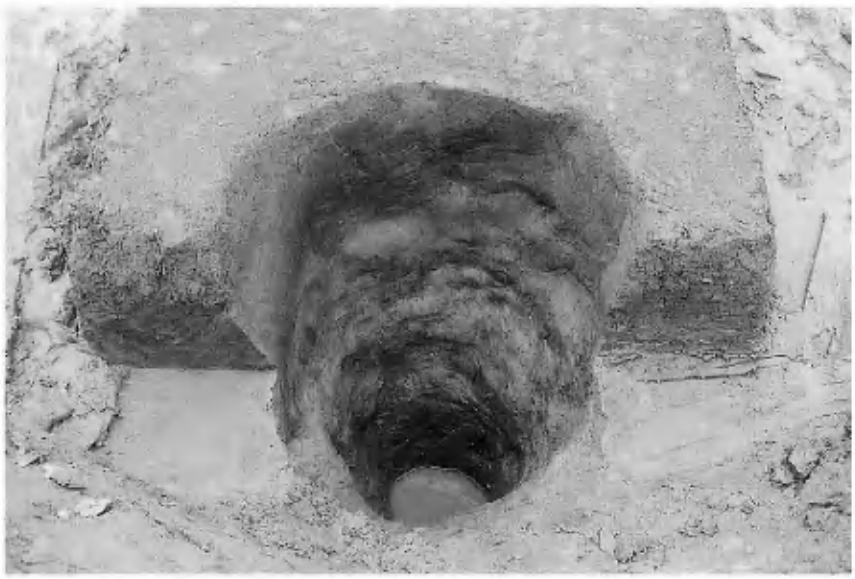
３　弥生時代遺構全景
（南から）

図版２　　仏生田遺跡１区



１　溝３（北から）

２　井戸２遺物出土状況（東から）



３　井戸２完掘状況（東から）

14

24

15

25

23

26

１　井戸２出土遺物

3

6

9

10

13

27

46

C1

1　井戸２（3～27）ほか出土遺物

１　調査前全景（南東から）

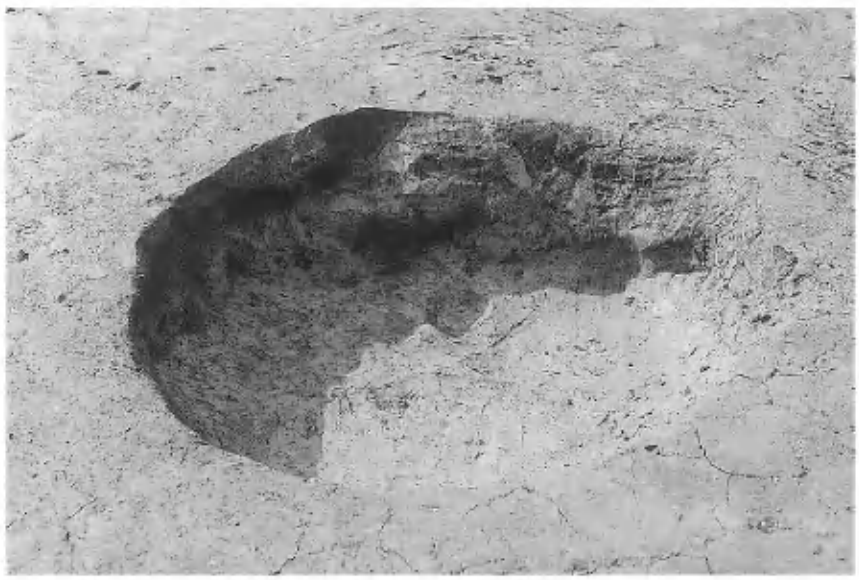
２　地上げ前土取り状況（北西から）

３　溝 24・柵状遺構東半（西から）

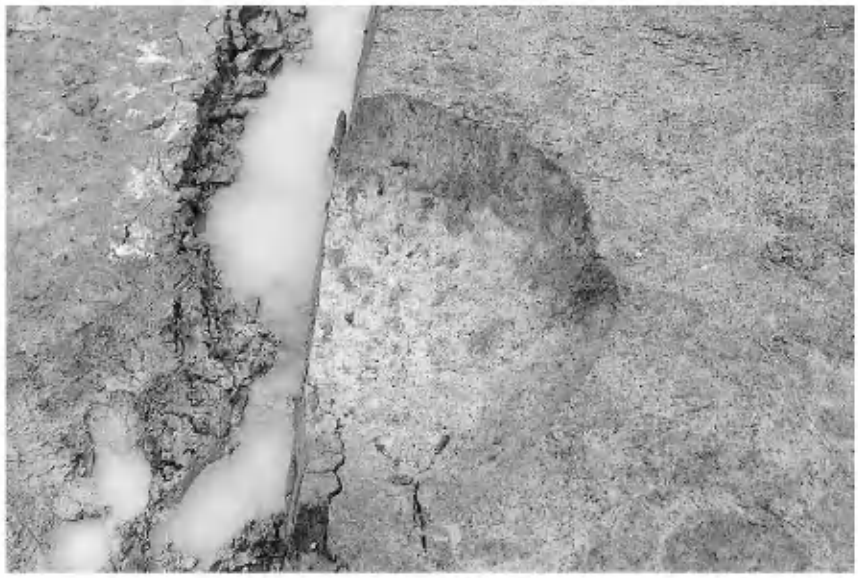
図版６　　仏生田遺跡４区

１　柵状遺構西半（西から）

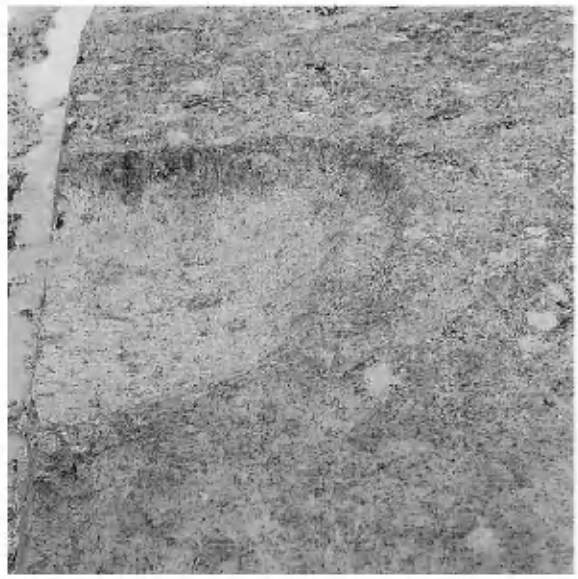
２　古代遺構全景（北西から）



３　土壙 10（南東から）

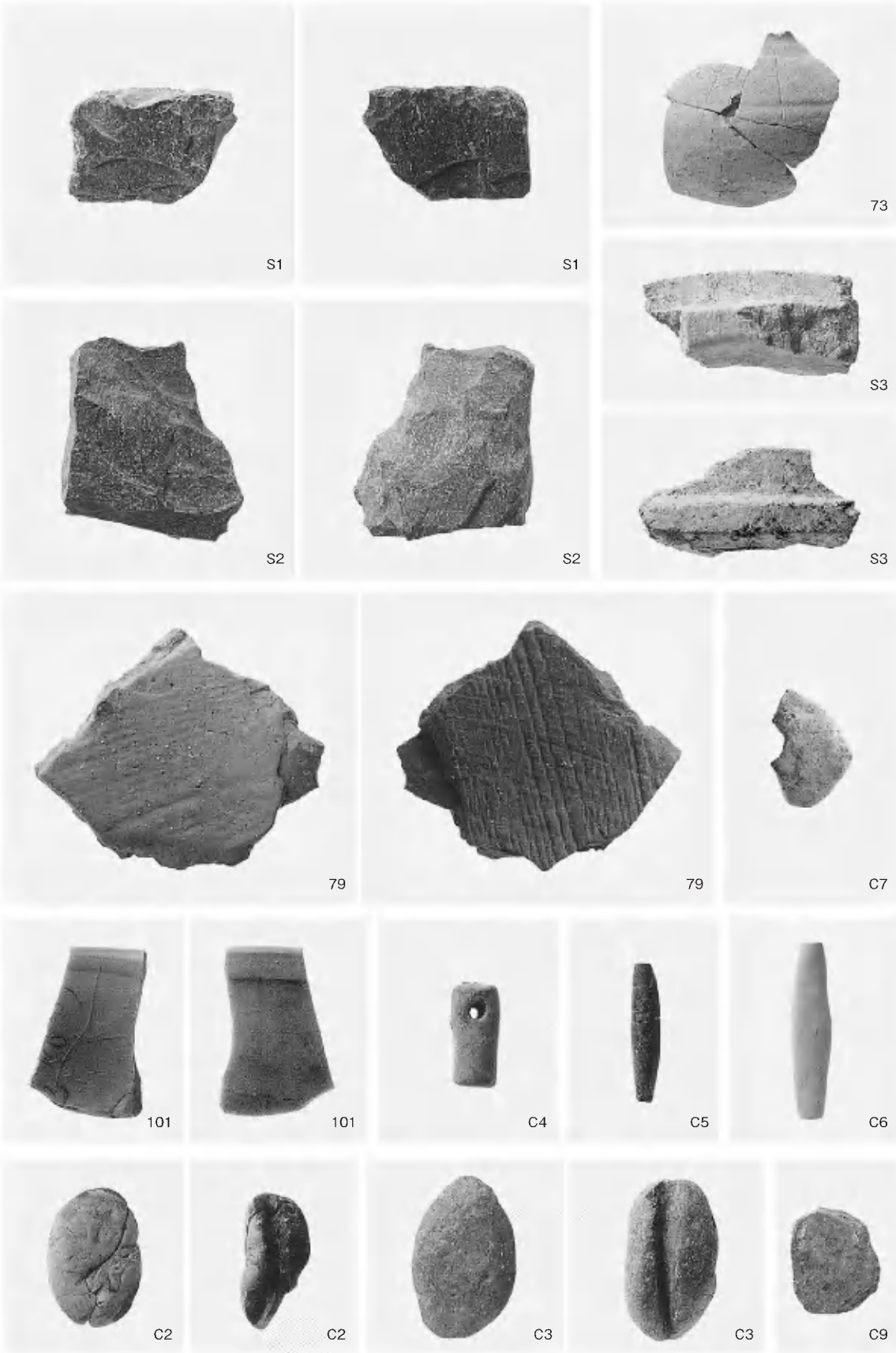


1　土壙 11（南東から）



2　土壙 12（南西から）

3　溝 23 南半（南西から）



1　仏生田遺跡４区出土遺物

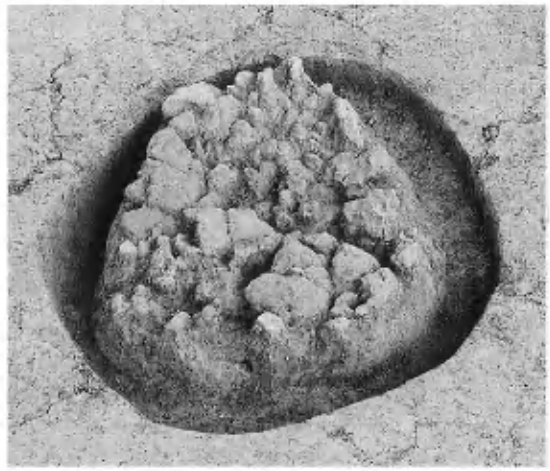
１　北西区古代柱穴群
・大溝（南から）

２　同上（東から）

３　北西区大溝遺物
（285･295）出土状況
（東から）

４　南西区古代柱穴群
・大溝（南から）

1　大溝（西から）



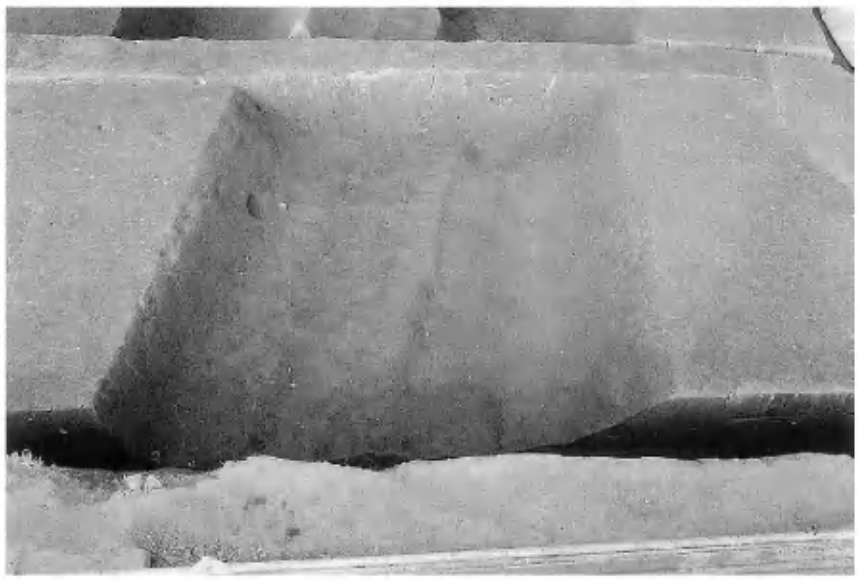
2　土壙 33（東から）（左）
3　南西区焼土塊包含柱穴（南西から）（右）

4　南西区大溝遺物（289）出土状況（西から）

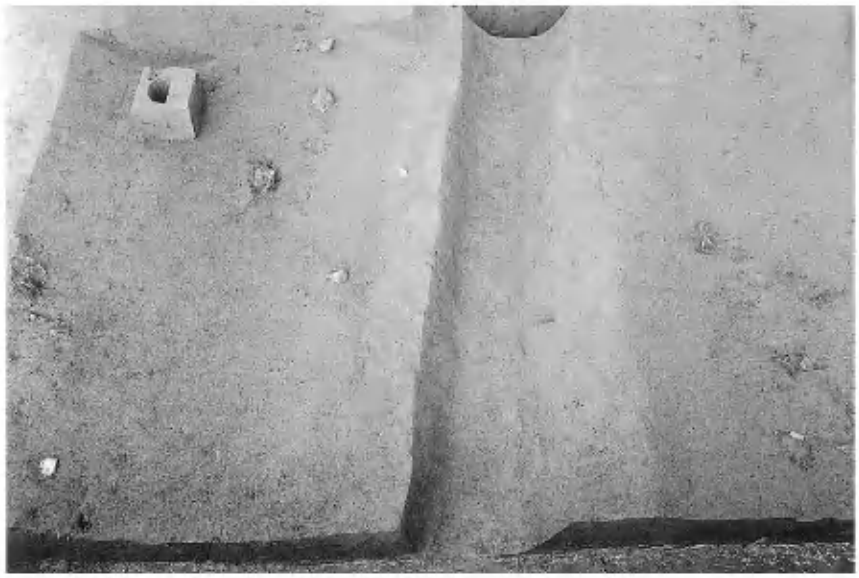
5　南西区大溝遺物（294･297）出土状況（北から）

1　北東区溝 25（南から）

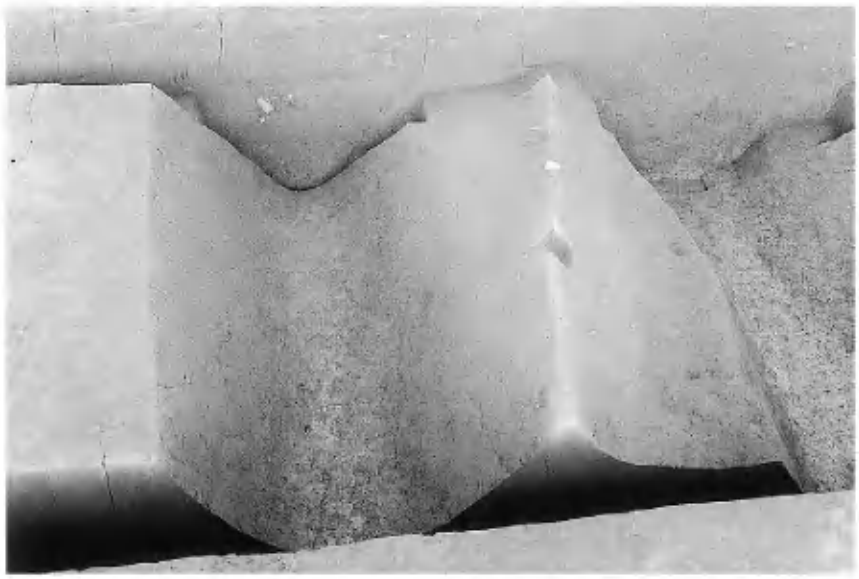
2　北東区溝５・12 と南東区溝 25（南から）



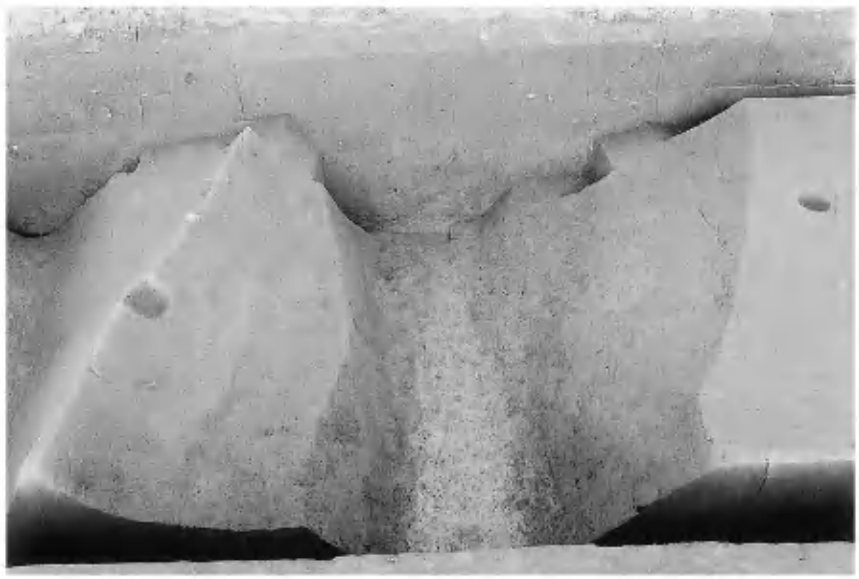
3　南東区溝 25（南から）



1　南東区溝 24（南から）



2　北東区溝 12（南から）



3　北東区溝５（南から）

1　南東区溝５・12 遺物出土状況（南西から）

2　南東区溝 12 遺物出土状況（南から）

3　南東区溝５遺物出土状況（南から）

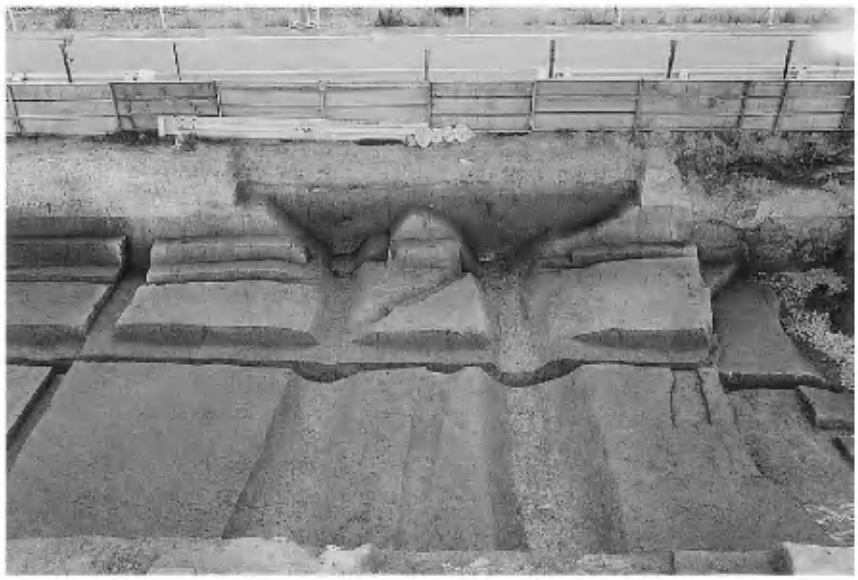
1　北東区北壁溝 12
土層断面（南から）

2　中央トレンチ溝 12
土層断面（北から）

3　北東区北壁溝５・
25 土層断面（南から）

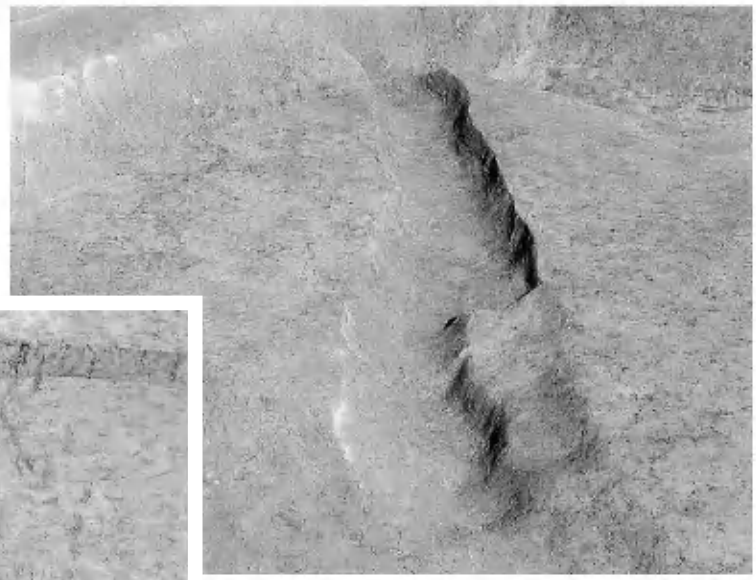
1　中央トレンチ溝５
土層断面（北から）

2　溝５（右）・溝 12
（左）（南から）



3　北東区（上半）溝
50（南から）

1　溝 51・溝 52（西から）



2　北東区溝 50（南西から）

3　南東区溝 49（南から）

112

161

131

137

134

164

１　溝５出土遺物

117

186

193

S4

S4

194

195

196

1　溝５（117）・微高地東端（186）・土壙 33（193）・溝 12（その他）出土遺物

214

268

269

213

229

200

232

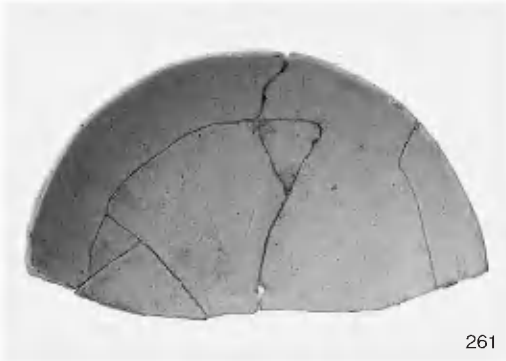
242

1　溝 12 出土遺物

247

248

275


261

257

285

294

295

1　溝 12（247 ～ 275）・大溝（その他）出土遺物

302

362

331

368

332

348

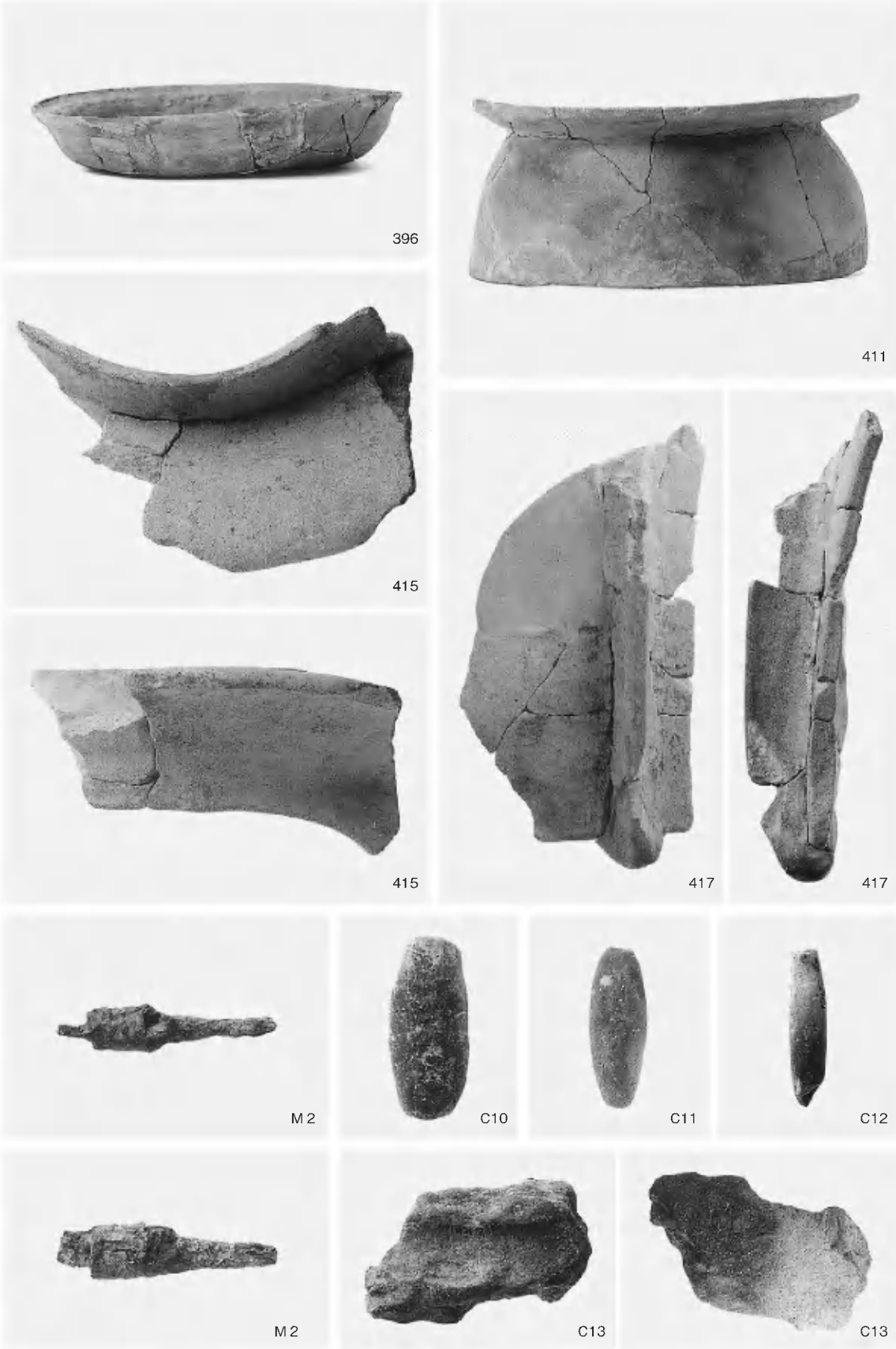
385

369

367

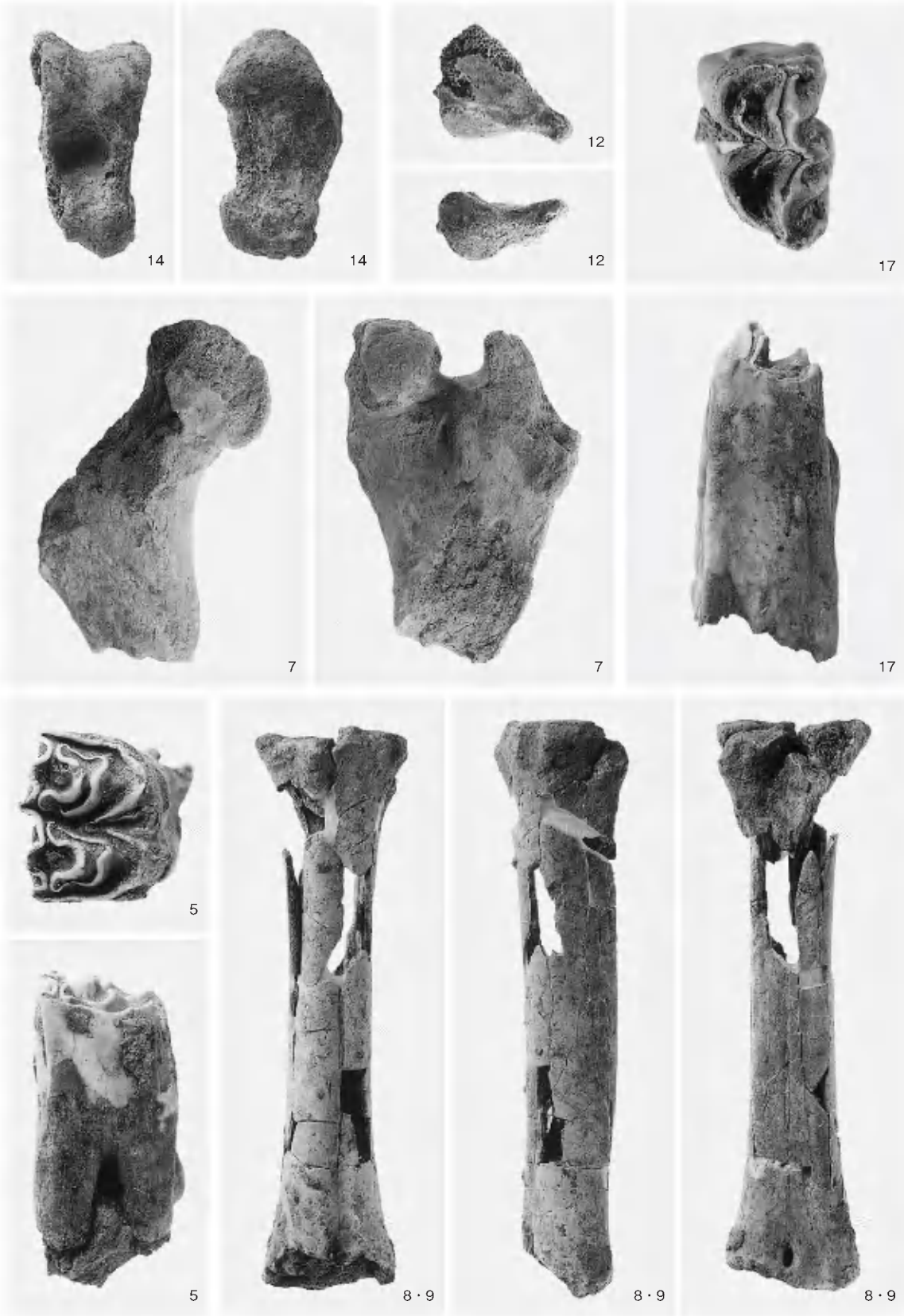
386

1　溝 25 出土遺物



1　溝 25（396 ～ 417）・包含層出土遺物

1　溝 24・25 出土獣骨　ニホンジカ（２・３：角　１：下顎骨　13：肩甲骨　16：基節骨　４：脛骨）



1　溝 25 出土獣骨　ニホンジカ（14：距骨）　イヌ（12：頸骨）　ウシ（７：大腿骨　17：上顎Ｍ３
５：上顎Ｍ２・３　８・９：中足骨）

報告書抄録

ふ り が な	ぶしょうでんいせき　　なかなつかわいせき
書　　名	仏生田遺跡２・中撫川遺跡２
副 書 名	一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査
巻　　次	Ⅱ
シ リ ー ズ 名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	２０２
編 著 者 名	岡本寛久・稲谷知子
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター
所 在 地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL086-293-3211
発 行 機 関	岡山県教育委員会
所 在 地	〒700-0824　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL086-224-2111
発 行 年 月 日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	岡山県	市町村	遺跡番号					
仏生田遺跡 １区	岡山市 納所224	201	332012101	34°39'22"	133°50'22"	2004.4.7 ～ 2004.5.20	86	一般県道吉備津松島線道路改築工事
仏生田遺跡 ４区	岡山市 納所 165-1	201	332012101	34°39'8"	133°50'27"	2004.4.13 ～ 2004.6.29	680	
中撫川遺跡 ４区	岡山市 中撫川 437-1	201	332012159	34°39'1"	133°50'36"	2004.12.15 ～ 2005.2.22	230	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仏生田遺跡 １区	集落 水田	弥生・古墳時代 中世	井戸・溝 水田跡	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・木器	井戸内に一括土器
仏生田遺跡 ４区	集落 水田	弥生・古墳時代 古代・中世	溝・土壙・土手状遺構 柵状遺構・水田跡	弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・輸入磁器・陶磁器・瓦・石器・土錘・石鍋	微高地端（古代水田境）検出
中撫川遺跡 ４区	集落	弥生・古墳時代 古代・中世	溝・土壙・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・輸入磁器・陶磁器・瓦・転用硯・銅鋺・鉄刀子・石器・土錘・羽口・鉄滓・獣骨	銅鋺・転用硯出土

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 202

仏生田遺跡２
中撫川遺跡２

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査Ⅱ

平成18年３月20日　印刷
平成18年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2

古紙配合率100%再生紙を使用しています